

平野遺跡 2
牛頸塚原遺跡群 2
牛頸日ノ浦遺跡群 2
牛頸屏風田遺跡 2

大野城市文化財調査報告書 第217集

2024

大野城市

ひらの いせき

平野遺跡 2

うしくびつかはら いせきぐん

牛頸塚原遺跡群 2

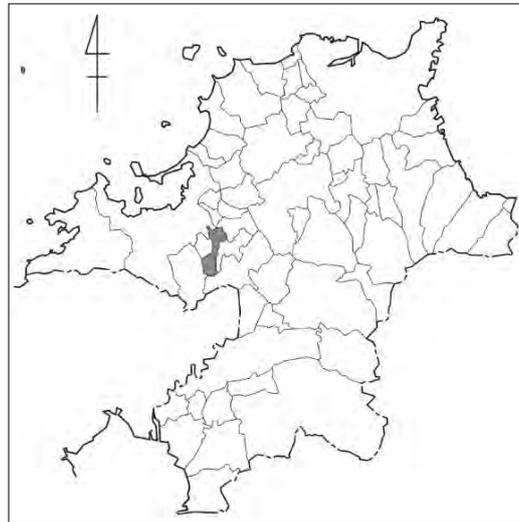
うしくびひのうら いせきぐん

牛頸日ノ浦遺跡群 2

うしくびびょうぶた いせき

牛頸屏風田遺跡 2

大野城市文化財調査報告書 第217集



2024

大野城市

序

大野城市は福岡平野の南部に位置し、北に大城山、南に背振山系が広がる南北に細長いひょうたん形をしています。豊かな自然にくわえ、特別史跡大野城跡をはじめ数多くの遺跡が所在する歴史にも恵まれた街です。

今回報告するのは、平野遺跡、牛頸塚原遺跡群Ⅰ区、牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査地点、牛頸屏風田遺跡第3・4次調査地点です。これらの遺跡は牛頸川と平野川が合流する平野神社周辺に所在します。牛頸塚原遺跡群や日ノ浦遺跡群では、古墳時代の墳墓や溝が確認されました。牛頸屏風田遺跡では、主に平安時代の人々の活動の痕跡を確認できました。一方、平野遺跡では平安時代の遺構に加え、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構や遺物が確認されました。これらの遺跡が所在する地では10世紀の終わりごろに平野神社が創建されたと伝わっています。平野神社の創建をはさんで、古墳時代から中世・室町時代までの長期間にわたる周辺での土地利用が次第に明らかになりつつあるものといえるでしょう。

本報告書により発掘調査の成果が、今後教育や研究の面におきまして広く活用していただけることを願っております。

最後に発掘調査に際してご理解、ご協力をいただいた地権者をはじめとする関係各位、また多くのご指導を賜りました皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月31日

大野城心のふるさと館
館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した平野遺跡第1次調査、牛頸塚原遺跡群I区、牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査、牛頸屏風田遺跡第3・4次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、S A：柵・土塁・塀、S B：掘建柱建物、S C：竪穴住居跡、S D：溝、S E：井戸、S F：道路状遺構、S H：広場、S J：甕棺墓、S K：土坑、S P：ピット、S R：祭祀遺構、S T：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、S X：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は、平野遺跡・牛頸塚原遺跡群・牛頸日ノ浦遺跡群を徳本洋一、牛頸屏風田遺跡を早瀬賢が担当した。
6. 遺構写真は、各調査担当者が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社（牛嶋茂）が撮影した。
8. 遺構図面の作成は、大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構図の方位は、牛頸屏風田遺跡第4次調査は座標北、その他の調査は磁北を表す。
10. 遺物実測図は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・眞田萌世・津田りえ・仲村美幸・氷室優・松本友里江が作成した。
11. 製図は、小嶋が作成した。
12. 拓本は、小畑・篠田・氷室・松本・眞田が作成した。
13. 観察表は、小嶋が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1／25,000地形図『福岡南部』を使用した。
15. 発掘調査で出土した遺物の分類基準は、以下の文献を参考とした。

中島恒次郎 1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

中世土器研究会編 2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編一』

江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房

山本信夫 1990「統計上の土器」『乙益重隆先生九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

備前市教育委員会 2013『備前窯詳細分布調査報告書（備前市埋蔵文化財調査報告 11）』備前市教育委員会
16. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市が管理・保管している。
17. 本書の執筆・編集は石川がおこなった。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査体制	
II. 位置と環境	3
III. 平野遺跡―第1次調査―	
1. はじめに	7
2. 調査の成果	
(1) 調査の概要	7
(2) 遺構と遺物	8
3. まとめ	25
IV. 牛頸塚原遺跡群―I区調査―	
1. はじめに	27
2. 調査の成果	
(1) 調査の概要	27
(2) 遺構と遺物	27
3. まとめ	31
V. 牛頸日ノ浦遺跡群―第2次調査―	
1. はじめに	33
2. 調査の成果	
(1) 調査の概要	34
(2) 遺構と遺物	35
3. まとめ	43
VI. 牛頸屏風田遺跡―第3・4次調査―	
1. はじめに	45
2. 第3次調査の成果	
(1) 調査の概要	45
(2) 遺構と遺物	46
(3) 小結	49
3. 第4次調査の成果	
(1) 調査の概要	49
(2) 遺構と遺物	49

(3) 小結	55
4. まとめ	58

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	5
第2図	各遺跡と調査区の位置 (S=1/6,000)	6
第3図	平野遺跡第1次調査区 遺構配置図 (S=1/150)	7
第4図	竪穴状遺構実測図 (S=1/80)	8
第5図	竪穴状遺構出土遺物実測図 (S = 1/3)	10
第6図	SB01 実測図 (S=1/60) と出土遺物実測図 (30 は S=1/2、29 は S=1/3)	11
第7図	SB02 実測図 (S=1/60)	12
第8図	SB02 出土遺物実測図 (S=1/3)	12
第9図	SB03 実測図 (S=1/60)	13
第10図	SB03 出土遺物実測図 (S=1/3)	13
第11図	SK01 実測図 (S=1/40)	14
第12図	SK01、02 出土遺物実測図 (52 は S=1/1、その他は S=1/3)	14
第13図	SK02 実測図 (S=1/40)	15
第14図	ピット出土遺物実測図 (S=1/3)	17
第15図	その他の出土遺物実測図1 (S=1/3)	19
第16図	その他の出土遺物実測図2 (S=1/3)	20
第17図	牛頸塚原遺跡群I区 遺構配置図 (S=1/150)	28
第18図	30号墳とSD02 実測図 (S=1/60)	29
第19図	30号墳実測図 (S=1/60)	29
第20図	SD01 断面実測図 (S=1/60)	30
第21図	SD03 実測図 (S=1/60)	30
第22図	SK01、02、03 実測図 (S=1/60)	31
第23図	牛頸塚原遺跡群I区と周辺調査区 (S=1/600)	32
第24図	牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査区位置図 (S=1/2,000)	33
第25図	牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査区 トレンチ配置図 (S=1/800)	34
第26図	北区・第1トレンチ (S=1/200)	34
第27図	中央区・第2トレンチ遺構配置図 (S=1/100)	35
第28図	中央区・第2トレンチ SD01 実測図 (S=1/60)	36
第29図	中央区・第2トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)	37
第30図	南区・第3トレンチ遺構配置図 (S=1/80)	38

第31図	南区・第3トレンチ SD01 実測図 (S=1/60)	38
第32図	南区・第3トレンチ SD01 出土遺物実測図 (S=1/3)	39
第33図	南区・第3トレンチ ピットおよびその他の出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第34図	牛頸日ノ浦遺跡群における大溝とSD01 (S=1/2,000)	43
第35図	牛頸屏風田遺跡第3次調査区遺構配置図 (S=1/100)	45
第36図	第3次調査 SB01 実測図 (S=1/60)	46
第37図	第3次調査 SB02 実測図 (S=1/60)	47
第38図	第3次調査 SB02 出土遺物実測図 (S=1/3)	47
第39図	第3次調査 ピットおよびその他の出土遺物実測図 (S=1/3)	48
第40図	牛頸屏風田遺跡第4次調査区遺構配置図 (S=1/150)	50
第41図	第4次調査 SX02 実測図 (S=1/40)	51
第42図	第4次調査 SX02、03、05、06 出土遺物実測図 (S=1/3)	52
第43図	第4次調査 SX03、05、06 実測図 (S=1/40)	53
第44図	第4次調査 ピット出土遺物実測図 (S=1/3)	54
第45図	第4次調査 その他の出土遺物実測図 (175・176はS=1/2、その他はS=1/3)	55

表 目 次

表1	平野遺跡第1次調査出土遺物観察表①	21
表2	平野遺跡第1次調査出土遺物観察表②	22
表3	平野遺跡第1次調査出土遺物観察表③	23
表4	平野遺跡第1次調査出土遺物観察表④	24
表5	牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査出土遺物観察表①	41
表6	牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査出土遺物観察表②	42
表7	牛頸屏風田遺跡第3次調査出土遺物観察表	56
表8	牛頸屏風田遺跡第4次調査出土遺物観察表	57

図 版

- 図版 1 (1) 平野遺跡調査区全景 1 (南から)
(2) 平野遺跡調査区全景 2 (南東から)
- 図版 2 (1) 平野遺跡調査区全景 3 (東から)
(2) 平野遺跡 竪穴状遺構 (南西から)
- 図版 3 (1) 平野遺跡 竪穴状遺構セクション
(2) 平野遺跡 SK01 (南東から)
(3) 平野遺跡 SK02 (南東から)
- 図版 4 平野遺跡出土遺物 1
- 図版 5 平野遺跡出土遺物 2
- 図版 6 (1) 牛頸塚原遺跡群 I 区北半部全景 (西から)
(2) 牛頸塚原遺跡群 I 区南半部全景 (西から)
(3) 牛頸塚原遺跡群 30 号墳 (北西から)
- 図版 7 (1) 牛頸日ノ浦遺跡群 中央トレンチ全景 1 (南西から)
(2) 牛頸日ノ浦遺跡群 中央トレンチ全景 2 (南東から)
- 図版 8 (1) 牛頸日ノ浦遺跡群 南トレンチ全景 1 (南西から)
(2) 牛頸日ノ浦遺跡群 南トレンチ全景 2 (南から)
- 図版 9 (1) 牛頸日ノ浦遺跡群 中央トレンチ SD01 全景 (南から)
(2) 牛頸日ノ浦遺跡群 中央トレンチ SD01 土層 (南から)
(3) 牛頸日ノ浦遺跡群 南トレンチ SD01 全景 (左、北から) と
遺物出土状況 (右、東から)
- 図版 10 牛頸日ノ浦遺跡群出土遺物
- 図版 11 (1) 牛頸屏風田遺跡第 3 次調査区遠景 (北から)
(2) 牛頸屏風田遺跡第 3 次調査区全景 (北東から)
- 図版 12 (1) 牛頸屏風田遺跡第 3 次調査 SB01 (北西から)
(2) 牛頸屏風田遺跡第 3 次調査 SB02 (北西から)
- 図版 13 (1) 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査区全景 (南から)
(2) 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査区北部全景 (南から)
- 図版 14 (1) 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査 SX02 周辺 (北から)
(2) 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査 SX03 遺物出土状況 (南西から)
- 図版 15 (1) 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査 SX05、06 周辺 (西から)
(2) 牛頸屏風田遺跡第 3、4 次調査出土遺物
- 図版 16 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査出土遺物

I. はじめに

1. 調査体制

本書で報告する、平野遺跡第1次調査、牛頸塚原遺跡群I区調査、牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査、屏風田遺跡第3・4次調査、それぞれの調査時および整理報告作業を行った令和5年度の調査・整理体制は以下のとおりである。

[平成4（1992）年度]（牛頸塚原遺跡群I区調査）

大野城市教育委員会

教育長	久野 英彦
教育部長	後藤 幹生
社会教育課 課長	關 隆昭
課長補佐	白水 岩人
文化財担当	舟山 良一
	浦山 敏弘
主任技師	向 直也
	徳本 洋一
嘱託	秀島 和子

[平成14（2002）年度]（平野遺跡第1次調査）

大野城市教育委員会

教育長	堀内 貞夫
教育部長	鬼塚 春光
社会教育課 課長	秋吉 正一
文化財担当係長	舟山 良一
主任技師	徳本 洋一、石木 秀啓、丸尾 博恵、林 潤也
主事	大道 和貴
嘱託	平島 義孝、島田 拓、岸見 泰宏、上田 恵
	元吉 知子

[平成 16 (2004) 年度] (牛頸日ノ浦遺跡群第 2 次調査)

大野城市教育委員会

教育長 古賀 宮太
教育部長 鬼塚 春光
社会教育課 課長 秋吉 正一
文化財担当係長 舟山 良一
主査等 石木 秀啓、緒方 一幹、徳本 洋一、丸尾 博恵
林 潤也、早瀬 賢
嘱託 一瀬 智、井上 愛子、西堂 将夫

[平成 20 (2008) 年度] (牛頸屏風田遺跡第 3・4 次調査)

大野城市教育委員会

教育長 古賀 宮太
教育部長 盛岡 勉
ふるさと文化財課 課長 舟山 良一
文化財担当係長 中山 宏
主査等 石木 秀啓、徳本 洋一、丸尾 博恵、林 潤也
早瀬 賢、上田 龍児
嘱託 石川 健、遠藤 茜、大里 弥生、甲斐 康大、中島 圭

[令和 5 (2023) 年度]

市 長 井本 宗司
地域創造部長 日野 和弘
大野城市心のふるさと館
心のふるさと館長 赤司 善彦
文化財担当課長 石木 秀啓
文化財担当係長 林 潤也、上田 龍児
主任主事 下川 みお
主任技師 龍 友紀、山元 瞭平
会計年度任用職員 澤田 康夫、石川 健、深町 美佳、山村 智子、尾川 絢香
清水 康彰、藤田 香
小畑 貴子、古賀 栄子、小嶋 のり子、眞田 萌世、篠田 千恵子
津田 りえ、仲村 美幸、氷室 優、松本 友里江

Ⅱ. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれたヒョウタンのような形を呈する。市域の南側には、牛頸山とそこから派生する低丘陵が広がる。牛頸山は背振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、牛頸川や足洗川、平野川など中小の河川の開析作用によって無数の谷が形成されている。

以下の報告対象遺跡である平野遺跡は、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置し、屏風田遺跡は牛頸川東岸に面する低丘陵の裾部に位置する。牛頸塚原遺跡群、牛頸日ノ浦遺跡群は牛頸川西岸、河岸段丘上の微高地に立地する。

2. 歴史的環境

今回報告対象とした諸遺跡はいずれも大野城市の南部に位置する。市域南部ではこれまで旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く確認されている。以下では旧石器時代以降中世にかけての周辺遺跡を概観したい。

旧石器時代 大野城市内では、釜蓋原遺跡・雉ヶ尾遺跡など市北部に位置する遺跡に加え、出口遺跡や横峰遺跡などで旧石器時代の遺物が確認されている。市北部の乙金山・四王寺山や南部の牛頸山からのびる丘陵上を主な生活の場としていたことが知られる。

縄文時代 本堂遺跡や塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群などで縄文時代の遺構・遺物が確認されている。本堂遺跡では、遺構は確認されていないものの縄文時代早期の撚糸文土器や押型文土器が出土している。塚原遺跡群では、後期後半の土坑や晩期の竪穴住居跡、日ノ浦遺跡では、後期末から晩期前半の竪穴住居跡や土坑が確認されている。

弥生時代 弥生時代に入ると遺跡数は増加し、御笠川や牛頸川流域を中心とする平野部に多くなる。周辺遺跡としては、本堂遺跡、日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では早期から後期にかけての竪穴住居跡や溝などが確認されている。また本堂遺跡のすぐ東に隣接する上園遺跡では中期後半の竪穴住居跡が確認され、本堂遺跡を中心とする集落が展開していたものといえる。また、日ノ浦遺跡では、甕棺墓や土坑墓が検出されている。

古墳時代 5世紀後半に塚原古墳群で造墓が始まり、新たな群集墳が営まれる。6世紀以降には遺跡数が増加する。6世紀中頃には、牛頸窯跡群の操業が開始される。野添遺跡群と本堂遺跡において、牛頸窯跡群最古相の窯跡が確認されている。6世紀末から7世紀前半になると、窯の基数が大幅に増加し、牛頸窯跡群特有の「多孔式煙道」が登場する。また、小田浦窯跡群や月ノ浦遺跡では、瓦陶兼業窯が確認されており、生産した瓦は那津官家と想定される福岡市那珂遺跡群へ供給されている。

集落としては、上園遺跡や塚原遺跡群などがあげられる。上園遺跡では、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物、ロクロピットなどが確認されている。焼歪んだ須恵器や粘土塊などが出土することから、須恵器工人の集落と考えられている。塚原遺跡群では、後期の竪穴住居跡や掘立柱建物が確認されて

いる。古墳としては、後田古墳群、小田浦古墳群、塚原古墳群などがあげられる。後田古墳群は後期から終末期にかけて築造・追葬が行われ、小田浦古墳群は後期に築造された。両古墳群から窯を掘るための道具である鉄製 U 字型鋤先が出土しており、被葬者は須恵器工人であったと推測される。塚原古墳群は 5 世紀後半以降 6 世紀にかけて墓の造営がなされる。出土遺物として鉄刀や鉄鏃などの武器類、鎌・鋤先などの農具類、ガラス小玉や管玉、銅釧などの装身具が出土した。さらに梅頭遺跡第 1 次調査 1 号窯では、窯の操業後の窯体内から鉄刀や鉄鏃、耳環などが出土しており、墓として転用した可能性が指摘されている。7 世紀前半から中ごろになると、窯の数が減少する。この時期に「直立煙道窯」が登場し、多孔式煙道に代わって主流となる。

奈良時代 牛頸窯跡群では、8 世紀前半を中心として最も多くの窯が操業される。ハセムシ窯跡群や井手窯跡群では、大型の窯で大甕、小型の窯で杯・皿類中心の生産が行われたようである。ハセムシ窯跡群から出土したヘラ書き須恵器には、甕を調として納めた旨が記されており、当時の税制の実態を示す重要な資料である。当該期の集落としては、本堂遺跡や日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では、掘立柱建物や竪穴住居跡、溝などが確認されている。円面硯や転用硯、墨書土器などが出土しており、寺が存在していた可能性が指摘されている。日ノ浦遺跡では、竪穴住居跡や廃棄土坑などが確認された。廃棄土坑から一括出土した須恵器は、8 世紀から 9 世紀代の編年資料として良好なものである。

平安時代 遺跡数が減少し、牛頸窯跡群も 9 世紀中頃には生産が衰退・終了へむかう。当該期の遺跡は、上園遺跡や小水城周辺遺跡、本堂遺跡などで確認されている。上園遺跡では、掘立柱建物や井戸、溝などが確認されている。小水城周辺遺跡では、掘立柱建物や土坑、溝などが確認されており、遺構検出面からは八稜鏡が出土している。本堂遺跡では 9 世紀代の遺構は確認されず、10 世紀以降に遺構が増加し、掘立柱建物や竪穴住居跡、溝などが確認されている。また、谷部からは墨書土器や呪符木簡など、祭祀遺物が多く出土している。また、この頃、上園遺跡やその周辺の天神田遺跡、谷川遺跡や上大利水城周辺遺跡、御供田遺跡などで瓦器焼成遺構や棒状土製品が多く見つかっており、瓦器生産が行われていたことが明らかになりつつある。

鎌倉～戦国時代 御笠の森遺跡や薬師の森遺跡など市域北部では遺跡が多く確認されているが、南部での遺跡数は少ない。数少ない遺跡として本堂遺跡や平野遺跡があげられる。本堂遺跡では遺構は確認されているが、平安時代ほどの盛行はみられない。平野遺跡では、掘立柱建物や土坑などが確認されている。



【春日市】

1. 平田北遺跡 2. 円入遺跡 3. 春日平田遺跡 4. 春日平田西遺跡 5. 春日平田東遺跡 6. 浦ノ原窯跡群
 7. 白水池古墳群 8. イゲ谷古墳群

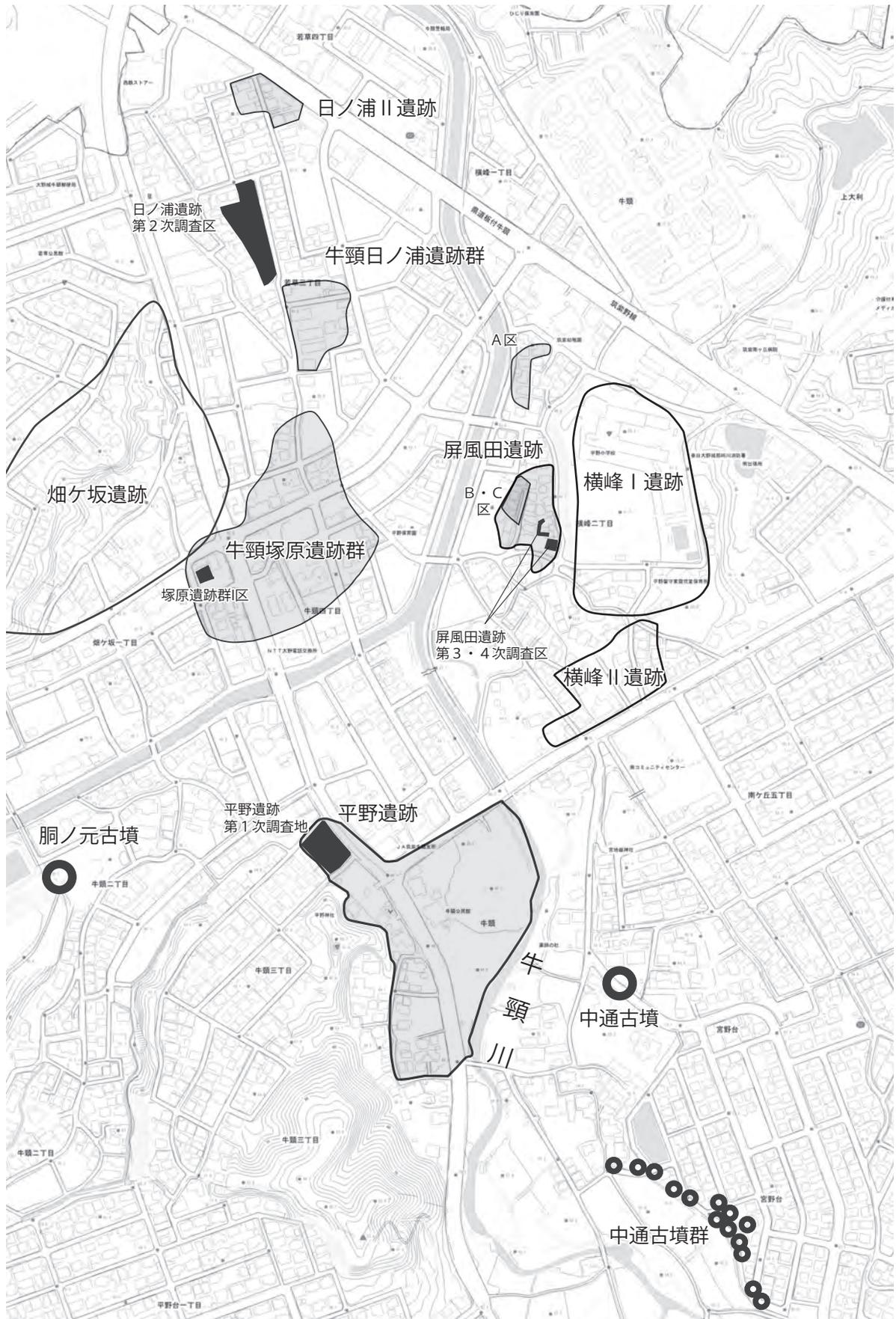
【大野城市】

9. 梅頭遺跡群 10. 本堂遺跡 11. 上園遺跡 12. 矢倉遺跡 13. 小水城周辺遺跡 14. 上大利小水城跡
 15. 谷蟹遺跡群 16. 野添遺跡 17. 野添窯跡群 18. 花無尾遺跡 19. 平田1・2号窯跡 20. 横峰I遺跡
 21. 横峰II遺跡 22. 屏風田遺跡 23. 日ノ浦遺跡群 24. 塚原遺跡群 25. 畑ヶ坂遺跡 26. 下野原遺跡
 27. 月ノ浦遺跡 28. 正楽寺跡 29. 胴ノ元古墳 30. 胴ノ元窯跡 31. 胴ノ元遺跡 32. 大行事遺跡
 33. 平野遺跡 34. 城ノ山窯跡・不動城跡 35. 中通古墳 36. 中通遺跡 37. 中通古墳群
 38. 中通窯跡群 39. ハセムシ窯跡群 40. 長者原遺跡群 41. 笹原遺跡群 42. 足洗川遺跡群 43. 井手遺跡群
 44. 原窯跡 45. 原浦遺跡群 46. 大谷遺跡群 47. 石坂窯跡群 48. 後田遺跡群 49. 小田浦遺跡群

【太宰府市】

50. 神ノ前遺跡 51. 宮ノ本遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 各遺跡と調査区の位置 (S=1/6,000)

Ⅲ. 平野遺跡—第1次調査—

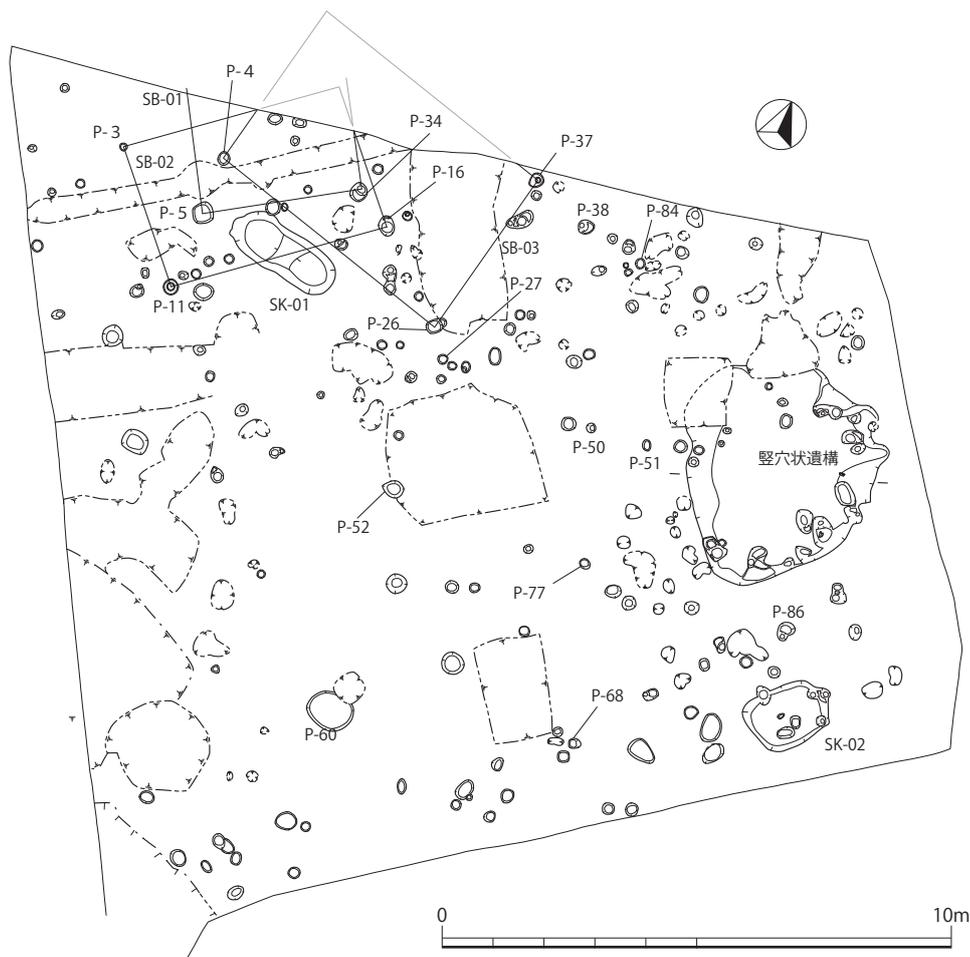
1. はじめに

平野遺跡は、大野城市の南部にあたり、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置する（第2図）。調査地は牛頸3丁目15・17で、周知の埋蔵文化財包蔵地「平野遺跡」の範囲にあたる。対象地での住宅・病院建設が予定されたことにより、平成14年6月28日に試掘調査を行った。その結果を踏まえ、平成14年7月18日から8月22日にかけて発掘調査を実施した。

2. 調査の成果

(1) 調査の概要（第3図、図版1・2）

平野遺跡第1次調査地点は、大野城市牛頸3丁目15・17に所在する。上記のように住宅および病院施設の建設が計画されたため、平成14年6月28日に試掘を行った。その結果、遺構が検出されたため、事業対象地1537㎡のうち遺構が残存する範囲約400㎡の発掘調査を実施した。



第3図 平野遺跡第1次調査区 遺構配置図 (S=1/150)

発掘調査地点は、牛頸川と平野川によって形成された河岸段丘上に位置し、標高約 48.0m を測る。調査地点の南東には第 2 次調査地点が位置する。

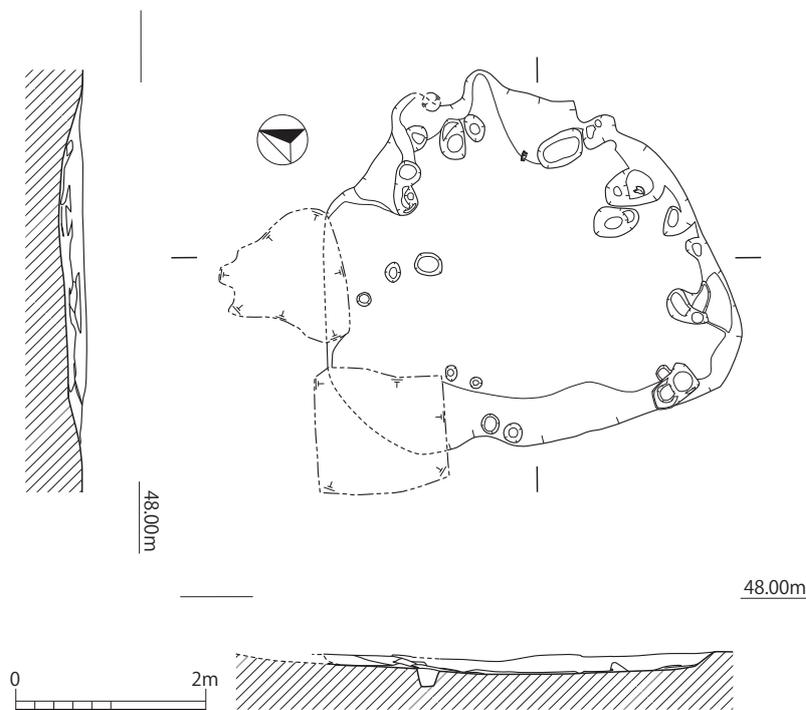
調査地は現地表面下に盛土（40～50cm）、黄色土（30cm）が堆積し、現地表面から 40～80cm で石英粒を含む黄色土にいたる。この石英粒を含む黄色土層を遺構検出面とした。調査の結果、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 3 棟、土坑 2 基、ピット多数を検出した。竪穴状遺構はほぼ楕円形を呈し、5.0×3.6m ほどの規模である。この遺構からは比較的多くの遺物が出土した。掘立柱建物跡は、調査区北西部で確認された。3 棟とも一部を検出したが、さらに調査区外にのびると考えられる。そのため建物の規模など詳細はいずれも不明である。土坑は 2 基確認されたが、1 号土坑からは床面近くで古代の土師器と須恵器が出土した。2 号土坑からは遺物小片が出土した。また、調査地内北部から東半部を中心にピットを多数検出した。そのほかに包含層や攪乱からも古代から中世にかけての遺物が多く出土している。

(2) 遺構と遺物

調査地の東部中央部で 1 基の竪穴状遺構が確認された。西北部の調査区北壁沿いに一部調査区外に延びる掘立柱建物が 3 棟確認された。また、これら掘立柱建物の範囲と重なって土坑が 1 基、さらに竪穴状遺構の南東にもう一基土坑が確認された。その他にも調査区南部でやや密度が薄い、その他の範囲を中心にピットが多数確認されている。以下、遺物の出土した遺構を中心に報告する。

1) 竪穴状遺構（第 4 図、図版 2・3）

調査地の東部に位置する。遺構の北側は攪乱により削平されている。平面プランは、一部攪乱で不明な部分もあるが、略北-南方向に長軸をとる楕円形プランを呈するものと推定される。長



第 4 図 竪穴状遺構実測図 (S=1/80)

軸方向は残存部で最大 4.7m、短軸方向も 3.6m を測る。床面は浅いすり鉢状にくぼんだ形態で、検出面からの深さは最大で 29.8cm を測る。また、緩やかに立ち上がる壁沿いにピットが複数確認された。これらのピットの形態は円形、楕円形、隅丸方形など多様である。また、これの深さは 5cm 前後から 30cm 程度、最も深くて 38.0cm と全体的に浅い。遺構の壁沿いにほとんどのピットが位

置しており、遺構中央部はピットの密度は薄い。炉跡等については、床面で被熱した部分や炭化物の集中する範囲などは確認できていない。出土遺物は以下で報告する資料の他に、須恵器、弥生土器、青磁、白磁、陶器の小片が出土している。

出土遺物（第5図、図版4）

須恵器

鉢（1）鉢の口縁部片で、底部から体部が外に開く植木鉢状の形態を呈するものと考えられる。

土師器

皿（2～6）2～6は小皿である。2の底部は糸切りで、口径9.3cm、底径8.1cmに復元でき、器高は1.0cmである。3～6は糸切り後ナデである。3は口径9.0cmと底径7.0cmに復元でき、器高は1.5cmである。5は底径8.4cm、6は底径7.6cmに復元可能である。

杯（7～9）7は底部が不安定であるが、わずかに糸切り痕が残る。口径は10.8cmに復元でき、器高2.3cm、底径7.5cmである。8と9は底部外面が糸切り後ナデで、体部は回転ナデである。8は口径12.4cmに復元でき、底径7.9cm。9は口径13.2cmに復元でき、底径9.0cmである。器高は両者ともに2.6cmである。

瓦器

椀（10）瓦器椀の底部片で、高台径は7.0cmに復元できる。高台は断面台形の委縮した高台である。底部内面にミガキが残る。

磁器

椀（11～16）11～13は龍泉窯系の青磁椀である。11は幅の細い蓮弁文を外面に施す。鎬は不明瞭である。12はやや大ぶりの蓮弁文を外面に施す。弁の中心に鎬はみられない。口縁端部内外面に気泡が多くみられる。13は体部外面に鎬蓮弁文がみられるが、鎬は弁の中心からずれやや不明瞭である。釉は黄色味を帯びる。14～16は白磁椀Ⅳ類の口縁部小片で、玉縁口縁を呈する。釉が全体的にうすく、気泡もみられる。

皿（17～19）17は青磁皿の口縁から体部にかけての小片である。体部内面中位に沈線上の圏線がめぐる。体部外面には櫛目文状の施文がわずかにみられる。18は白磁である。皿の口縁部片で、口縁端部が口禿げになる。白磁皿Ⅸ類である。19も白磁皿の口縁部片で、端部が短く外反する。

壺（20）壺の底部片であろう。やや上げ底気味になり、底部外面には轆轤跡が残る。底部外面に釉が掛かるが、その上に静止糸切り状の痕跡がみられ、釉の厚さにムラがみられる。

陶器

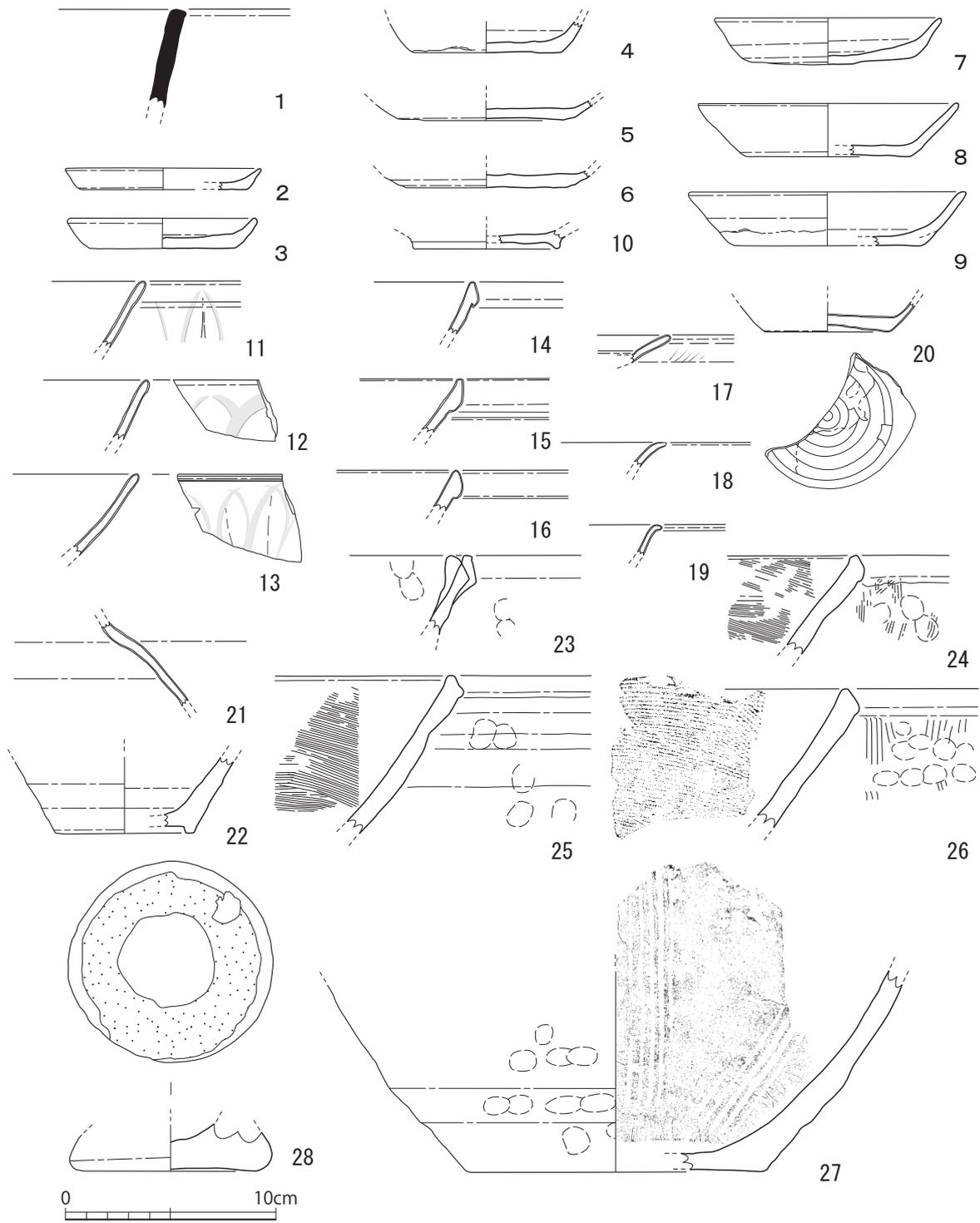
壺（21）壺の肩部小片と思われる。内外面ともに褐釉を施す。

不明（22）器種不明の陶器底部片である。底径は6.6cmに復元できる。

瓦質土器

鉢（23～27）23は片口の小片である。24～26は捏鉢あるいは鉢の口縁部片で、外面に指頭圧痕が多数残り、内面は横方向や斜方向のハケメである。27は擂鉢で、体部上半から口縁部を欠損する。外面は指頭圧痕が残り、内面は器面の磨耗が激しく擂目も一部消失しかかっている。

不明土製品（28）本来土器の底部で、胴部以上が剥落した状態と考えられる。詳細は不明である



第5図 竪穴状遺構出土遺物実測図 (S = 1/3)

ため不明土製品とした。内面はナデ、外底面はナデで黒斑がみられる。底径は9.7cmを測り、底部は厚みを持つ。

2) 掘立柱建物跡

SB01 (第6図)

調査区北西部、北壁近くに位置する。北西-南東に軸をとる。建物の柱穴は調査区外北側に続

くものと推定される。調査区内で確認されているのは梁間1間分である。梁行1.6m、桁行は不明である。掘方はいずれも円形である。

P-5は40.6×42.7cm、深さ16.7cmである。P-34は34.8×38.1cm、深さ61.3cmである。両者で掘方の深さが大きく異なる。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器、土師器（糸切り底部片含む）、黒色土器、瓦器の小片、不明鉄製品が出土している。

出土遺物（第6図）

土師器

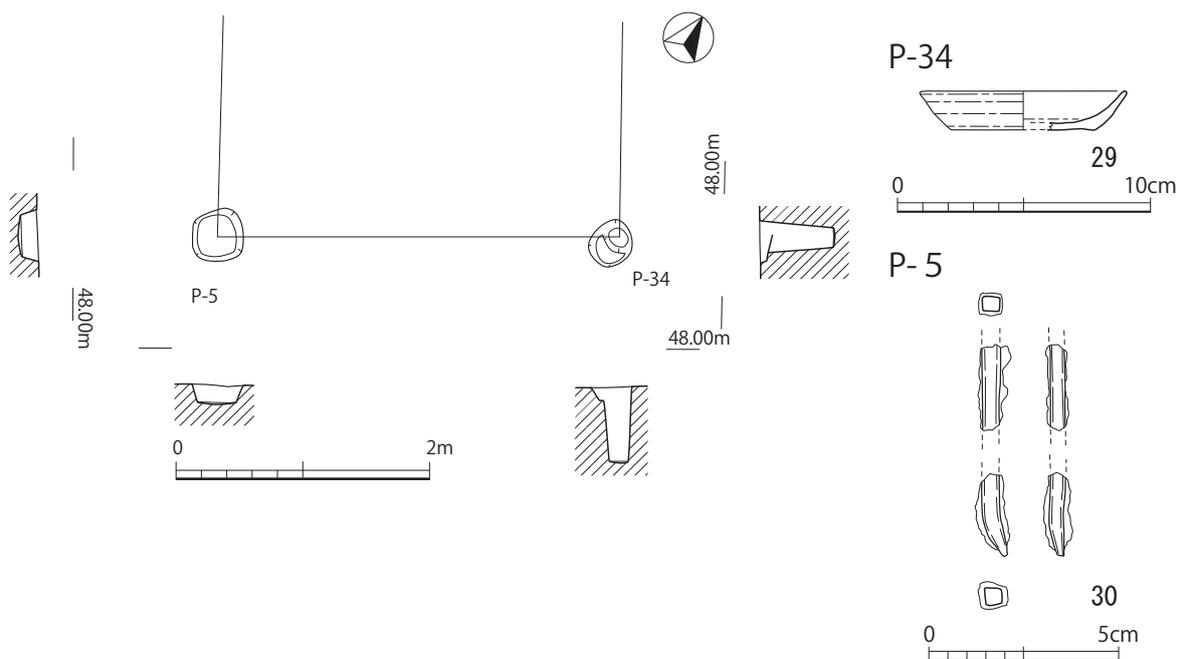
皿（29） P-34から出土した小皿である。底部は糸切り後ナデで、体部は内外面回転ナデである。口径は8.2cm、底径は5.7cmに復元でき、器高は1.6cmである。

鉄製品

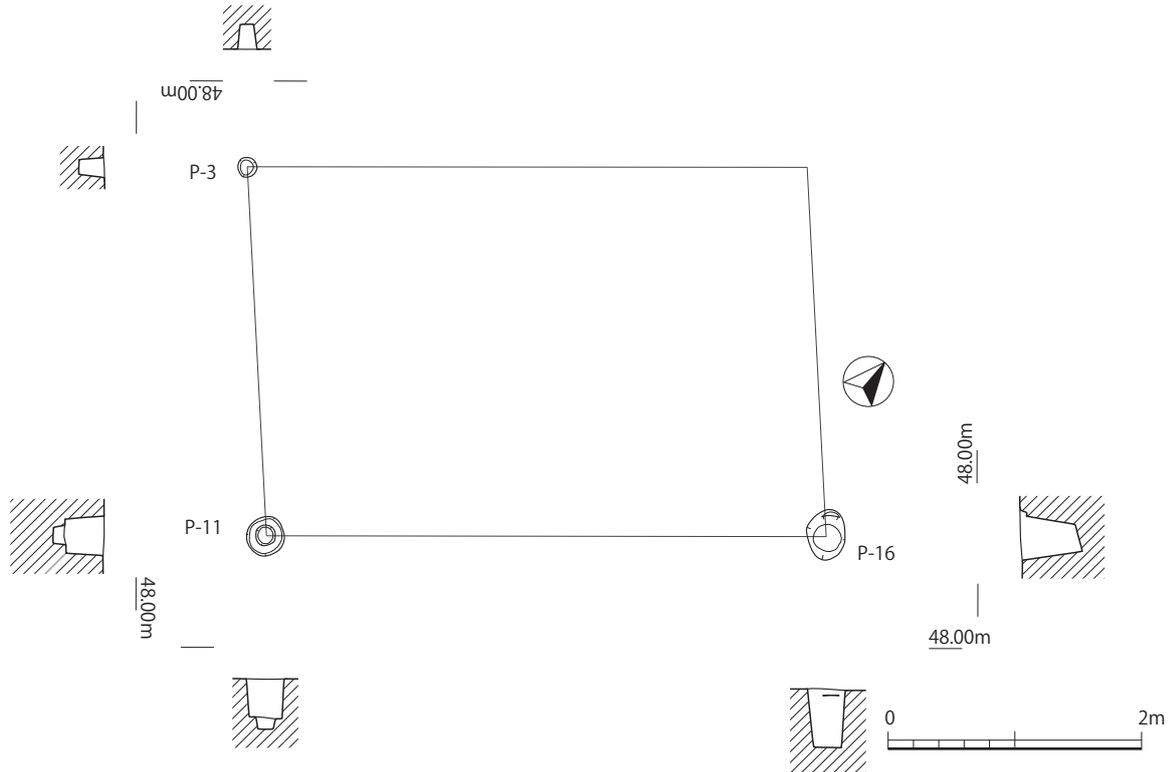
釘（30） P-5から出土した。棒状の鉄製品で、同一個体の釘と判断した。身部断面はほぼ方形で、先端部片は身部から湾曲する。重量は両片合わせて3.1gである。

SB02（第7図）

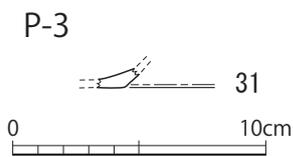
調査区北西部に位置し、北東—南西に軸をとる。建物の一部は調査区外に延びるため、1間×1間を確認できるのみである。梁行2.94m、桁行4.42mである。掘方はいずれも円形である。P-3は16.3×14.7cmで最も小さく、P-11は31.9×30.2cm、P-16は41.0×30.6cmである。掘方の深さはP-3が20.6cm、P-11が40.9cm、P-16が49.5cmである。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、鉄滓の小片が出土した。



第6図 SB01 実測図 (S=1/60) と出土遺物実測図 (30はS=1/2、29はS=1/3)



第7図 SB02 実測図 (S=1/60)



第8図 SB02 出土遺物
実測図 (S=1/3)

出土遺物 (第8図)

土師器

皿 (31) P- 3から出土した小皿の底部小片である。底部外面は糸切りである。

SB03 (第9図)

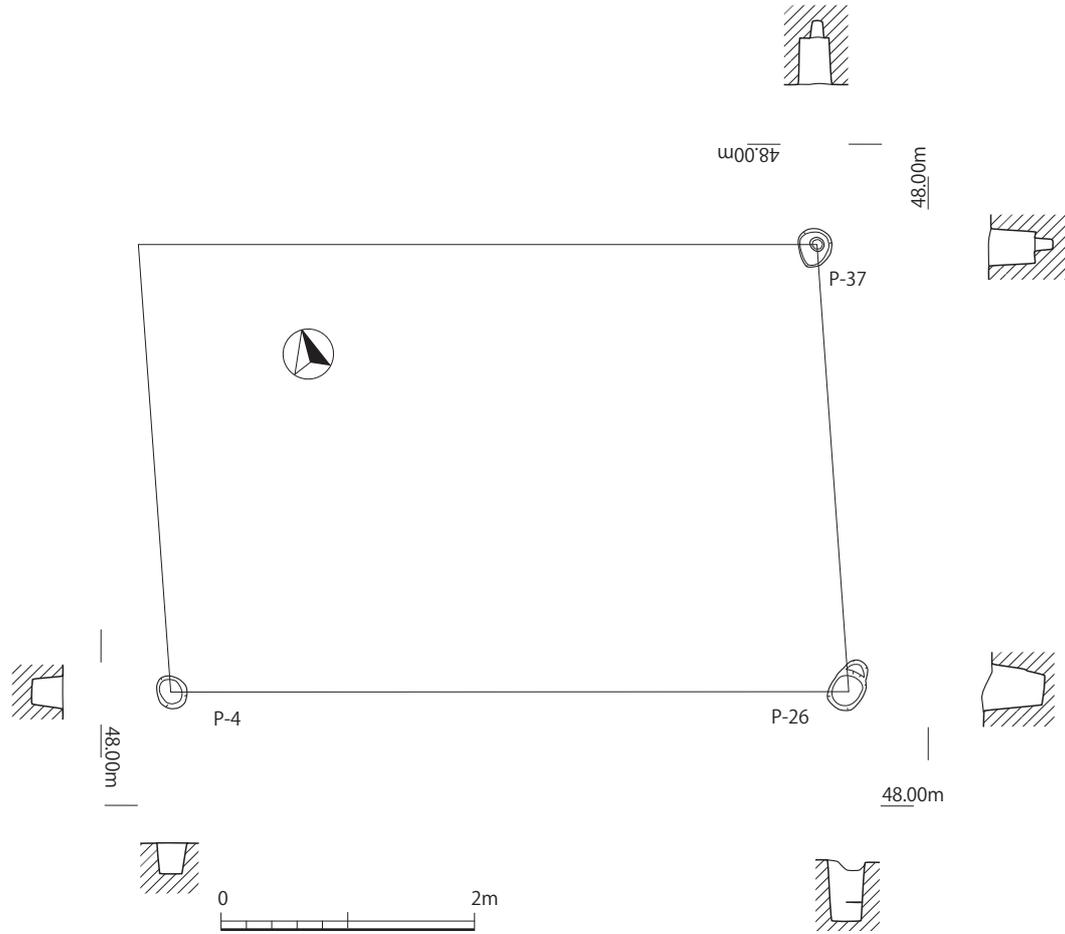
調査区北西部北壁沿いに位置し、東-西に軸をとる。付近で確認されている掘立柱建物の中で最も東側に位置する。建物の北側は調査区外となるため、1間×1間のみ確認される。梁行3.56m、桁行5.36mである。掘方はP-4が円形で、P-26、P-37は楕円形である。掘方の規模は、P-4が27.0×24.4cm、深さ26.5cm、P-27が42.8×32.2cm、深さ50.0cmである。P-37は31.2×27.3cm、深さ51.0cmである。出土遺物は以下で図示したもの以外に、須恵器、土師器、弥生土器、黒色土器、瓦器、陶器の小片、黒曜石の剥片などが出土している。

出土遺物 (第10図、図版4)

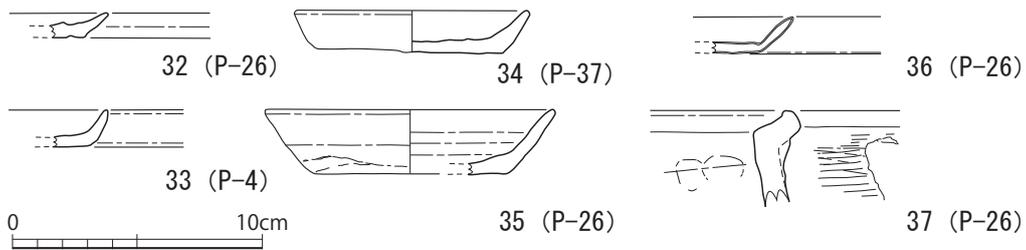
土師器

皿 (32～34) 土師器の小皿片である。32は底部から短く体部が開く形態で、器高は1.0cmである。33は糸切りの底部から短く体部が直立気味に立ち上がる。器高は1.5cmである。34は糸切り底で、体部は短く開く。口径9.4cm、器高1.7cm、底径7.4cmである。内面に煤が付着する。

杯 (35) 底部は糸切り後ナデで、体部は直線的に開く。内外面回転ナデである。口径は11.6cm、底部は7.7cmに復元でき、器高は2.6cmである。



第9図 SB03 実測図 (S=1/60)



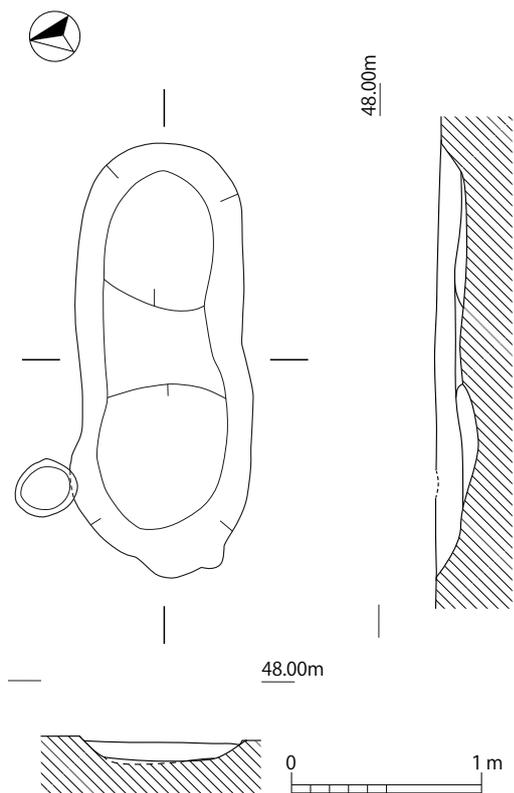
第10図 SB03 出土遺物実測図 (S=1/3)

磁器

皿 (36) 白磁の皿で、口縁部が短く直線的に開き、浅い器形である。内外面施釉し、口縁端部のみ施釉後釉を掻き取り、口禿げになる。底部外面は板状工具で釉を伸ばした痕跡が残る。白磁皿IX類である。

土師質土器

鍋 (37) 鍋の口縁部片で、口縁部が「く」字形に屈曲する。口縁部の屈曲部外面まで煤が付着する。



第11図 SK01 実測図 (S=1/40)

3) 土坑

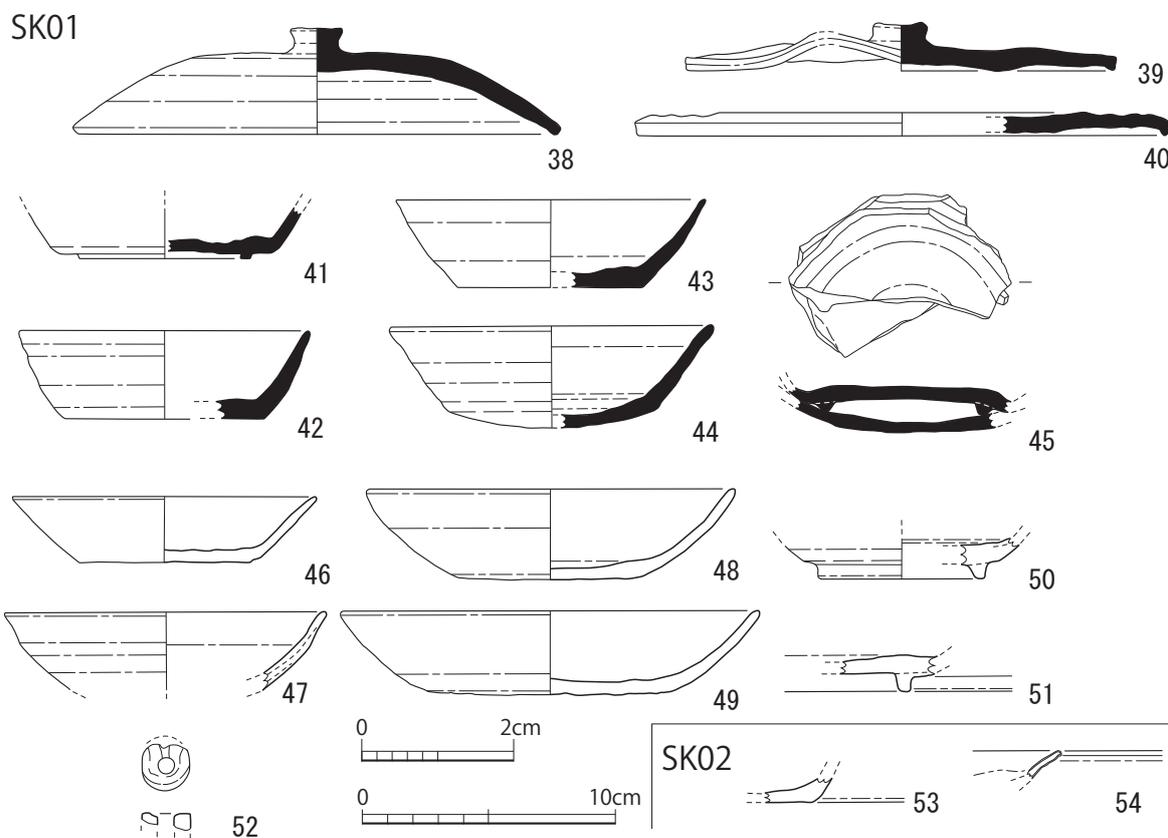
SK01 (第11図、図版3)

調査区北西部の掘立柱建物が分布する範囲と重なって位置する。長軸を略東-西にとり、長楕円形の平面プランを呈する。長軸方向は最大2.31m、短軸方向は最大0.96mを測る。床面は、遺構中央部が緩やかに高くなっており、遺構東部と西部は浅いすり鉢状を呈する。遺構検出面からの深さは最大で23.4cmを測る。遺物は、以下で図示するもの他に、須恵器杯小片や土師器高杯の脚部片などが出土している。また、須恵器は細片が多く出土しているが、赤焼きの須恵器が多数含まれる。

出土遺物 (第12図、図版4・5)

須恵器

杯 (38 ~ 44) 38 ~ 40 は杯蓋である。38 はつまみがボタン状を呈し、径は小さい。器高はやや高く、



第12図 SK01、02 出土遺物実測図 (52はS=1/1、その他はS=1/3)

口縁部は折り曲げず、丸くおさめる。焼け歪みにより器形がゆがむ。39もボタン状の低いつまみがつき、天井部から口縁部までほぼ水平となる。口縁端部はわずかに下方に張り出す。焼け歪みのため口縁部が波打つようにゆがんでいる。40は天井部から口縁部までの破片で、天井部からほぼ水平に口縁部に至る。口縁端部はわずかに下方に折れる。41は杯Bの底部から体部にかけての破片である。底部のやや内側に低い高台がつき、体部は外に開く。42～44は杯Aで、42は底部から体部が直線的に開く。口径は11.4cmに復元でき、器高は3.5cmである。43は底部から口縁部に向かって体部が開く。口縁部周辺の外面は、重ね焼きのため帯状に暗い灰色を呈し他と色調が異なる。44は丸底を呈するが、底部と体部の境は明瞭で、体部は外に向かって直線的に開く。底部外面はヘラ切り後ナデである。

その他(45) 杯蓋と杯Bの溶着資料である。杯Bの高台が杯蓋の内面に溶着する。

土師器

杯(46～49) 46の底部は糸切り後ナデで、底部から体部が直線的に外に開く。口径は12.0cmに復元でき、器高2.6cm、底径6.7cmである。47は杯体部の小片で、丸い体部からゆるく反る口縁部に至る。体部と口縁部の境に稜がみられる。口径は12.7cmに復元できる。器面がやや荒れている。48は杯dである。底部外面から体部下位は回転ヘラケズリで、底部から体部が丸みをもち立ち上がる。口径は14.6cmに復元でき、器高3.6cm、底径7.3cmである。49の底部外面は回転ヘラ切り後ナデである。底部と体部の境が不明瞭だが、体部はやや丸みをもち外に開く。口径16.6cm、底径9.4cmに復元でき、器高は3.4cmである。

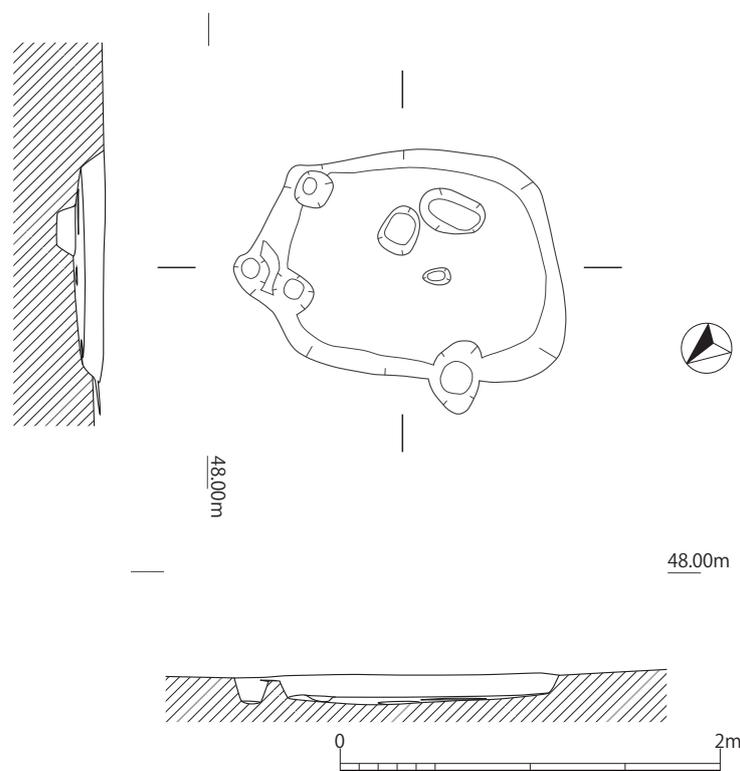
椀(50・51) 50は底部片で、底部やや内側に低い高台がつく。51も底部の小片で、底部やや内側に低い高台が垂直につく。

石製品

小玉(52) 滑石の小玉で、一部欠損する。孔径2.0mm、外径6.6mm、厚さは最大で2.1mmである。

SK02(第13図、図版3)

調査区南東隅、南壁付近に位置する。長軸を略北東-南西方向にとる隅丸方形プランを呈する。長軸方向は最大1.54m、短軸方向は最大1.24mを測る。床面は、遺構の中央部がやや低くなるが、ほぼ平坦である。遺



第13図 SK02 実測図 (S=1/40)

構検出面からの深さは最大で 17.3cmである。遺構内および壁面沿いに複数のピットが重複している。遺物は須恵器、土師器把手、青磁・白磁、陶器の細片が出土している。

出土遺物（第 12 図）

土師器

皿（53）小皿の底部片で、糸切りの底部である。

磁器

皿（54）同安窯系青磁皿の小片で、体部内外面は施釉するが、残存部下端内面は露胎である。この下端部で段状になり、屈曲して体部下位にいたると考えられる。体部上位はやや反る。

4) ピット

P-27 出土遺物（第 14 図）

磁器

椀（55）青磁椀の口縁部片である。内外面とも施釉で、口縁部外面に凹線状の施文を 2 条、体部内面には 1 条の沈線を施す。

P-38 出土遺物（第 14 図、図版5）

石製品

砥石（56）泥岩製の砥石で、短辺 2 面以外は砥面である。重量は 378 g ほどである。

P-50 出土遺物（第 14 図）

土師器

杯（57）土師器の杯底部である。糸切り底で、体部からやや丸みをもつ体部が立ち上がる。底径は 8.0cm に復元できる。

磁器

椀（58）白磁椀Ⅳ類の口縁部片である。内外面施釉し、口縁端部が玉縁状に肥厚する。

P-51 出土遺物（第 14 図）

土師器

椀（59）椀の底部で、外に開く高台がつく。底径は 12.0cm に復元できる。

P-52 出土遺物（第 14 図）

土師器

杯（60）糸切り底の杯底部で、底部外面に板状圧痕が残る。底径は 8.4cm に復元できる。

P-60 出土遺物（第 14 図）

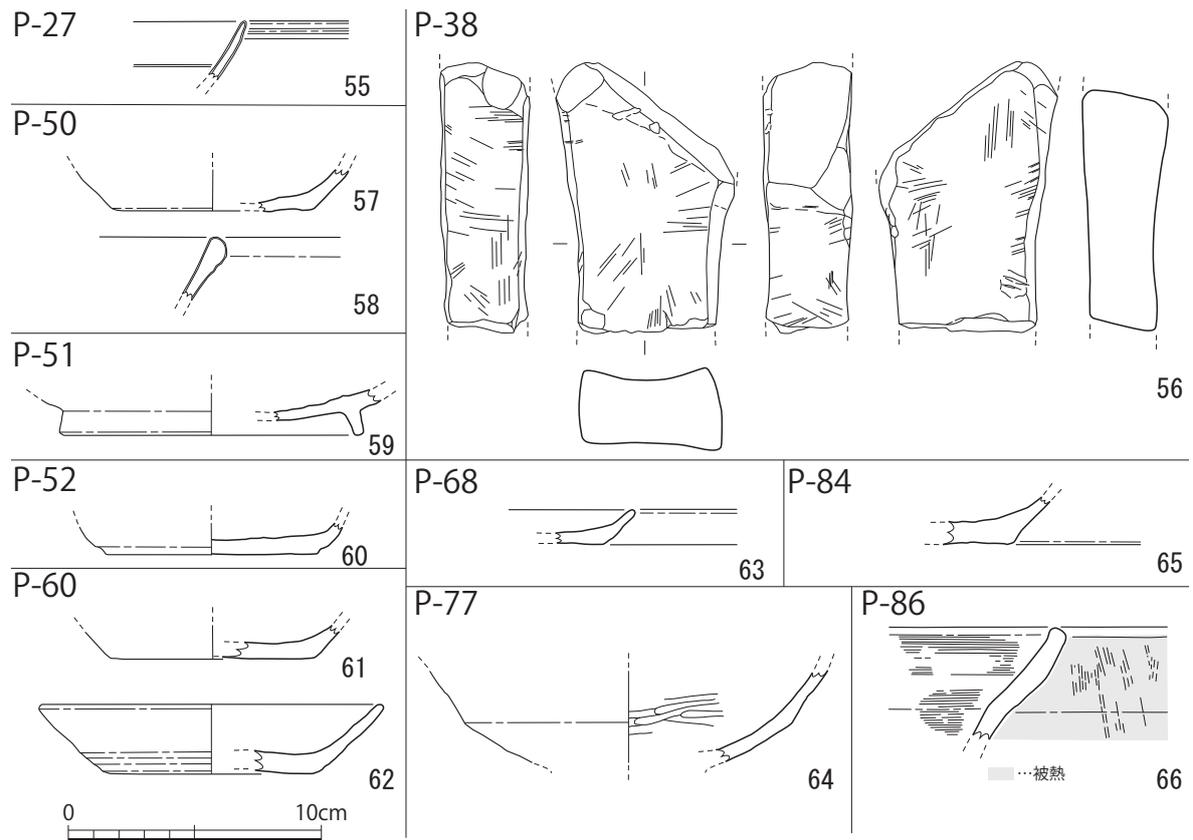
土師器

杯（61・62）61 は糸切りの底部で、体部は外に開く。体部は内外面とも回転ナデである。底径は 8.0cm に復元できる。62 も糸切り底で、体部は直線的に外に開く。口径 13.6cm、底径 8.0cm に復元でき、器高は 2.8cm である。

P-68 出土遺物（第 14 図）

土師器

皿（63）小皿の小片である。底部内外面ともナデで、底部から短く外に開く口縁部がつく。器高は 1.4cm



第 14 図 ピット出土遺物実測図 (S=1/3)

である。

P-77 出土遺物 (第 14 図)

瓦器

椀 (64) 瓦器椀の胴部片で、体部外面中位に稜が明瞭に残る。体部外面下半と内面にミガキがみられる。

P-84 出土遺物 (第 14 図)

土師器

杯 (65) 土師器杯の底部片である。底部は糸切りで、体部は回転ナデである。

P-86 出土遺物 (第 14 図)

土師質土器

鍋 (66) 鍋の口縁部片で、胴部から外反して内湾気味の口縁部がつく。外面には煤が付着しており、強く被熱する。

5) その他の出土遺物

上記の遺構から出土した遺物の他に、包含層などからも多数の遺物が出土している。以下に示す遺物以外に、黒曜石の石核片や表面の摩耗した円礫などが出土している。また、出土地が不明であるが、弥生土器の器台端部片、安山岩の剥片なども出土している。

包含層出土遺物（第 15 図、図版5）

須恵器

杯（67）杯 B の身で、底部やや内側に低い高台がつく。高台径は 8.6cm に復元できる。

皿（68）底部外面は粗くなでており、わずかに糸切り痕様の痕跡が残る。底部から斜めに体部が開く。内外面とも灰黄色を呈する。口径は 18.6cm、底径は 15.0cm に復元でき、器高は 1.5cm である。

土師器

杯（69～73）69 は糸切り底の底部から外に開く体部がつく。体部は内外面回転ナデである。器高は 2.7cm である。70 も同様の形態で、糸切り底から外に体部が開く。底部外面には板状圧痕が残る。口径 12.8cm、底径 9.2cm に復元でき、器高は 2.8cm である。71 は糸切り底の底部から直線的に体部が外に開く。口径は 13.4cm に復元できる。器高 2.9cm、底径は 8.0cm である。72 も糸切り底の底部から外に直線的に体部が開く。内外面とも回転ナデである。口径は 14.6cm、底径は 9.6cm に復元でき、器高は 2.9cm である。73 は杯の底部片で、糸切り底である。底径は 9.4cm に復元できる。

椀（74）椀の口縁から体部にかけての小片である。体部は丸みをもつ。

黒色土器

杯（75）75 は黒色土器 A 類の杯体部片であろう。底部から丸みをもって体部に移行し外に開く。内面は黒色化しており、ミガキのような平滑な器面を呈する。器高は 2.8cm である。

土師質土器

鉢（76）76 は播鉢の底部片である。底部内面と体部内面の境に摺目の端部がみられる。

鍋（77～80）77 は器高の低い鉢形の土器で、底面は粗いナデで仕上げる。底部からゆるく湾曲する体部が開く。体部外面には煤が強く付着する。内面は横方向のハケメである。口径は 19.8cm、底径 14.2cm に復元できる。器高は 4.8cm である。78 は外傾する体部から弱く外に反る口縁部がつく。口縁端部は玉縁状に肥厚する。外面全体に煤が付着している。79 は体部から外反してわずかに内湾する口縁部がつく。体部と口縁部の移行部分外面に広く煤が付着する。口径は 30.8cm に復元でき、残存高は 8.3cm である。80 は 79 と同様の器形で、口縁部内面は横方向のハケメ、体部内面は斜方向と横方向のハケメである。外面は被熱のため器面が黒変している。

瓦質土器

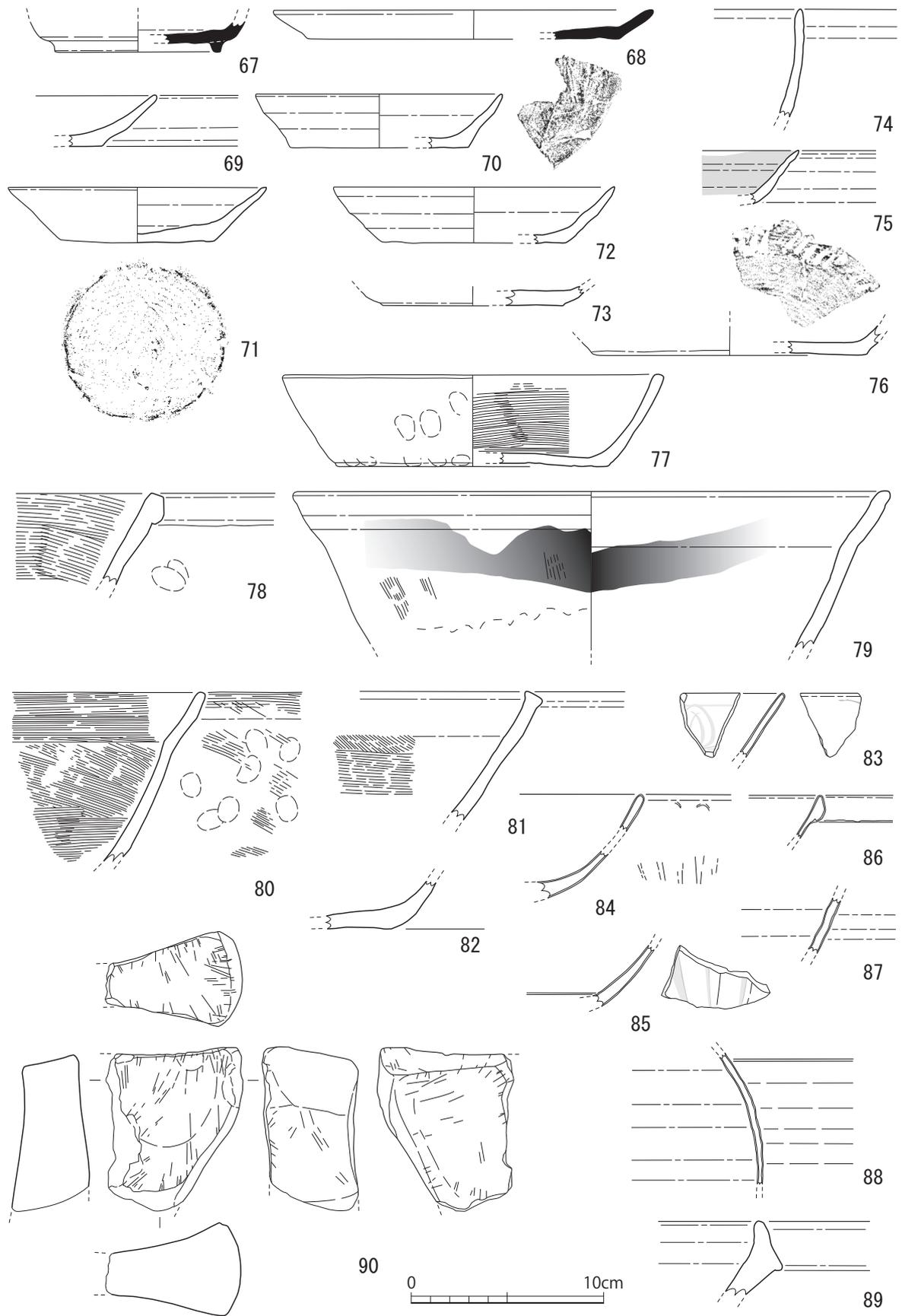
鉢（81・82）81 は鉢で、外面は器面の荒れで調整不明だが、口縁端部と口縁部周辺内面はナデ、体部はハケメである。82 は鉢の底部片である。底部から体部に丸く移行する。器面の荒れが著しい。

磁器

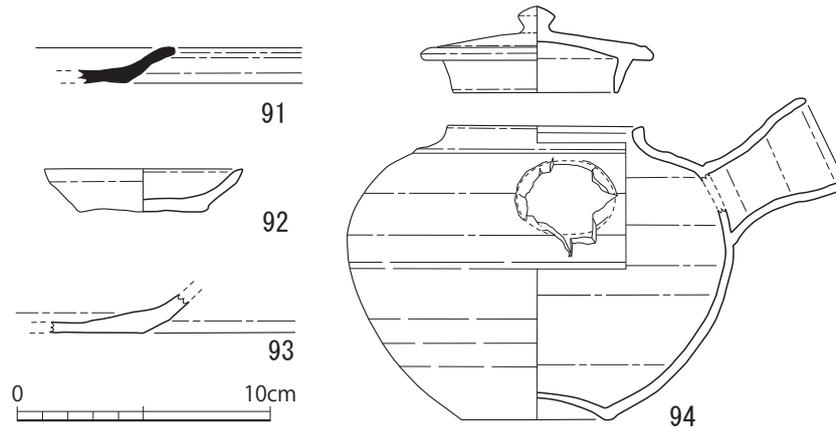
椀（83～86）83～85 は青磁椀である。83 は龍泉窯系青磁で内面に片彫蓮花文を施す。84 は口縁部外面に下に弧を描く施文が認められ、途中欠損するが体部中位以下には斜行する直線状の施文が確認できる。これらの特徴から蓮弁文が粗雑に描かれているものと判断できる。85 は龍泉窯系青磁椀の体部片である。内外面施釉し、外面には鎬蓮弁文が施される。残存部下端内面には圏線がめぐる。86 は白磁椀Ⅳ類の口縁部である。口縁は肥厚し玉縁状を呈する。

陶器

壺（87・88）87 は壺の胴部片であろう。外面は黒色、内面は褐色釉で、素地は黒褐色を呈する。



第15図 其他の出土遺物実測図1 (S=1/3)



第 16 図 その他の出土遺物実測図 2 (S=1/3)

88 も壺の胴部であろう。素地は灰色である。

鉢 (89) 備前産の播鉢の口縁部片である。口縁部内面は屈曲部をなさず湾曲し、端部は上方にやや突出する。口縁部下端もやや突出する。

石製品

砥石 (90) 砂岩製の砥石で、砥面は 4 面ある。面積の多い表裏両面はともになめらかな曲面をなす。

攪乱出土遺物 (第 16 図、図版 5)

須恵器

皿 (91) 須恵器皿の小片である。底部外面には板状圧痕がみられ、底部から口縁部に向かってやや外反しながら立ち上がる。

土師器

皿 (92) 土師器の小皿で、糸切り底から体部が短く外に開く。口縁部外面に幅の狭い面を形成する。口径は 7.8cm に復元でき、器高 1.7cm、底径 5.1cm である。

杯 (93) 杯の底部小片であろう。底部外面から体部下位は回転ヘラケズリである。

陶器

湯罐 (94) 急須形の素焼き陶器である。上げ底の底部から、丸みをもつ胴部を経て把手から上部は内傾する。口縁部はやや直立気味に立ち上がる。把手と 90° ずれて同じ高さにつけられた注ぎ口の痕跡がみられる。また把手より下部は煤の付着が顕著で、把手自体も下半部は煤が濃く付着する。蓋は、低いつまみを持ち、かえりは長く先端部が細くなる。蓋の端部にも煤が濃く付着する。このように火にかけて湯を沸かしていることから、急須と形態的に近似する湯罐であろう。ただし、外面の煤の付着が著しいことから、薬や茶などを煎じるために使用した可能性もあろう。

表1 平野遺跡第1次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	須恵器	鉢	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(4.7)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR 8/1 灰白色 外N5/ 灰色	
2	土師器	小皿	竪穴状遺構 南半部埋土中	①(9.3) ②1.0 ③(8.05)	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内 外10YR7/3 にぶい黄褐色	
3	土師器	小皿	竪穴状遺構 北半部埋土中	①(9.0) ②1.45 ③(7.0)	底部外面糸切り 底部内面ナデ 他は回 転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を多く含む B:良 好 C:内外7.5YR7/4 にぶい褐色	
4	土師器	小皿	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(1.5) ③(7.1)	底部外面糸切り後ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内 10YR8/2 灰白色 外10YR7/2 にぶい黄褐色	
5	土師器	小皿	竪穴状遺構 ベルト	②(0.9) ③8.4	外面糸切り後ナデ 内面ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内 外10YR7/4 にぶい黄褐色	
6	土師器	小皿	竪穴状遺構 ベルト	②(0.8) ③(7.6)	外面糸切り後ナデ 内面ナデ、指オサエ 体部外面下位回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母をやや多く含む B:良好 C:内外7.5YR7/3 にぶい褐色	
7	土師器	杯	竪穴状遺構 南半部埋土中	①(10.8) ②2.3 ③7.5	底部外面糸切り 底部内面指オサエ 他 は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄褐色 外10YR7/3 にぶい黄 褐色	
8	土師器	杯	竪穴状遺構 南半部埋土中	①(12.4) ②2.55 ③7.9	底部外面糸切り後ナデ 他は回転ナデ	A:微細な雲母を含む B:良好 C:内外 10YR7/2 にぶい黄褐色～10YR5/1 褐灰色	
9	土師器	杯	竪穴状遺構 南半部埋土中	①(13.2) ②2.6 ③8.95	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を多く含む B:良 好 C:内外10YR7/2 にぶい黄褐色～10YR6/1 褐灰色	
10	瓦器	椀	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(1.9) ④(7.0)	底部内面ミガキ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR 7/1 灰白色 外10YR6/1 褐灰色	
11	青磁	椀	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(3.2)	内外面施釉 外面鐮蓮弁文	A:精良 B:良好 C:釉10GY6/1 緑灰色 胎土 N6/ 灰色	太宰府分類 龍泉窯 系椀II類
12	青磁	椀	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(2.9)	内外面施釉 外面片影蓮弁文	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY6/1 オリーブ灰色 胎土N7/ 灰白色	太宰府分類 龍泉窯 系椀II-a類
13	青磁	椀	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(4.2)	内外面施釉 外面鐮蓮弁文	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y6/3 オリーブ黄色 胎土7.5Y7/1 灰白色	太宰府分類 龍泉窯 系椀II類
14	白磁	椀	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(2.5)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y7/1 灰白色 胎土 7.5Y8/1 灰白色	
15	磁器	椀	竪穴状遺構 ベルト	②(2.5)	内外面施釉	A:微細な黒色粒を少し含む B:良好 C:釉 5Y7/1 灰白色 胎土7.5Y7/1 灰白色	
16	白磁	椀	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(1.9)	内外面施釉	A:微細な黒色砂粒を少し含む B:良好 C:釉 10YR8/1 灰白色 胎土10YR8/1 灰白色	
17	青磁	皿	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(1.3)	内外面施釉 外面櫛目状の施文	A:精良 B:良好 C:釉10GY6/1 緑灰色 胎土 N7/ 灰色	太宰府分類 同安窯 系皿III類
18	白磁	皿	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(1.2)	内外面施釉 口縁部端部釉剥ぎ	A:精良 B:良好 C:釉5Y6/2 灰オリーブ色 胎 土5Y7/1 灰白色	太宰府分類 皿IX類
19	白磁	皿	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(1.5)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉10Y8/1 灰白色 胎土 10Y7/1 灰白色	
20	白磁	壺	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(1.45) ③(6.0)	内外面施釉 底部外面静止糸切りの痕跡 あり	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY7/1 明オリーブ灰 色 胎土2.5GY8/1 灰白色	
21	陶器	壺?	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(4.1)	内外面回転ナデ、施釉	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:釉5YR4/2 灰褐色 胎土5YR4/3 にぶい赤褐 色	褐釉
22	陶器	不明	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(3.6) ③(6.6)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内 外5Y4/1 灰色 胎土7.5YR6/2 灰褐色	
23	瓦質 土器	播鉢	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(3.8)	口縁部外面端部ナデ 他は指オサエ	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外7.5Y7/1 灰白色	片口
24	瓦質 土器	鉢	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(4.7)	外面ハケメ、指オサエ後ナデ 内面ハケメ 口縁部端部ヨコナデ	A:1mm以下の長石、石英を含む B:良好 C:内 2.5Y8/1 灰白色～2.5Y3/1 黒褐色 外10YR8/1 灰白色	
25	瓦質 土器	鉢	竪穴状遺構 北半部埋土中	②(7.55)	外面指オサエ、ナデ 内面ハケメ 口縁 部端部ヨコナデ	A:2mm以下の長石、微細な石英を含む B:良好 C:内外N4/ 灰色～N3/ 暗灰色	
26	瓦質 土器	鉢	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(6.1)	外面ハケメ、指オサエ 内面ハケメ 口縁 部端部ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外7.5Y8/1 灰白色	
27	瓦質 土器	播鉢	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(9.6) ③14.0	外面指オサエ 内面ナデ、5本1単位の 播目あり	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR6/2 灰黄褐色～ 10YR5/1 褐灰色	
28	不明	不明底部	竪穴状遺構 南半部埋土中	②(2.3) ③9.65	外面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B:良好 C:内10YR7/6 褐灰色 外10YR7/4 に ぶい黄褐色～10YR2/1 黒色	底部外面黒斑あり

表2 平野遺跡第1次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
29	土師器	小皿	SB01:P-34	①(8.2) ②1.55 ③(5.7)	底部外面糸切りか? 他は回転ナデ	A:微細な雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
30	鉄製品	釘	SB01:P-5	身部 残存長2.2 茎幅0.5 厚さ0.4 重さ1.4 先端部 残存長2.15 茎幅0.45 厚さ0.45 重さ1.7				身部・先端部同一個体	
31	土師器	小皿	SB02:P-3	②(0.8)	底部外面糸切り 他はナデ	A:微細な白色砂粒、雲母、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄橙色 外7.5YR7/4 にぶい黄橙色			
32	土師器	小皿	SB03:P-26	②(1.0)	底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内7.5YR8/3 浅黄橙色～7.5YR8/6 浅黄褐色 外5YR7/8 橙色			
33	土師器	小皿	SB03:P-4	②1.5	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
34	土師器	小皿	SB03:P-37	①9.4 ②1.7 ③7.4	底部外面糸切り 外面回転ナデ 内面ナデ	A:微細な白色砂粒を多く、4mm以下の長石、石英を少し含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい黄橙色	内面煤付着 外面黒斑		
35	土師器	杯	SB03:P-26	①(11.6) ②2.6 ③(7.7)	底部外面糸切り後ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色～10YR6/1 褐灰色	粘土紐痕あり		
36	白磁	皿	SB03:P-26	②1.45	内外面施釉 見込みに圏線状の凹み	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY7/1 明オリーブ灰色 胎土5Y8/1 灰白色	太宰府分類 皿IX-1類		
37	土師質土器	鍋	SB03:P-26	②(4.0)	頸部外面ハケメ 他はナデ	A:微細な白色砂粒、4mm以下の長石、石英を多く含む B:良好 C:内10YR5/1 褐灰色～10YR2/1 黒色 外10YR7/3 にぶい黄橙色	外面煤付着		
38	須恵器	杯蓋	SK01	①(19.0) ②4.2 つまみ径2.05 つまみ高1.0	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内7.5Y5/1 灰色～N6/灰色～N3/ 暗灰色 外N5/ 灰色～N4/ 灰色～10Y5/1灰色	重ね焼き痕あり 歪みあり		
39	須恵器	杯蓋	SK01	①(17.0) ②1.9 つまみ径2.1 つまみ高0.7	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内外2.5Y7/1 灰白色～N5/ 灰色	重ね焼き痕あり 歪みあり		
40	須恵器	杯蓋	SK01	①(20.8) ②0.9	天井部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色～2.5Y7/1 灰白色 外N4/ 灰色～N6/ 灰色			
41	須恵器	杯身	SK01	②(2.0) ④(6.8)	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ 体部外面下位回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N6/ 灰色			
42	須恵器	杯	SK01	①(11.4) ②3.5 ③(7.8)	底部外面ヘラ切り 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内2.5Y6/1 黄灰色～2.5Y6/2 灰黄色 外2.5Y7/1 灰白色～2.5Y6/2 灰黄色	外面降灰		
43	須恵器	杯	SK01	①(12.2) ②3.5 ③(7.4)	底部外面ヘラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N6/ 灰色～N4/ 灰色	重ね焼き痕あり		
44	須恵器	杯	SK01	①(12.8) ②4.05 ③(8.4)	底部外面ヘラ切り後ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y7/1 灰色～N5/ 灰色 外2.5Y7/2 灰黄色～N5/ 灰色	外面重ね焼き痕あり		
45	須恵器	溶着資料	SK01		杯蓋外面ヘラ切り後回転ナデ 高台付杯内面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:高台付杯内外N5/ 灰色 杯蓋内外N7/ 灰白色	溶着		
46	土師器	杯	SK01	①(12.0) ②2.6 ③6.7	底部外面糸切り後ナデ 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄褐色～10YR3/1 黒褐色 外10YR8/3 浅黄褐色～10YR5/1 褐灰色			
47	土師器	杯	SK01	①(12.7) ②(3.1)	底部外面ヘラ切りか? 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内外5YR7/6 橙色			
48	土師器	杯	SK01	①(14.6) ②3.6 ③7.3	底部外面～体部下位回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外5Y7/6 橙色			
49	土師器	杯	SK01	①(16.6) ②3.35 ③(9.4)	底部外面ヘラ切り後ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石をやや多く、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/6 橙色			
50	土師器	椀	SK01	②(1.6) ④(6.6)	底部外面ヘラ切り 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内外5YR7/6 橙色			
51	土師器	椀	SK01	②(1.45)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内7.5YR7/6 橙色 外5YR7/6 橙色	粘土紐痕あり		
52	石製品	小玉	SK01	径0.66 厚さ0.21 孔径0.2 重さ0.2				滑石製	
53	土師器	小皿	SK02	②(1.0)	底部外面糸切り 他はナデ	A:微細な白色粒子、雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/3 にぶい黄橙色			
54	青磁	皿	SK02	②(1.1)	内外面施釉 内面一部露胎	A:精良 B:良好 C:釉7.5Y7/1 灰白色 胎土5Y8/1 灰白色	太宰府分類 同安楽系皿I類		

表3 平野遺跡第1次調査出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
55	青磁	椀	P-27	②(2.3)	内外面施釉 内面下位に1条、外面上位に2条の沈線が巡る	A:精良 B:良好 C:釉5Y5/2 灰オリープ色 胎土5Y6/1 灰色	
56	石製品	砥石	P-38	残存長10.75 最大幅6.5 最大厚3.5 重さ377.8			
57	土師器	杯	P-50	②(1.65) ③(8.0)	底部外面糸切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色 外10YR7/4 にぶい黄橙色	
58	白磁	椀	P-50	②(2.5)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y7/2 灰黄色 胎土10YR8/3 浅黄橙色	太宰府分類 椀IV類
59	土師器	椀	P-51	②(1.8) ④(12.0)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒、雲母を少し含む B:良好 C:内10YR5/1 褐色 外7.5YR7/6 橙色～7.5YR5/4 にぶい褐色	
60	土師器	杯	P-52	②(1.25) ③(8.4)	底部外面糸切り 他はナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:内外10YR8/4 浅黄橙色	
61	土師器	杯	P-60	②(1.35) ③(8.0)	底部外面糸切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR7/4 にぶい黄橙色 外10YR8/3 浅黄橙色	
62	土師器	杯	P-60	①(13.6) ②2.75 ③(8.0)	底部外面糸切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外10YR7/3 にぶい黄橙色	
63	土師器	小皿	P-68	②1.4	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外10YR7/3 にぶい黄橙色	
64	瓦器	椀	P-77	②(3.6) ③(6.6)	外面ミガキか? 内面ミガキ 内外面上位回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内2.5Y7/2 灰黄色 外2.5Y7/2 灰黄色～5Y5/1 灰色	
65	土師器	杯	P-84	②(1.85)	底部外面糸切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を多く含む B:良好 C:内外10YR8/4 浅黄橙色	
66	土師質土器	鍋	P-86	②(4.45)	外面タテハケ 内面ヨコハケ 口縁部端部ヨコナデ	A:1mm以下の白色砂粒、長石、雲母をやや多く含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にぶい橙色 外7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR2/1 黒色	外面強い被熱を受ける
67	須恵器	杯身	遺物包含層	②(1.6) ④(8.6)	底部外面ヘラ切り後回転ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な白色・黒色粒を含む B:良好 C:内5Y6/1 灰色 外10Y6/1 灰色	
68	須恵器	皿	遺物包含層	①(18.6) ②1.5 ③(15.0)	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内外2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y6/2 灰黄色	
69	土師器	杯	遺物包含層	②2.65	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい橙色	
70	土師器	杯	遺物包含層	①(12.8) ②2.8 ③(9.2)	底部外面糸切り 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を含む B:良好 C:内10YR7/4 にぶい黄橙色 外10YR7/3 にぶい黄橙色	
71	土師器	杯	遺物包含層	①(13.4) ②2.9 ③8.0	底部外面糸切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、褐色粒、金雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/4 浅黄橙色～10YR7/4 にぶい黄橙色、10YR6/3 にぶい黄橙色	
72	土師器	杯	遺物包含層	①(14.6) ②2.9 ③(9.6)	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/4 にぶい黄橙色	
73	土師器	杯	遺物包含層	②(1.0) ③(9.4)	底部外面糸切り 底部内面ナデ 外面ヨコナデ	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を含む B:良好 C:内10YR7/4 にぶい黄橙色 外10YR7/4～7/3 にぶい黄橙色	
74	土師器	椀	遺物包含層	②(5.6)	口縁部内外面工具ナデ 他は調整不明	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を含む B:良好 C:内10YR8/4 浅黄橙色～7.5YR7/4 にぶい橙色 外10YR8/4 浅黄橙色	
75	黒色土器	杯	遺物包含層	②(2.8)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒、石英、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄橙色～10YR2/1 黒色 外10YR8/3 浅黄橙色～10YR5/1 褐色	内面黒色化 黒色土器A類
76	土師質土器	播鉢	遺物包含層	②(1.55) ③(14.2)	底部外面ナデ 底部内面ハケメ?、5本1単位の播目	A:2mm以下の白色砂粒、長石、角閃石、雲母を含む B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄橙色 外10YR6/3 にぶい黄橙色	
77	土師質土器	鍋	遺物包含層	①(19.8) ②4.8 ③(14.2)	底部外面ナデ 底部～体部内面ヨコハケ 外面ナデ・指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英、角閃石、金雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にぶい橙色 外7.5YR5/2 灰褐色～7.5YR3/1 黒褐色	外面煤付着
78	土師質土器	鍋	遺物包含層	②(4.8)	外面調整不明 内面ハケメ 口縁部端部ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、角閃石を含む B:良好 C:内5YR5/4 にぶい赤褐色 外5YR5/4 にぶい赤褐色	外面煤付着
79	土師質土器	鍋	遺物包含層	①(31.0) ②(8.2)	体部外面中位ハケメ後ナデ 口縁部内外面回転ナデ 他は調整不明	A:3mm以下の白色砂粒、角閃石、雲母、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR7/6 褐色 外7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR7/6 褐色～7.5YR6/3 にぶい褐色	内外面煤付着
80	土師質土器	鍋	遺物包含層	②(8.8)	内面～口縁部外面ハケメ 体部外面ハケメ・指オサエ	A:微細な白色砂粒、角閃石、雲母を含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にぶい橙色 外7.5YR3/2 黒褐色～7.5YR2/1 黒色	外面被熱受け黒変している

表4 平野遺跡第1次調査出土遺物観察表④

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
81	瓦質 土器	鉢	遺物包含層	②(6.2)	体部外面調整不明 体部外面中位～下位ハケメ 体部外面上位回転ナデ 口縁部端部ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、角閃石を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄橙色			
82	瓦質 土器	鉢	遺物包含層	②(2.5)	内外面ナデ	A:微細な黒色粒子、金雲母を含む B:良好 C:内2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y5/1 黄灰色 外10YR5/2 灰黄褐色～10YR8/2 灰白色～5Y8/1 灰白色			
83	青磁	椀	遺物包含層	②(3.35)	内外面施釉 内面へラ描き施文	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY6/1 オリーブ灰色 胎土5Y7/2 灰白色		太宰府分類 龍泉窯系椀Ⅰ類	
84	青磁	椀	遺物包含層	口縁部(1.95) 胴部(2.5)	内外面施釉 外面へラ描き施文	A:精良 B:良好 C:釉10Y5/2 灰オリーブ色 胎土5Y7/1 灰白色		太宰府分類 龍泉窯系椀	
85	青磁	椀	遺物包含層	②(3.25)	内外面施釉 外面鑄蓮弁文 内面圏線あり	A:精良 B:良好 C:釉7.5GY6/1 緑灰色 胎土2.5Y7/1 灰白色		太宰府分類 龍泉窯系椀	
86	白磁	椀	遺物包含層	②(2.3)	内外面施釉	A:微細な黒色粒を含む B:良好 C:釉10Y8/1 灰白色 胎土5Y8/1 灰白色		太宰府分類 白磁椀Ⅳ類	
87	陶器	壺?	遺物包含層	②(2.9)	内外面施釉 外面鉄釉	A:やや精良 B:良好 C:釉10YR3/4 暗褐色、10YR2/2 黒褐色 胎土10YR3/1 黒褐色			
88	陶器	壺	遺構検出面	②(6.9)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉5Y5/2 灰オリーブ色 胎土5Y5/1 灰色			
89	陶器	播鉢	遺物包含層	②(4.1)	外面回転ナデ 内面ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内2.5Y5/1 黄灰色～N6/ 灰色 外7.5YR5/3 にぶい褐色～7.5YR5/2 灰褐色～N5/ 灰色		備前産陶器	
90	石製品	砥石	遺物包含層	残存長8.55 最大幅7.1 最大厚4.85 重さ332.2	砥面4面				砂岩製
91	須恵器	皿	攪乱一括	②(1.4)	底部外面へラ切り 体部外面下位回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外2.5GY5/1 灰オリーブ色			
92	土師器	小皿	攪乱一括	①(7.8) ②1.7 ③5.1	底部外面系切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒子を含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にぶい橙色			
93	土師器	杯	攪乱一括	②(1.5)	底部外面～体部下位回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/4 浅黄橙色～7.5YR7/6 橙色 外7.5YR7/6 橙色			
94-1	陶器	蓋	攪乱一括	①6.5 ②3.4 受部径9.2 つまみ径1.4 つまみ高1.0	内外面回転ナデ 外面下位1条の沈線が巡る	A:精良 B:良好 C:内外7.5YR7/3 にぶい橙色～7.5YR2/1 黒色		内面煤付着 蓋端部煤付着・黒変	
94-2	陶器	湯罐	攪乱一括	①7.8 ②12.75 ③6.0	胴部外面回転ヘラケズリ 把手部下位回転ヘラケズリ後回転ナデ 他は回転ナデ	A:精良 B:良好 C:内10YR8/2 灰白色～10YR3/4 暗褐色 外10YR8/1 灰白色～7.5YR4/3 褐色～10YR1.7/1 黒色		内面薄茶色に変色 外面中位～下位を主に濃く煤付着	

3. まとめ

(1) 遺構の時期

平安時代：SK01

SK01：SK01からはⅦB期からⅧ期の須恵器に加え、土師器杯dも出土する。これら出土遺物にはやや時期幅があるが、遺構の時期は最も新しい時期の遺物により9世紀前半頃と考えられよう。ただし、本土坑からは13世紀後半から14世紀後葉にかけてと考えられる土師器の杯（第12図：46）も出土している。混入や遺構の重複などいくつかの可能性が考えられるであろうが、SK01は東西方向の長軸両端部で浅くくぼみ、中央部が鞍状に高くなる土坑である。このような遺構の形態を考慮すると、時期の異なる遺構が一部重複している可能性が考えられる。その場合、9世紀前半頃の土坑と、13世紀後半から14世紀後葉にかけての土坑が切り合っているということになる。

平安時代末～鎌倉時代初頭：SB02、SK02

SB02：SB02からは土師器の小片が出土するのみであり時期比定は難しいが、糸切り底の土師器小片が出土しており、12世紀中葉以降と考えておく。

SK02：SK02からは同安窯系青磁皿が出土した。また糸切り底の土師器小皿片も出土する。いずれも小片ではあるが、これらの遺物から12世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

鎌倉時代～室町時代：竪穴状遺構、SB01、SB03

竪穴状遺構：竪穴状遺構から出土した土器のうち、土師器の小皿、杯の法量をみると山本によるⅩⅥ～ⅩⅧ型式に相当する遺物が出土しており、12世紀末～13世紀後葉の遺物といえる。一方、磁器では13世紀前後～13世紀前半頃の龍泉窯系青磁椀、13世紀後半～14世紀前半の白磁ⅩⅨ類が出土する。これらの年代から遺構の時期はやや時間幅があるが、13世紀後半から14世紀前半の間と考えておく。

SB01：SB01からは土師器の小皿が出土しているが、糸切り底で法量からは山本のⅩⅧ～ⅩⅨ型式に収まる。そのためおおよその年代は13世紀後半から14世紀前葉頃と考えられる。

SB03：SB03からは法量でⅩⅡ～ⅩⅥ型式に収まる可能性の高い土師器小皿（第10図：34）の他、ⅩⅧ型式の杯が出土する。また、12世紀後半から14世紀初頭と考えられる土師器の鍋や、13世紀後半～14世紀前半の白磁Ⅹ類等が出土している。以上の出土遺物をみると土師器小皿がやや古い型式の可能性はあるが、この小皿の法量は数こそ少ないものの山本のⅩⅨ型式でもみられる（山本1990：表10③・ⅩⅨ型式）。このような例を参考にⅩⅨ型式前後の小皿と考えると、13世紀末～14世紀初頭頃の時期となろう。その他は概して13世紀後半から14世紀前半までの時期幅に収まる土器である。以上のように土師器小皿の時期がやや不明瞭であるが、上に述べた型式に比定することで、おおよそ出土土器の時期を整合的に理解することができる。以上により、SB03を13世紀後半から14世紀前半頃の遺構とできよう。

以上のおおよその年代を比定することのできる遺構に加え、ピットの中にも数こそ少ないが時期を推し量ることのできるものがある。P-50からは白磁Ⅳ類と土師器杯が出土する。土師器の杯は山本によるⅩ～ⅩⅡ型式で、上記の白磁の年代幅に収まる。そのため、11世紀後半から12世紀前半頃の遺構と判断できる。P-60からはⅩⅩ型式の土師器杯が出土しており、14世紀中頃の所

産と考えられる。

最後に包含層からは、土師器（XVI・XVII型式：12世紀末から13世紀前半）、磁器は龍泉窯系青磁椀（12世紀中頃～後半、14世紀初頭～後半）などの遺物に加え、備前陶器の播鉢片も出土している。口縁部の形態で上下に張り出しがみられ15世紀後半の時期を考えることができる。このように、包含層からは12世紀中頃以降15世紀後半までの遺物が認められる。

（2）遺跡形成時期からみた平野遺跡第1次調査の意義

調査地の南東には正暦年中（990～994年）に創建されたと伝わる平野神社が位置する。平野遺跡第2次調査では、杯Gの杯蓋と杯身複数個体が須恵器甕胴部片の上に置かれた状態で出土した、7世紀中葉の土坑が確認されている。平野遺跡第1次調査では上記のように、平野神社創建期をさかのぼる9世紀代のSK01が確認された。7世紀以後、平野神社創建までの当地の土地利用の一端を把握することのできる重要な成果であろう。

一方、平野神社の創建後かなり後にはなるが、当地周辺のことを文献で確認できるのは16世紀になってからである。平野庄に関する記録が天文15（1546）年の文書（『大宰府太宰府天満宮史料』14）にみられる。御笠郡所在の平野庄の有力な比定地の一つである当地では、今回の調査によって12世紀前後と13世紀から14世紀前半を中心とする時期の遺構が複数確認された。第2次調査によってもほぼ同時期の掘立柱建物が確認されており、平野神社周辺で、中世前期の遺構が確認されつつある。当地周辺における荘園との関連も含めた土地開発、土地利用を理解するうえで、第1次調査は第2次調査と同様に貴重な成果といえるであろう。

IV. 牛頸塚原遺跡群—I区の調査—

1. はじめに

牛頸塚原遺跡群は、大野城市大字牛頸から畑ヶ坂1丁目にかけて位置し（第2図）、牛頸川西岸の河岸段丘上の平地に形成された遺跡群である。標高は42～45mを測る。塚原遺跡群の調査は昭和62（1987）年より断続的に行われており、遺跡群全体の面積は約3万㎡に達する。

今回の調査地点は、塚原遺跡群の南西隅にあたる範囲で、既報告の『牛頸塚原遺跡群（大野城市文化財調査報告書第44集）』（1995年刊行）でI区とされた地点にあたる。この報告書では、I区で確認された古墳が30号墳として報告されている。ただし、それ以外の遺構については報告がなされていない。また、出土遺物については、以前の報告時の資料群と混在しているため、その中から本地点のものと確実に判断できる資料群を把握・ピックアップすることができなかった。以下、既報告の調査地点名を踏襲して、本調査区をI区として、30号墳及び周辺の遺構について報告する。

2. 調査の成果

(1) 調査の概要（第17図、図版6）

塚原遺跡群I区は、大野城市牛頸1490-1に所在する。学習塾の建設が計画され、試掘を行った結果、遺構が検出された。そのため、平成4年に事業地約300㎡について発掘調査を実施した。

発掘調査地は、牛頸川西岸の河岸段丘上に位置する。調査は、平成4年7月8日～8月19日の間に実施した。調査の結果、古墳時代中期の古墳1基と時代不詳の土坑、ピット複数を確認した。

(2) 遺構と遺物

調査区の南西から北東にかけて1号溝が確認され、この溝の北側に1号～3号土坑、3号溝などが確認された。また、1号溝の南東側、調査区の南東隅で30号墳の一部が確認され、その西側に2号溝が検出されている。

古墳

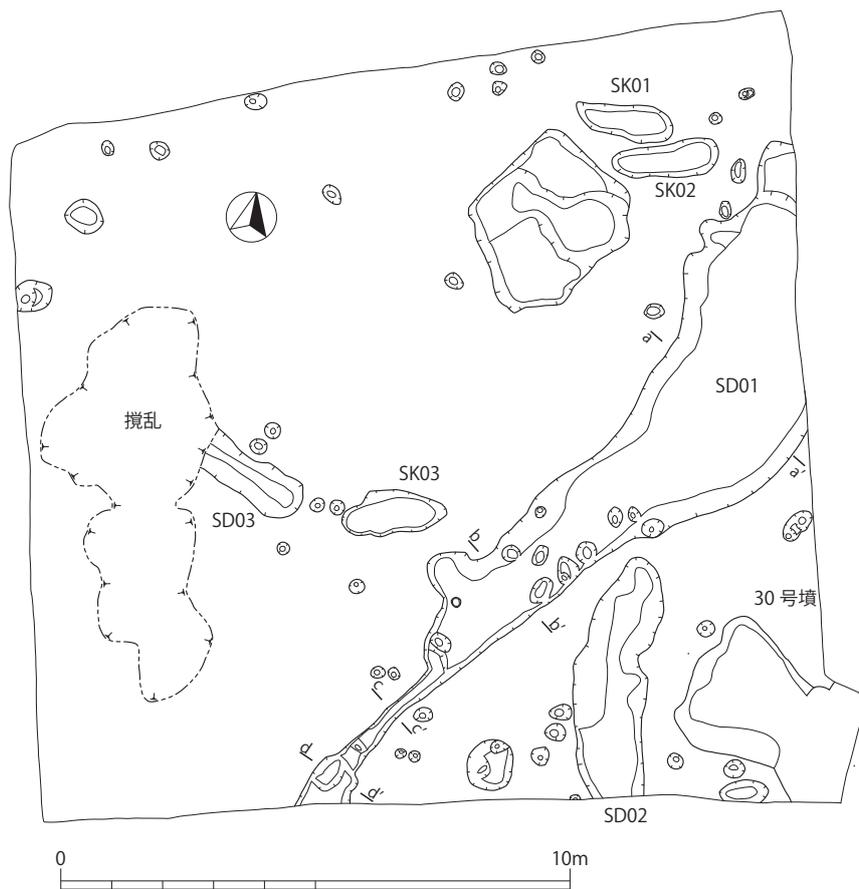
30号墳（第18・19図、図版6）

1) 立地と現況

I区の南西隅で確認された。G区11号墳の南西約10m、12号墳の北西約7.5mに位置する（第23図参照）。調査区の端部で検出されたため、石室部分を可能な限り拡張したものの、十分な調査を行うことはできなかった。

2) 墳丘・周溝（第18図）

墳丘はすでに削平されており、高さは不明である。主体部の西側に、幅1.3～1.5m、深さ9～23cmほどのSD02が検出された。主体部を中心とした円形をなすような緩いカーブを描いているため、周溝の可能性はある。主体部の西側で溝の北端部が収束しており、溝の続きと考えられる遺構はSD02の北側では確認されていない。ただし、SD02の北に位置し、南西—北東に軸をとる



第 17 図 牛頸塚原遺跡群 I 区 遺構配置図 (S=1/150)

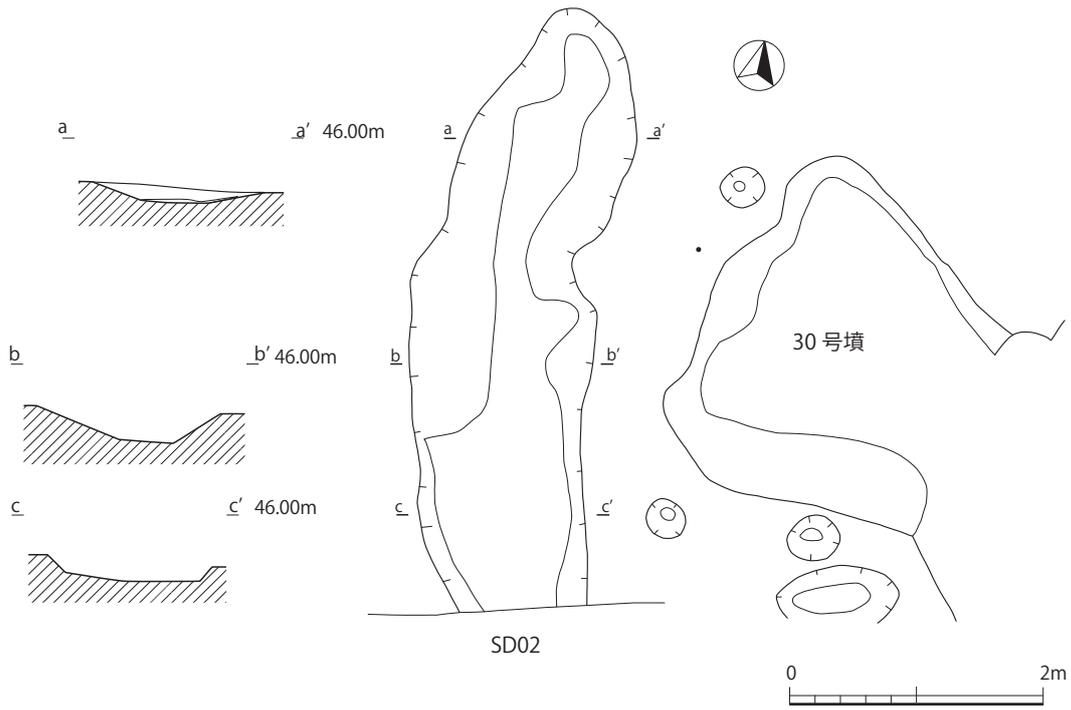
SD01 の掘削によって消失している可能性もある。SD02 の床面は南から中央部（第 18 図：b－b' 付近）に向かってやや低くなり、北側の溝の終端部に向かって再度レベルが高くなる。

3) 石室（第 19 図）

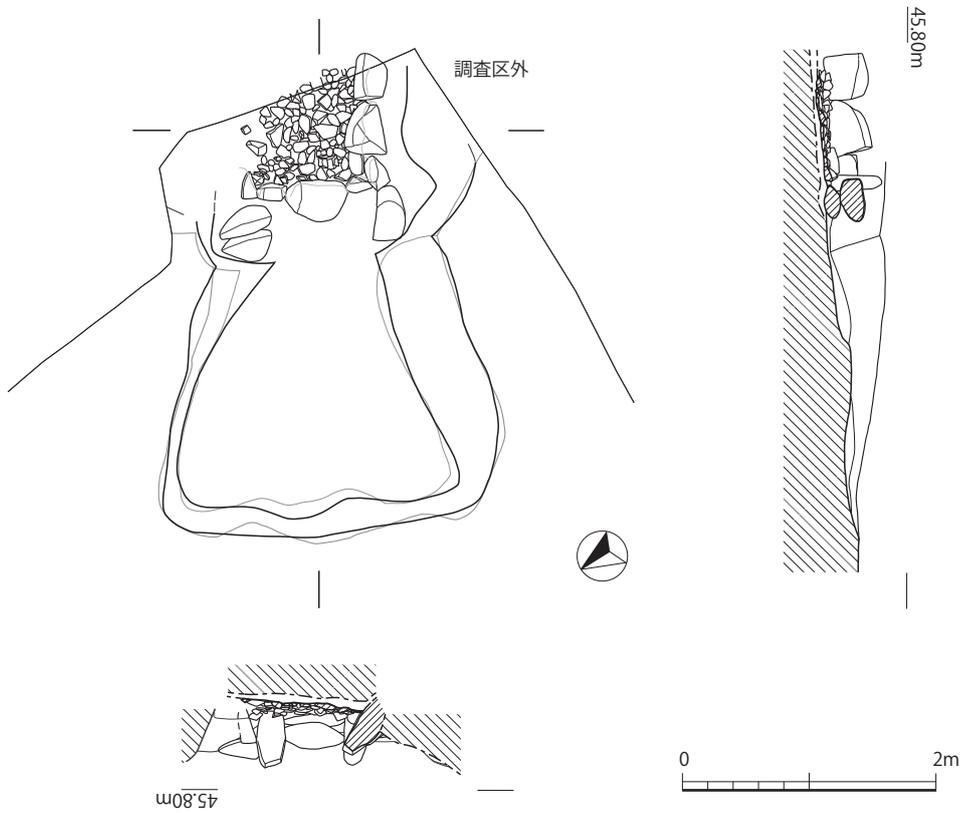
石室の奥壁側の半分以上が調査不能であり、玄室の一部と玄門部のみ検出した。このため石室の正確な規模や構造など不明であるが、北西方向に開口する単室の横穴式石室であると思われる。

玄室は玄門部寄りの一部のみを検出した。腰石は左側壁の玄門寄りの 2 石しか検出していない。幅 20cm 程の石を腰石として立てており、内面には朱が塗布されていた。いずれも内傾しており原位置を保つものと思われない。

玄門は細長い石を柱状に立てて袖石としている。左袖石は幅 20cm、高さ 40cm で側壁より内側に立て袖部をつくっている。右袖石も左袖石とほぼ同大の石材を立てており、両袖石の間には幅 50cm 程の石を据えて框石としている。前庭部側壁は左右ともに 40cm と短く、側壁から真直ぐ続いている。左右とも 1 段のみであり、左側は幅 25cm、長さ 40cm の石を長辺を主軸方向に沿って据えており、右側は左側よりやや小さめの石を長辺を主軸と直行する方へむけて 2 石並べている。墓道は検出されていない。閉塞は框石上に長さ 50cm、幅 30cm、厚さ 20cm の平石を積み上げて閉塞石としている。玄室内部には敷石が全面に敷かれており、床面は玄門に向かってゆるやかに上がっている。



第 18 図 30 号墳と SD02 実測図 (S=1/60)



第 19 図 30 号墳実測図 (S=1/60)

4) 出土遺物

主体部からも、周溝の可能性のある SD02 から、遺物は全く出土しなかった。

溝

SD01 (第 17・20 図)

調査区南壁中央部付近から北に向かい、調査区東壁中央から北部に至る溝である。溝の南部分は c-c' 間で 28cm と極端に幅が狭くなり、南壁付近 d-d' 間は 86cm と再度幅がやや膨らむ。一方、溝中央部から北部にかけては b-b' 間で 1.5m、a-a' 間で 3.2m を測り北に向かって次第に溝幅が膨らみ、東壁付近で最も幅が広がる。

床面は溝の北部の幅の広い部分では断面中央部がやや低いがほぼ平坦である。d-d' 間では溝の東側で段を形成して溝の床面に至る。溝の深さは、a-a' 間で 33cm、b-b' 間で 22cm、c-c' 間 6cm、d-d' 間 20cm を測る。床面のレベルから溝南部がやや高く、北に向かって床面は低くなる。

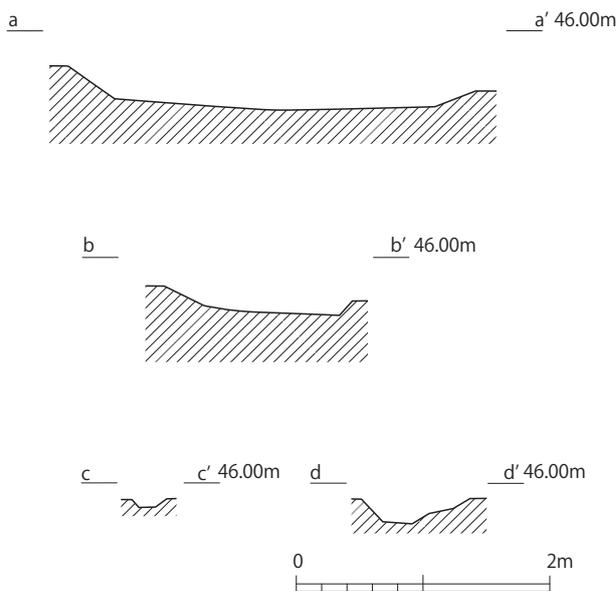
SD03 (第 21 図)

調査区中央部やや西寄りに位置する。溝の北西側は攪乱により削平される。SK03 の西 80cm に溝の東端部が位置しており、そこから軸を略東西にとる。溝の幅は 80cm から 85cm 程を測る。床面は幅 10cm 前後と狭いがほぼ平坦で、溝の深さは遺構検出面から最大で 25cm を測る。床面のレベルは溝東端部で高く、西側の攪乱に向かって低くなる。

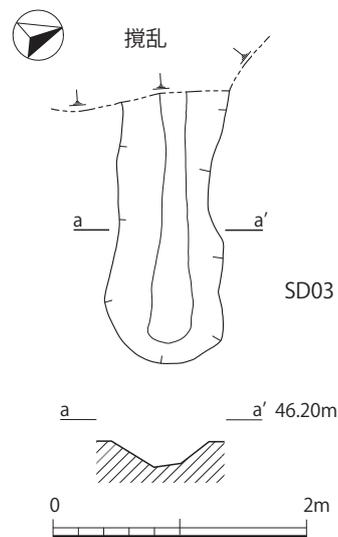
土坑

SK01 (第 22 図)

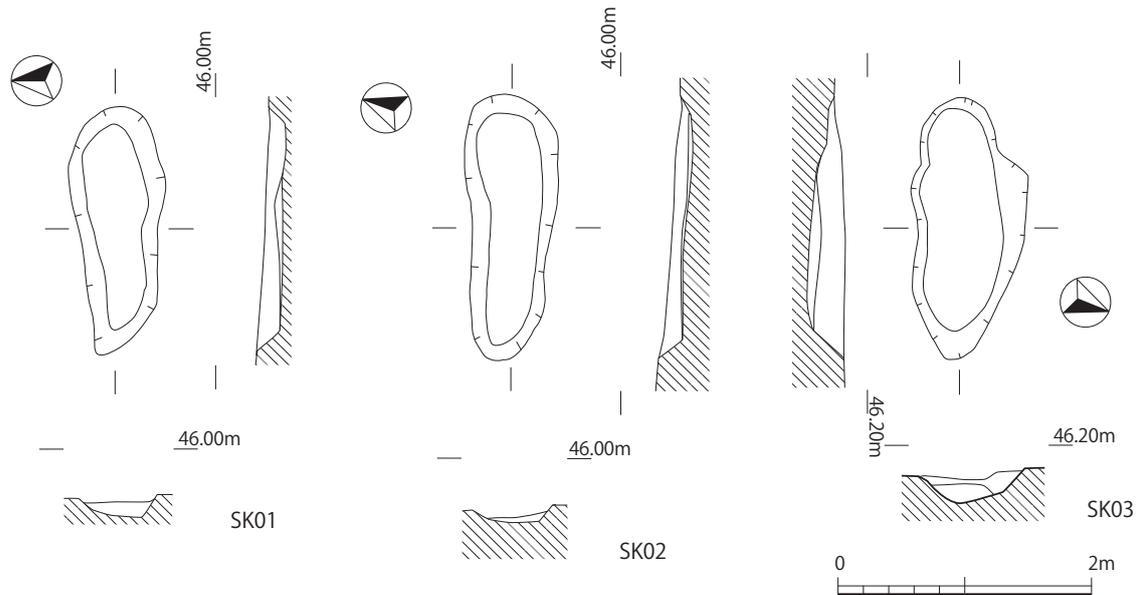
調査区の北隅に位置し、SK02 が南側に近接する。略東西方向に長軸をとる。平面プランは西側がやや先細りするが、長楕円形に近い形態を呈する。長軸方向は最大 2.0m、短軸方向は最大 0.8m を測る。床面は土坑中央部から西側はほぼ平坦であるが、土坑中央部から東側は緩やかに低くなる。遺構検出面からの深さは最大で 24cm である。



第 20 図 SD01 断面実測図 (S=1/60)



第 21 図 SD03 実測図 (S=1/60)



第 22 図 SK01、02、03 実測図 (S=1/60)

SK02 (第 22 図)

調査区の北隅に位置し、SK01 が北側に位置する。略東西方向に長軸をとり、平面プランは長楕円形を呈する。長軸方向は最大 2.1m、短軸方向は最大 0.75m を測る。床面は土坑中央部から西側はほぼ平坦であるが、土坑中央部やや東寄りのところでいったん高くなり、その東側で緩やかに低くなる。遺構検出面からの深さは最大で 27cm である。

SK03 (第 22 図)

調査区のほぼ中央部に位置する。東側約 1 m に SD01、西に約 80cm 離れて SD03 が位置する。略東西方向に長軸をとり、平面プランは、北側が土坑中央西部分で北に張り出し、南側はやや波打つが、ほぼ長楕円形を呈する。長軸方向は最大 2.1m、短軸方向は最大 0.9m を測る。床面は西端が浅い段をなし、中央部から東端部へ向かってゆるやかに傾斜する。遺構検出面からの深さは最大で 31cm である。

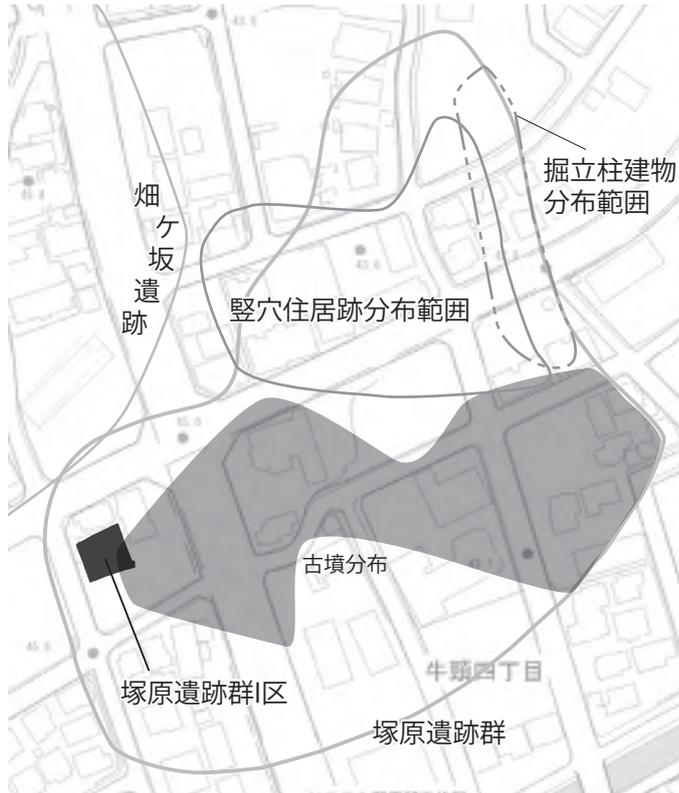
3. まとめ

(1) I 区の位置づけ (第 23 図)

牛頸塚原遺跡群内の古墳群は 5 世紀後半以降 6 世紀中頃まで造営されるが、西側から造墓が開始された点が既に指摘されている (大野城市教育委員会 1995)。30 号墳は古墳群の西端部に位置しており、石室プランの分類に基づく検討の結果、古墳群造営の最も早い段階に造営された可能性が想定されている (大野城市教育委員会 1995)。

(2) SD01 について

I 区を南西から北東方向へ斜めに走る SD01 の東側部分については、隣接調査区の G 区で検出されている溝 05 と連続している可能性が高い。一方、溝の南西部分は G 区で確認されておらず、I 区南壁付近でこの溝の幅が急に狭くなることを考慮すると、溝の南端部の可能性がある。本調査区



第 23 図 牛頸塚原遺跡群 I 区と周辺調査区 (S=1/600)

文献

大野城市教育委員会 1994 『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 42 集

大野城市教育委員会 1995 『牛頸塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第 44 集

大野城市教育委員会 2019 『畑ヶ坂遺跡 1－第 4 次調査－』大野城市文化財調査報告書第 170 集

SD01 については冒頭で述べた通り、出土遺物が不明のため時期の特定ができない。また、G 区で確認された溝 05 についても出土遺物は少なくわずかに須恵器の甕が出土しているが、時期については不明である。G 区のさらに東側の調査区でこの溝の続きと考えることのできる遺構が確認されていないため詳細については不明といわざるをえない。

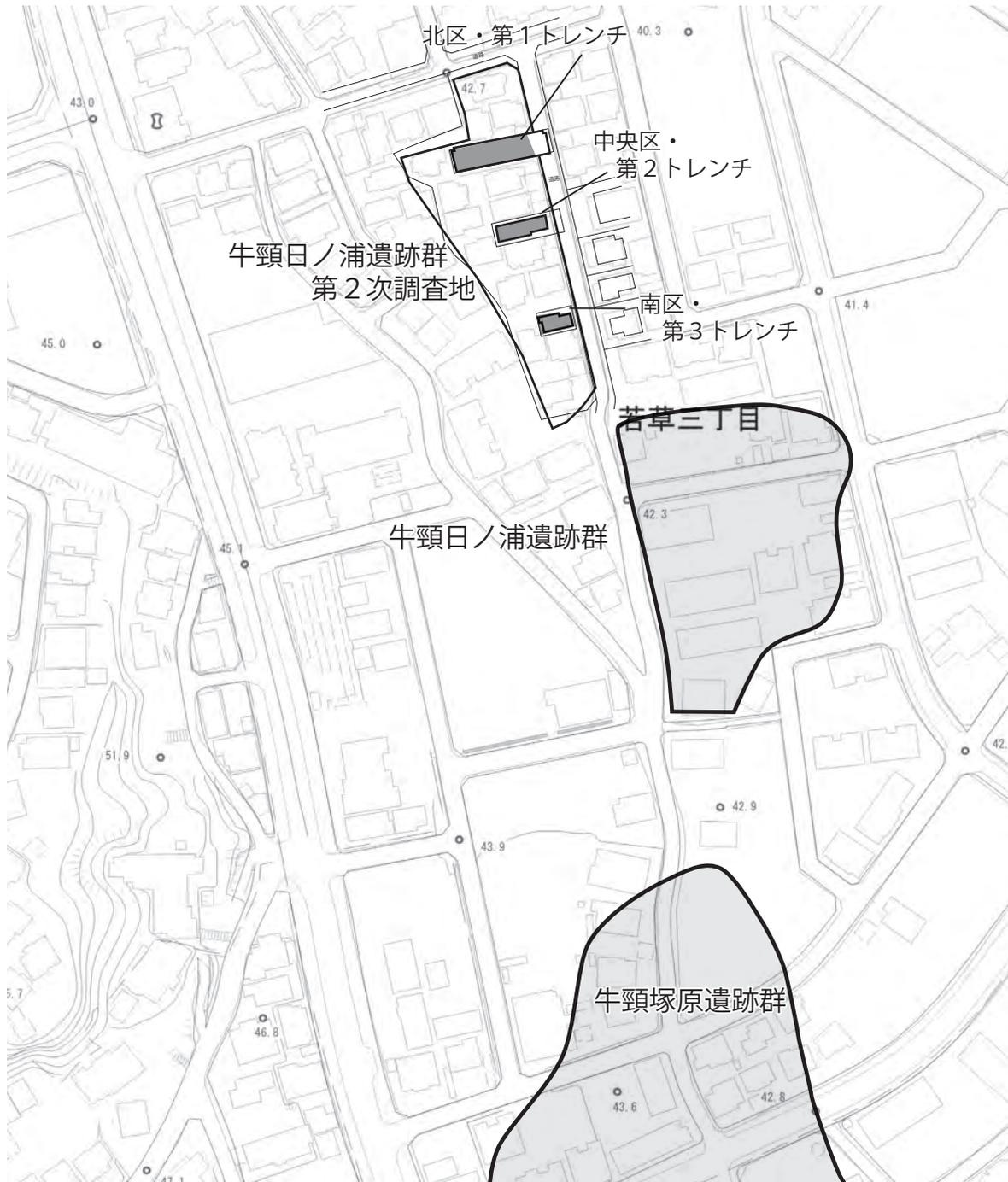
(3) 調査区と周辺遺跡について

牛頸塚原遺跡群の西側には畑ヶ坂遺跡、北には日ノ浦遺跡群が位置し、平野川を挟んで南には平野遺跡が位置する。牛頸日ノ浦遺跡群や牛頸塚原遺跡群の遺跡の性格については 5 世紀後半からの墳墓造営以降、6 世紀末から 7 世紀の集落造営、8 世紀代における集落の衰退などが考えられてきた。その後、畑ヶ坂遺跡の報告により、8 世紀代の遺跡の性格も次第に明らかになりつつある。今後、牛頸川の対岸に位置する平野遺跡の性格とも合わせ、この一帯の歴史的な性格の変遷をより巨視的に考えることができるようになるものと期待したい。

V. 牛頸日ノ浦遺跡群—第2次調査—

1. はじめに

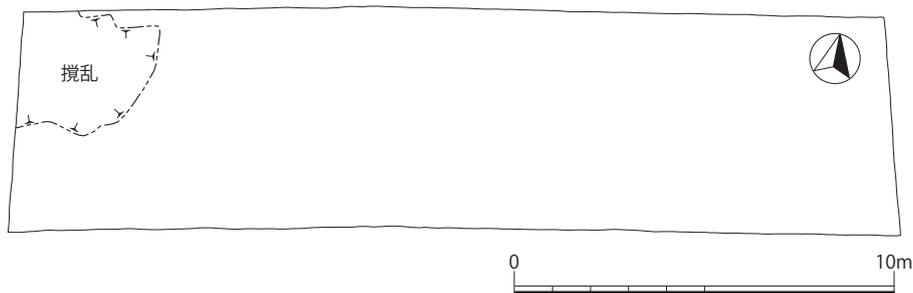
牛頸日ノ浦遺跡群は、牛頸川西岸の河岸段丘上に位置する。これまで牛頸日ノ浦遺跡群では、1988年から1989年の2ヶ年にわたって牛頸土地区画整理事業に伴い発掘調査が行われている。当時の調査地は以下で報告する調査地の南に位置する（第24図）。



第24図 牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査区位置図 (S=1/2,000)



第 25 図 牛頸日ノ浦遺跡群第 2 次調査区 トレンチ配置図 (S=1/800)



第 26 図 北区・第 1 トレンチ (S=1/200)

今回報告を行うのは、牛頸日ノ浦遺跡群第 2 次調査地点の成果についてである。対象地である大野城市若草 3 丁目 1631 番、28 番で宅地造成が計画された。そのため、平成 15 年 10 月 20 日から 21 日にかけて試掘調査を行った。その結果、今回の調査対象地である 1631 番から道路を挟んだ東側にある 28 番の南側は谷状に落ち込み遺構は確認されなかった。一方、1631 番では官舎跡地は大きく攪乱を受けていたが、それ以外の部分で遺構が確認された。その結果に基づき、平成 16 年 8 月 4 日から 9 月 7 日にかけて発掘調査を行った。発掘調査面積は約 270m²である。

2. 調査の成果

(1) 調査の概要 (第 25 図、図版 7・8)

牛頸日ノ浦遺跡群第 2 次調査地点は牛頸川西岸の河岸段丘上に位置し、現地表面の標高は約 44m を測る。調査は、平成 16 年 8 月 4 日～9 月 7 日に実施した。試掘調査で攪乱の著しかった官舎跡地を避ける形で調査対象地を北・中央・南の 3 区に区分したうえで調査を行った。

調査地は現地表下に盛土（30cm）、黄褐色砂（10～20cm）、黒褐色土（0～10cm）が堆積し、その下層を遺構検出面とした。北区（第1トレンチ）ではほぼ全面に攪乱がおよび、遺構は残っていなかった。中央区（第2トレンチ）では、調査区のほぼ中央部で、南北に延びる溝跡が確認された。また、この溝の東西から複数のピットが検出された。出土遺物は須恵器を中心とし、土師器も出土した。南区（第3トレンチ）では大半が攪乱を受けていたが、調査範囲の西側で溝を確認した。中央トレンチと同様に南北に延びるものと予想される。遺物は須恵器と土師器が出土した。

(2) 遺構と遺物

1) 北区・第1トレンチ（第25・26図）

調査範囲の北側に位置する北区（第1トレンチ）は、大規模な攪乱により遺構は全く残っていなかった。

2) 中央区・第2トレンチ（第25・27図、図版7）

調査範囲の中央に位置する中央区（第2トレンチ）は、調査面積が約80㎡である。トレンチの中央部で略南北方向のSD01が確認された。また、この溝の西側を中心に複数のピットが確認された。

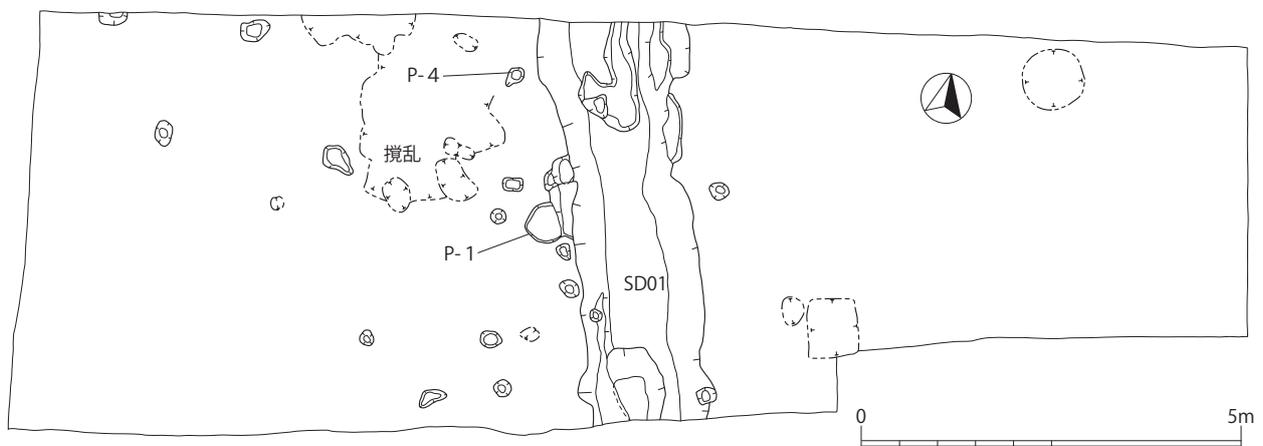
SD01（第28図、図版8）

調査区中央部に位置し北から南にかけて直線状に検出された。最大長は5.4m、最大幅は2.0mを測る。深さは70～80cmを測る。溝底面は南側がやや低く、断面形は逆台形を呈する。埋土は7層からなるが、各層とも水成堆積の痕跡は認められない。

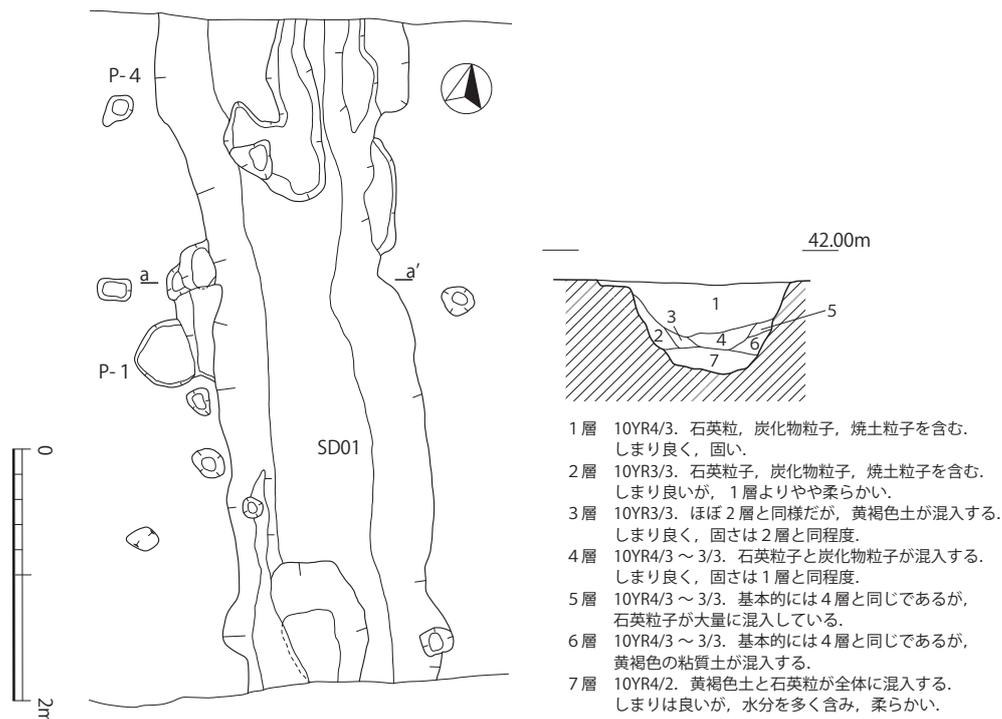
出土遺物（第29図、図版10）

須恵器

杯（95～99）95は杯Hの蓋である。天井部から丸みを持つ体部を経て口縁にいたる。外面にヘラ記号がみられる。96・97は杯Hの身である。96は口縁部がやや外反し、口縁下内面に1条沈線がめぐる。97は口縁部、身受けのかえりともにやや厚みを持ち、器高は低い。焼け歪みで器



第27図 中央区・第2トレンチ遺構配置図（S=1/100）



第 28 図 中央区・第 2 トレンチ SD01 実測図 (S=1/60)

形が大きくゆがむ。底部外面に弧状のヘラ記号がみられる。また、底部には別個体片が溶着する。98は杯蓋の体部片である。赤焼きの須恵器である。99は杯Aの身である。底部から体部が外に開き、口縁部で緩く外反する。底部外面に板状の圧痕が残る。

皿 (100) 口径 15.6 センチに復元できる皿である。底部はやや不安定な形状を呈する。底部内面に煤が付着している。

長頸壺 (101) 長頸壺の胴部片である。胴部最大径は 19.4cmに復元できる。

土師器

甕 (102) 甕の口縁部片で、胴部から短く口縁部が屈曲する。口縁部外面は縦方向の刷毛の後ナデ、内面は横方向のナデである。胴部外面はハケメ、内面は不定方向のケズリである。

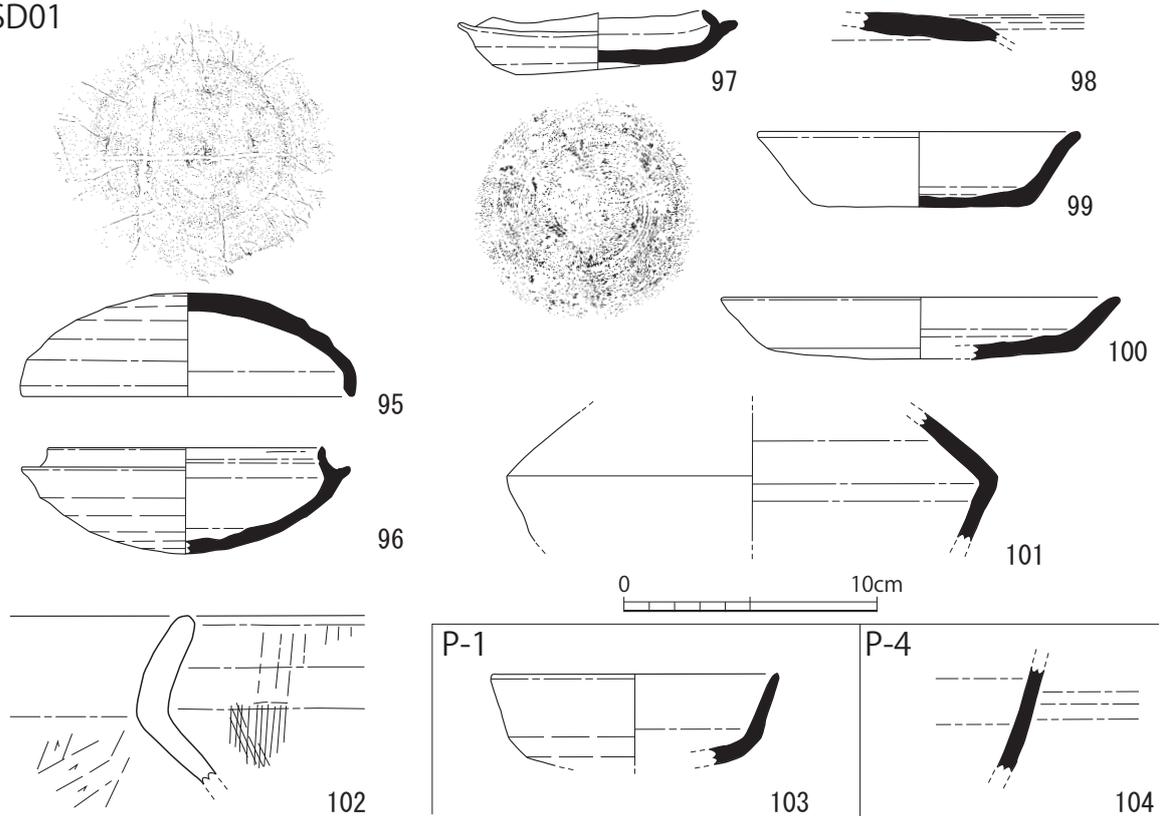
ピット (第 28 図)

SD01 の西側を中心に複数のピットが確認された。以下資料化可能な遺物が出土したピットについて報告するが、これら 2つのピット以外にも、細片のため図化できなかったが P-3 から赤焼きの須恵器小片が出土している。

P-1 出土遺物 (第 28・29 図)

調査区の中央部 SD01 の西側に位置する。ピットの東側は SD01 によって削平されているが、平面形は略円形を呈するものと推測される。最大径は 53cm、深さは最も深いところで 6cmを測る。出土遺物は以下に報告する須恵器以外出土していない。

SD01



第 29 図 中央区・第 2 トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

須恵器

高杯 (103) 無蓋高杯の杯部である。脚部との接合部は残存しない。杯部はやや浅く、体部が若干丸みを持ち口縁に向かって外に開く。

P-4 出土遺物 (第 28・29 図)

SD01 の西側、調査区北壁近くに位置する。平面形は南西側が不整形に膨らむややいびつな長楕円形を呈する。長軸方向 30cm、短軸方向 20cm、深さは 25cm を測る。出土遺物には以下の須恵器以外に詳細不明の土器細片が出土している。

須恵器

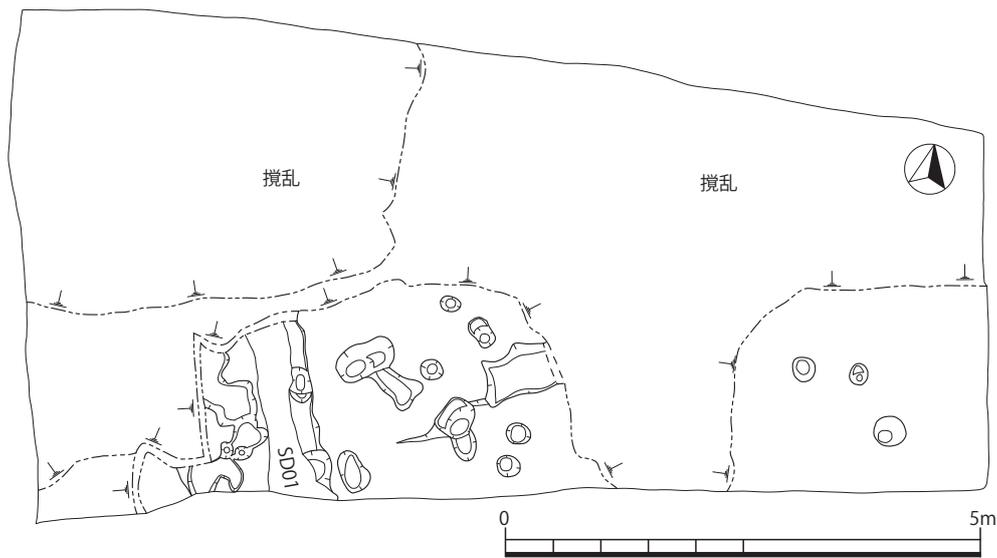
杯 (104) 杯身の体部片であろう。胎土は精良で、焼成も良好である。内外面回転ナデで丁寧に仕上げる。色調は明るい赤褐色を呈し、赤焼きの須恵器である。

3) 南区・第 3 トレンチ (第 25・30 図、図版 8)

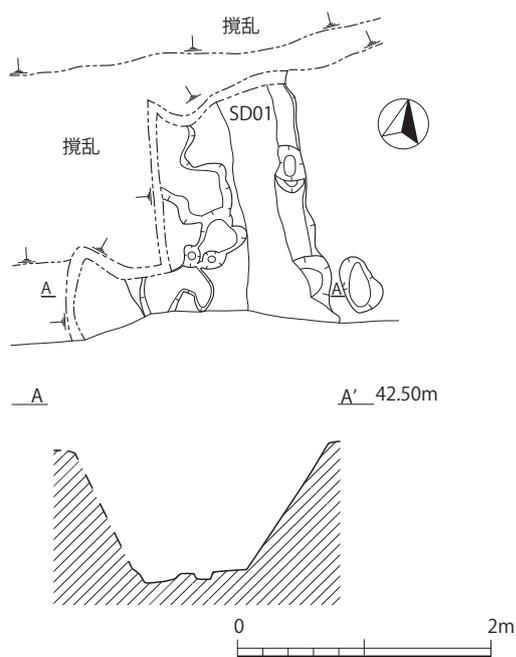
調査面積は約 50m² であるが、調査区の半分以上が攪乱を受けている。攪乱をまぬがれたトレンチの南東部でピット複数、南西部で SD01 ほかピット複数が確認された。

SD01 (第 31 図、図版 9)

調査区南西部で南北方向に確認された。溝の西側は攪乱によって削平を受けているが、調査区南壁付近で肩部と推測される部分を確認した。溝の北部は攪乱によって消失しており、南部は調査



第30図 南区・第3トレンチ遺構配置図 (S=1/80)



第31図 南区・第3トレンチ
SD01 実測図 (S=1/60)

区外に延びる。残存部の最大長は1.9m、最大幅は2.0m、深さは最も深いところで1.1mを測る。溝底面は北から南へやや低くなる。出土遺物は以下の報告資料以外に、縄文土器や土師器の細片が出土しているが、図化はできなかった。

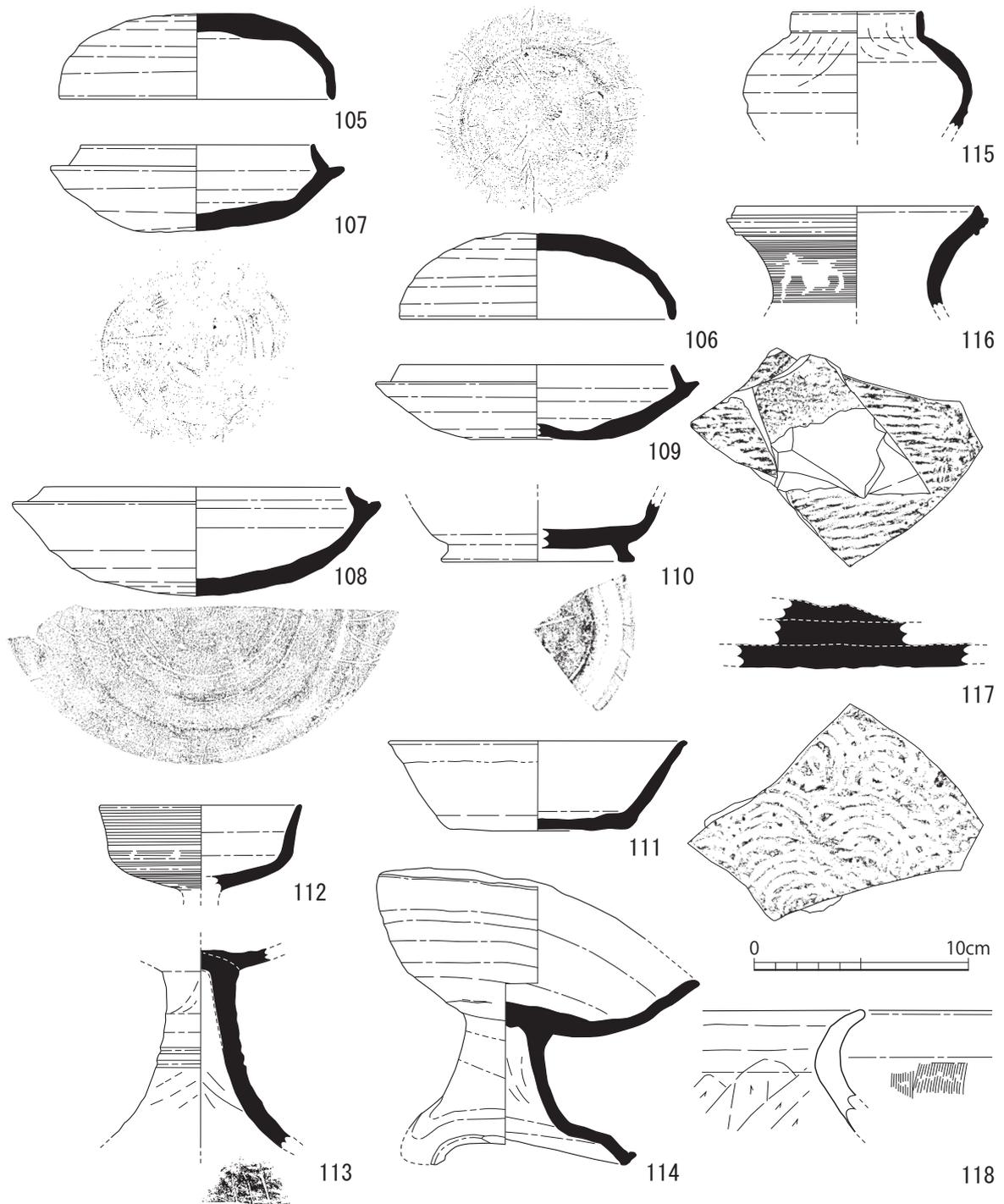
出土遺物 (第32図、図版10)

須恵器

杯 (105～111) 105・106は杯Hの蓋である。105は天井部と体部の境がなく丸みを持つ。天井部はやや厚みを持つ。106も同様に丸みを持つ体部で、天井部と体部の境はない。天井部外面にヘラ記号がみられる。双方とも口径12.8cm、器高4.0cmである。107～109は杯Hの身である。107の口縁部は内傾し端部は先細る。108は丸みを持つ体部で、口縁部は内傾し端部は先細る。受け部下位外面にヘラ記号がみられる。109はやや器高が低く扁平な体部を呈する。110は杯

Bの身で、底部から体部下位までが残る。底部やや内側に外に開く高台がつく。高台内にヘラ記号がみられる。111は杯Aである。底部から外に向かって開く体部がつく。底部は回転ヘラ切り後ナデである。口縁部外面に重ね焼きの痕跡がみられる。

高杯 (112～114) 112は無蓋高杯の杯部で、体部がやや角張る。外面全面にカキメを施す。113



第 32 図 南区・第 3 トレンチ SD01 出土遺物実測図 (S=1/3)

は高杯の脚部である。脚部中位に 2 条の沈線を施す。脚裾近く内面にヘラ記号がみられる。114 は短脚の無蓋高杯である。焼け歪みのため大きく器形がゆがむ。脚裾部に段がつく。器面全体に降灰がみられる。

壺 (115) 短頸壺で、口縁部は短く直立する。口径 6.0cm、胴部最大径 10.6cm に復元できる。胴部上半にシボリ状の痕跡が残る。

甕（116）小形の甕で、口縁部から頸部まで残存する。口径は11.2cmに復元可能である。頸部外面にカキメを施す。外面に降灰がみられる。

その他（117）甕の破片が3片溶着したものである。

土師器

甕（118）甕の口縁部片で、胴部から短く外反する口縁がつく。口縁部内外面はナデで、その下位は縦方向のハケメ、内面は不定方向のケズリである。

ピット

ピットはトレンチ南東部と南西部で複数検出されたが、ピット番号の記録が残っておらず、いずれのピットから以下の遺物が出土したのかは不明である。また、以下に報告するピット以外からも須恵器や土師器の小片が出土しているが細片のため図化できなかった。

P-4出土遺物（第33図）

須恵器

杯（119）杯Bの底部片である。高台は低く、垂直につく。

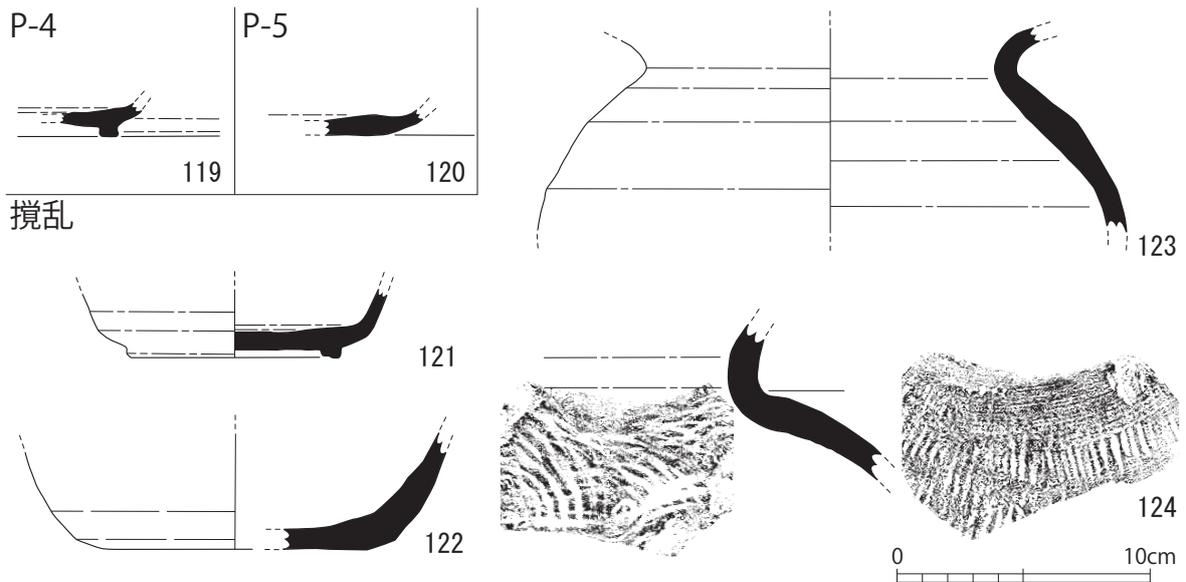
P-5出土遺物（第33図）

須恵器

杯（120）杯の底部片である。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面はナデで底部と体部の境が強いナデでややくぼむ。

その他の出土遺物（第33図）

南区は先ほど述べたように調査範囲の半分以上が攪乱を受けているが、この攪乱からも良好な資料が出土している。



第33図 南区・第3トレンチ ピットおよびその他の出土遺物実測図 (S=1/3)

須恵器

杯（121）杯Bの身で、底部から体部下半まで残る。底部のやや内側に低い高台がつく。高台径は8.2cmである。

鉢（122）鉢の底部であろうか。体部下端までヘラケズリで、その上部は回転ナデである。底径は10.4cmに復元できる。

甕（123・124）123は胴部から頸部下半までの破片である。内外面とも調整は横ナデで仕上げる。胴部から頸部へ強く屈曲する。124は甕の胴部から頸部にかけての破片である。内面に青海波の当て具痕がみられ、外面胴部はタタキで、頸部との境付近にはその後カキメが施される。

表5 牛頭日ノ浦遺跡群第2次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径⑤最大径※(復元値)〈残存値〉			
95	須恵器	杯蓋	中央調査区溝01	①13.2 ②4.1	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒、微細な褐色粒を少し含む B:不良 C:内外7.5YR8/4 浅黄褐色	外面ヘラ記号あり
96	須恵器	杯身	中央調査区溝01	①(11.0) ②4.2 受部径13.0	底部外面中央ヘラ切り 底部外面回転ヘラケズリ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色砂粒、金雲母を少し含む B:やや不良 C:内2.5YR5/3 にぶい赤褐色 外2.5YR 5/3 にぶい赤褐色～7.5YR7/4 にぶい橙色	
97	須恵器	杯身	中央調査区溝01	①8.2 ②2.4 受部径11.0	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒、長石類を多く含む B:良好 C:内5RP4/1 暗紫灰色～5PB4/1 暗青灰色～5PB6/1 青灰色 外5P2/1 紫黒色～5PB5/1 青灰色～5PB7/1 明青灰色	外面ヘラ記号あり 内外面降灰 歪み著しい
98	須恵器	杯蓋	中央調査区溝01	②(1.15)	天井部外面回転ヘラケズリ一部回転ナデ 天井部内面ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し、雲母をやや多く含む B:良好 C:内外5YR6/6 褐色	
99	須恵器	杯	中央調査区溝01	①12.8 ②3.0 ③8.6	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石、金雲母、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内7.5Y6/1 灰色～2.5Y7/2 灰黄色 外N6/ 灰色～2.5Y7/1 灰白色	体部外面粘土付着
100	須恵器	皿	中央調査区溝01	①(15.8) ②2.4	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色砂粒、金雲母を少し含む B:良好 C:内10YR6/1 褐色～N6/ 灰色 外N6/ 灰色～N7/ 灰白色	
101	須恵器	長頸壺	中央調査区溝01	②(5.1) 肩部径(19.4)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色砂粒を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外2.5GY5/1 オリーブ灰色	
102	土師器	甕	中央調査区溝01	②(6.9)	体部外面ハケメ 体部内面ケズリ 口縁部外面ハケメ後ナデ 口縁部内面ヨコナデ	A:3mm以下の白色砂粒、金雲母を少し含む B:良好 C:内7.5YR7/6 褐色～7.5YR5/3 にぶい褐色～7.5YR4/1 褐色 外7.5YR7/6 褐色～10YR6/2 灰黄褐色～10YR2/1 黒色	内外面煤付着
103	須恵器	高杯	中央調査区P-1	①(11.4) ②(3.6)	底部外面ヘラケズリ後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N7/ 灰白色～N6/ 灰色	
104	須恵器	杯身	中央調査区P-4	②(4.2)	内外面回転ナデ	A:微細な黒色粒子、褐色粒、金雲母を少し含む B:良好 C:内外2.5YR5/8 明赤褐色	赤焼き土器
105	須恵器	杯蓋	南調査区溝01	①12.8 ②4.0	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面ナデ 他は回転ナデ 天井部内面シタ痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、金雲母、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内5Y7/1 灰白色 外5YR7/1 灰白色～5Y7/2 灰白色	
106	須恵器	杯蓋	南調査区溝01	①12.8 ②4.0	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:不良 C:内2.5YR5/3 にぶい赤褐色 外2.5YR 5/3 にぶい赤褐色～7.5YR7/4 にぶい橙色	外面ヘラ記号あり
107	須恵器	杯身	南調査区溝01	①10.9 ②4.0 受部径13.7	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色・黒色砂粒を少し含む B:良好 C:内5PB6/1 青灰色 外N5/ 灰色～10YR8/1 灰白色	外面降灰 外面ヘラ記号あり

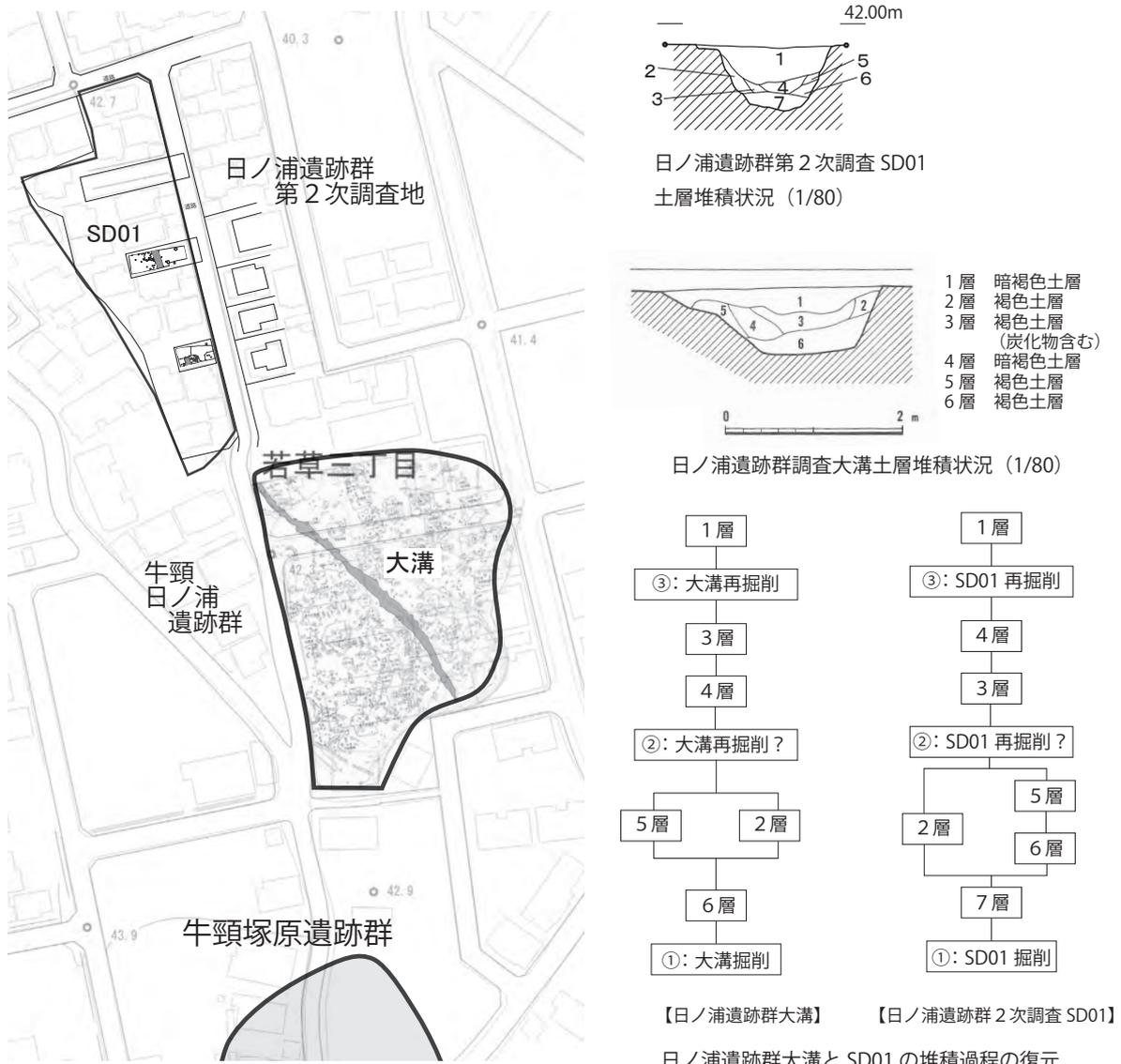
表6 牛頭日ノ浦遺跡群第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径⑤最大径※(復元値)〈残存値〉			
108	須恵器	杯身	南調査区溝 01	①(14.2) ②5.1 受部径(17.2)	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、黒色粒子、金雲母を少し含む B:やや良好 C:内N4/ 灰色、10YR5/1 褐灰色～10YR8/1 灰白色 外N4/ 灰色、5PB6/1 青灰色、2.5Y7/1 灰白色	外面ヘラ記号あり
109	須恵器	杯身	南調査区溝 01	①(12.8) ②3.5 受部径(15.1)	底部外面中央ヘラ切り 底部外面回転ヘラケズリ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒、長石、石英、微細な黒色粒子、金雲母を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色～N5/ 灰色 外N3/ 暗灰色～N7/ 灰白色	外面降灰、自然釉?
110	須恵器	杯身	南調査区溝 01	②(2.9) ④(9.0)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:不良 C:内7.5YR5/8 明褐色 外10YR7/4 にぶい黄褐色～7.5YR6/4 にぶい橙色	ヘラ記号あり
111	須恵器	杯	南調査区溝 01	①(14.0) ②4.2	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒子、金雲母を少し含む B:不良 C:内2.5Y8/2 灰白色～10YR6/2 灰黄褐色～5Y4/1 灰色 外2.5Y8/1 灰白色～10YR7/4 にぶい黄褐色～5Y4/1 灰色	口縁部外面重ね焼き痕あり
112	須恵器	高杯	南調査区溝 01	①(9.4) ②(4.0)	外面カキメ 内面回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～5Y4/1 灰色	
113	須恵器	高杯	南調査区溝 01	②(9.2) 基部径3.6	内外面回転ナデ 内外面シボリ痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:杯部内面2.5Y7/1 灰白色 脚部内面5Y7/1 灰白色 脚部外面N6/ 灰色	脚部内面ヘラ記号あり
114	須恵器	高杯	南調査区溝 01	①15.8 ②13.9 脚部径(10.9)	杯部底部外面回転ヘラケズリ 杯部底部内面ナデ 他は回転ナデ 脚部内面シボリ痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内N6/ 灰色～N3 暗灰色 外5Y5/1 灰色～7.5Y2/1 黒色～N5/ 灰色	内外面降灰・自然釉歪みあり
115	須恵器	短頸壺	南調査区溝 01	①(6.2) ②(5.5)	内外面回転ナデ 肩部内外面シボリ痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:良好 C:内2.5Y6/1 黄灰色 外2.5Y6/1 黄灰色～10YR2/1 黒色	外面降灰
116	須恵器	小形甕	南調査区溝 01	①(11.2) ②(4.8)	頸部外面カキメ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を少し含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N6/ 灰色～N1.5/ 黒色 外N6/ 灰色～N1.5/ 黒色	内外面降灰
117	須恵器	熔着資料	南調査区溝 01	②(3.4)	外面平行タタキ 内面同心円当て具痕	A:3mm以下の白色砂粒、黒色粒子を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N4/ 灰色 外N5/ 灰色～N3/ 暗灰色	内外面降灰・自然釉
118	土師器	甕	南調査区溝 01	②(5.7)	体部外面ハケメ 体部内面ケズリ 他はヨコナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、石英、微細な黒色粒子、金雲母を含む B:良好 C:内2.5Y7/3 浅黄色～2.5Y6/2 灰黄色 外2.5Y6/1 黄灰色～2.5Y6/3 にぶい黄色	
119	須恵器	杯身	南調査区 P-4	②(1.3)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、黒色粒子、金雲母を少し含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N6/ 灰色～2.5GY8/1 灰白色～N7/ 灰白色	
120	須恵器	杯	南調査区 P-5	②(1.0)	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒、金雲母を少し含む B:良好 C:内7.5Y7/1 灰白色～5Y8/2 灰白色 外2.5Y7/3 灰黄色～10Y8/1 灰白色	
121	須恵器	杯身	南調査区カクラン	②(2.7) ④8.2	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色	
122	須恵器	鉢	南調査区カクラン	②(4.6) ③(10.4)	底部外面回転ヘラケズリ後ナデ 底部内面回転ナデ後指オサエ 体部外面下位回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子、金雲母を少し含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N6/ 灰色	
123	須恵器	甕	南調査区カクラン	②(8.1) 頸部径(14.6)	内外面ヨコナデ	A:1mm以下の白色砂粒、黒色粒子を少し含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N4/ 灰色 外N7/ 灰白色～N5/ 灰色	
124	須恵器	甕	南調査区カクラン	②(6.1)	肩部外面上面タタキ後カキメ 下位タタキ 肩部内面同心円当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒子を含む B:軟質 C:内外2.5Y8/1 灰白色	

3. まとめ

牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査では調査対象地3箇所のトレンチ調査によって、中央区および南区でSD01 およびピットを複数確認した。南区トレンチ内ピットからはⅦ期の須恵器が出土している。また、南区の攪乱からも古墳時代後期の遺物に加え、8世紀代の遺物が出土している。中央区で確認されたSD01からはⅣ期の杯に加え、Ⅶ期の杯や皿あるいは長頸壺が出土している。南区のSD01でも同様にⅣA期を中心に、Ⅶ～Ⅷ期の杯Bや杯Aが出土している。

一方、第2次調査区の南に位置する日ノ浦遺跡群の調査範囲との関連を考えると、日ノ浦遺跡群で確認された大溝（第34図）は今回報告したSD01と一連の溝と推定される。日ノ浦遺跡群の大溝では、7世紀前半から中葉頃の遺物が主にみられる。双方の溝の土層断面をみると、類似した堆積過程をしていることがわかる。土層断面図を比較すると、最初の溝の掘削の後、溝の埋没までに1～2回ほど掘りなおしているものと推定できる。溝出土遺物の主たる時期もそれほど大きく異なる



第34図 牛頸日ノ浦遺跡群における大溝とSD01 (S=1/2, 000)

らず、また埋没過程にも類似性が認められることから、今回報告した中央区、南区で確認されたSD01は、日ノ浦遺跡群の大溝の北側に続く部分と考えることができる。大溝の床面のレベルについては北端と南端でいずれが低くなっているか不明である。しかし、第2次調査SD01では北から南に緩やかに傾斜している。

第1次調査地東南部から第2次調査地点中央区トレンチまでで大溝・SD01のおおよその長さは150mほどとなるが、溝の性格については不明といわざるをえない。第2次調査では調査対象地内に3つのトレンチを設定して調査を行ったが、攪乱のため周辺の遺構の広がりについては不明である。今後の調査の進展によって周辺の様相が明らかになるとともに溝の性格についても新たな知見がえられることを期待したい。

VI. 牛頸屏風田遺跡—第3・4次調査—

1. はじめに

牛頸屏風田遺跡は、大野城市横峰2丁目に位置する。遺跡は牛頸川東岸の小平野に面した低丘陵裾部に位置している。牛頸屏風田遺跡では、これまでに平成5年に倉石土地区画整理事業としてA区～C区の発掘調査が行われている。

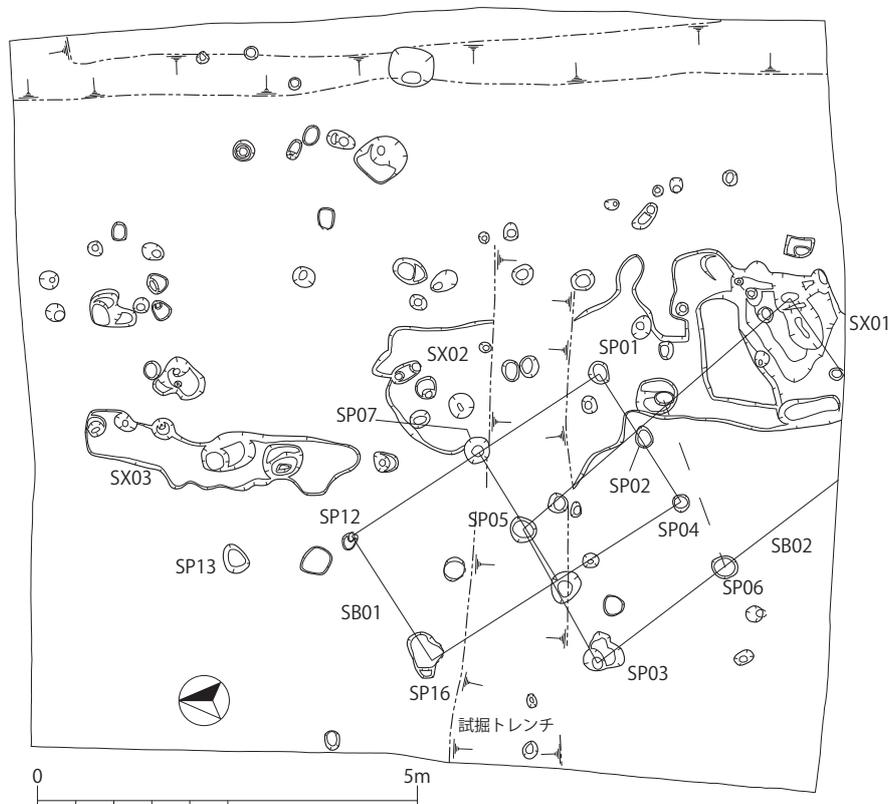
今回報告を行うのは、第3・4次調査の成果についてである。上記のA区は第3・4次調査地点の北側約120mに位置し、B・C区は北西側約60mの位置にある(第2図)。

2. 第3次調査の成果

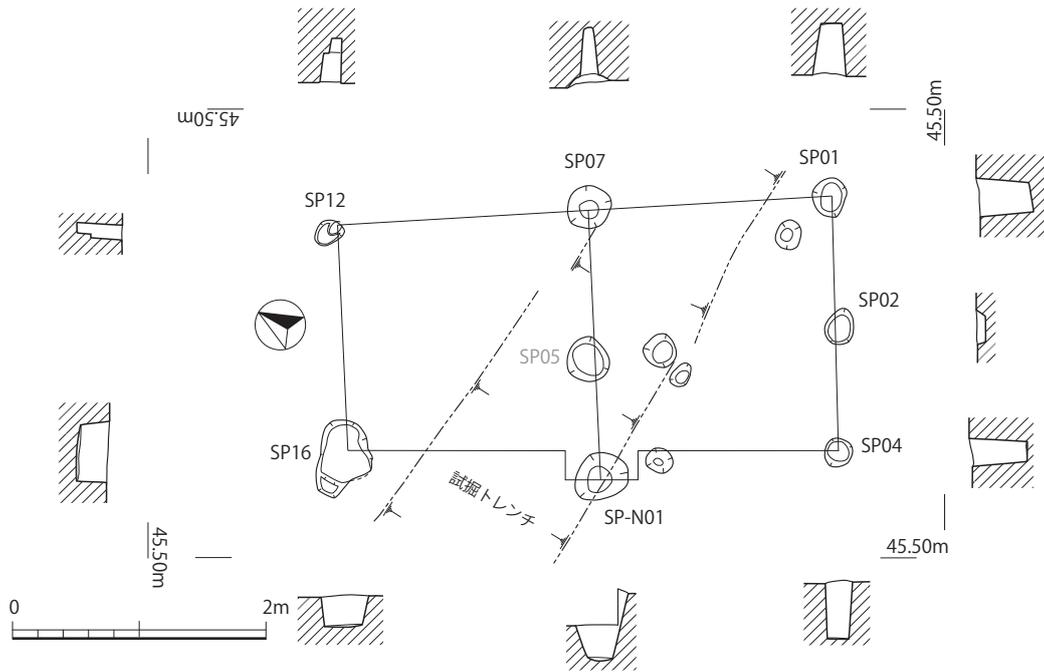
(1) 調査の概要(第2図、図版11)

屏風田遺跡第3次調査地は、大野城市横峰2丁目1236-4、1235-1に所在する。調査対象地で個人住宅の建設が予定されたため、平成20年4月25日に試掘を行った。その結果、現地表下45～70cmでピット等を検出した。そのため、対象地110㎡について発掘調査を実施した。調査地は東から西に向かってゆるやかに傾斜し、現地表面の標高は46mを測る。調査は、平成20年7月22日から8月18日にかけて実施した。

基本土層は1層・客土(20cm)、2層・にぶい黄褐色粘質土(20cm)、3層・灰黄褐色粘質土(15cm)、



第35図 牛頸屏風田遺跡第3次調査区遺構配置図 (S=1/100)



第 36 図 第 3 次調査 SB01 実測図 (S=1/60)

4 層・黒褐色粘質土 (20cm) である。2 層、3 層は水田作土、4 層が遺物包含層で 1～3 mm の砂粒を多く含む。包含層の下位・褐色土を遺構検出面とした。

調査の結果、掘立柱建物 2 棟、性格不明土坑 3 基、ピットを検出した。遺物は遺構埋土中から須恵器、土師器、石器などが出土した。

(2) 遺構と遺物 (第 35 図)

調査地の南部で掘立柱建物 2 棟が確認された。また、その東に一部掘立柱建物と重複して性格不明土坑 SX01 と SX02 が確認された。これらの性格不明の土坑内およびその西側でピット多数が確認された。調査区北部では SX03 及びピットが多数確認された。以下、掘立柱建物と遺物の出土した遺構を中心に報告する。

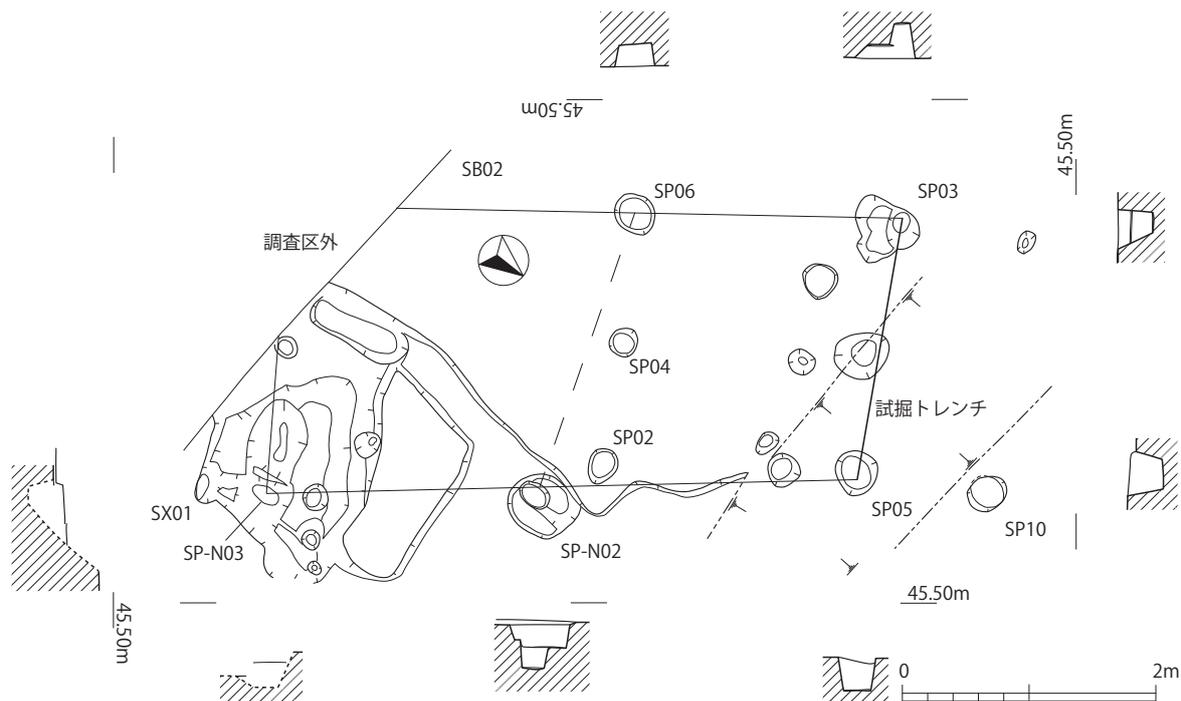
1) 掘立柱建物

SB01 (第 36 図、図版 12)

調査範囲の南西部に位置する。平面プランは北西—南東方向に桁行をとる 1 × 2 間の規模である。桁行 3.9m、梁行 1.8～2.0m を測る。掘方は SP04 が 22.6 × 23.1cm、SP12 が 23.7 × 20.5cm と小さく、SP16 が 44.8 × 62.4cm と最も大きい。深さは、SP12 が最も浅く 36.2cm で、SP-N01 の 57.6cm が最も深い。出土遺物は須恵器、土師器の小片が出土しているが、いずれも細片のため図化できなかった。

SB02 (第 37 図、図版 12)

SB01 の南西部分に一部重複して位置する。平面プランは北西—南東方向に桁行をとる。建物の南西隅は調査区外となるが、1 × 2 間の規模と推定される。SB01 の桁行とほぼ同方向である。桁行 4.7m、梁行 2.1m を測る。掘方は SP06 が 32.3 × 33.2cm と最も小さく、SP-N02 が桁



第 37 図 第 3 次調査 SB02 実測図 (S=1/60)

行 58.1 × 梁行 56.3cm を測る。深さは、最も浅いのが SP06 の 19.4cm で、最も深いのは SP-N02 の 40.2cm である。出土遺物は以下の報告資料の他に、弥生土器、須恵器の小片が出土しているが細片のため図化できなかった。

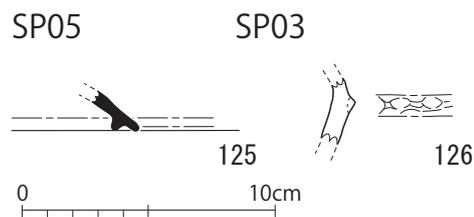
出土遺物 (第 38 図)

須恵器

杯 (125 : SP05 出土) 杯 G 蓋の口縁部片である。かえりは小さく端部を丸く仕上げる。

弥生土器

深鉢 (126 : SP03 出土) 刻目突帯文土器の胴部屈曲部片である。胴部屈曲部に微小な断面三角の突帯を 1 条めぐらし、横楕円形に近い刻目を施す。



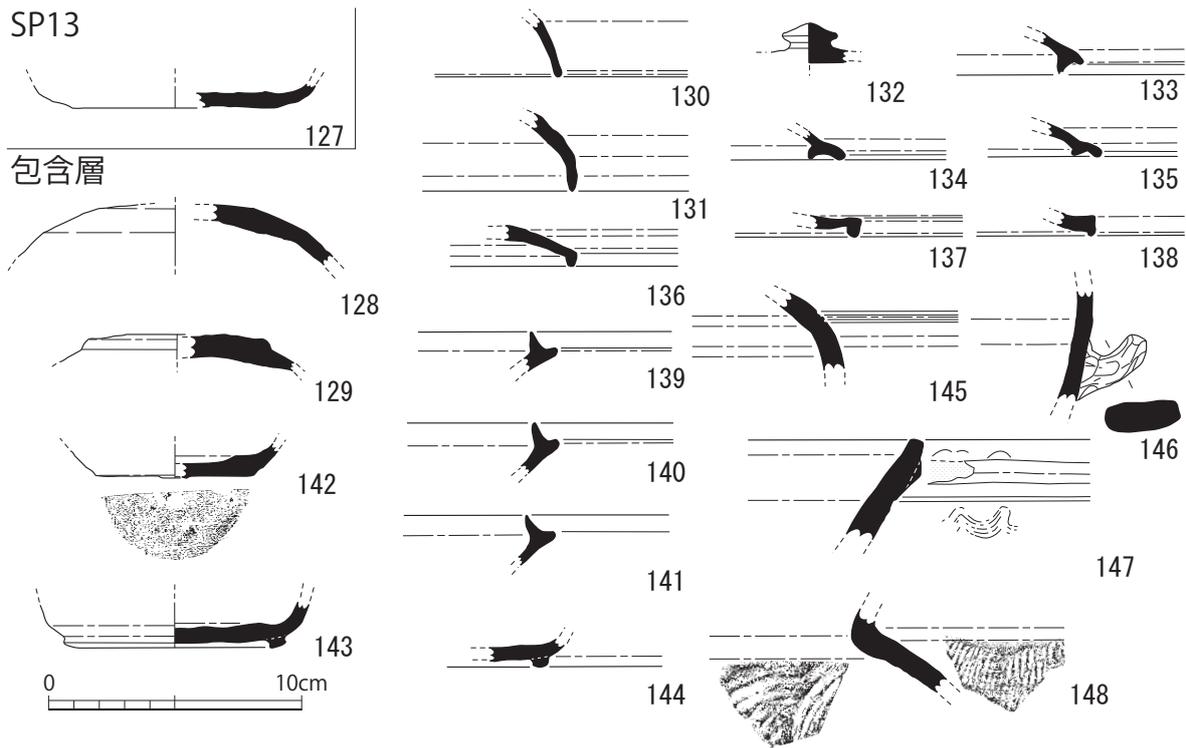
第 38 図 第 3 次調査 SB02 出土遺物 実測図 (S=1/3)

2) 性格不明遺構

調査区中央部北部で SX03、その南側で SX01 と SX02 が確認された。しかし、SX02 と SX03 はともに深さ 5cm 前後で掘方上面の輪郭も不整形ではっきりしない。浅いくぼみ状の部分に遺物が堆積したものである可能性が高い。SX01 は SX02 と一つの遺構の可能性はあるが、遺構の輪郭が不明瞭でその性格は不明である。出土遺物は詳細不明の土器片、須恵器、土師器の細片が出土するが、器面の風化も激しく図化できるものはなかった。

3) ピット

調査区の全面で多数のピットが確認されたが、その内 SP13 から須恵器の杯蓋が出土した。その他のピットからは詳細不明の土器片、須恵器、土師器の小片が出土している。いずれも細片化して



第 39 図 第 3 次調査 ピットおよびその他の出土遺物実測図 (S=1/3)

おり図化できなかつた。

SP13 出土遺物 (第 39 図、図版 15)

須恵器

杯 (127) 杯の底部である。底部外面は回転ヘラケズリで、内面はナデである。

4) その他の出土遺物 (第 39 図)

以上の遺構出土遺物の他に包含層からも多くの遺物が出土している。

出土遺物

須恵器

杯 (128 ~ 144) 128 ~ 138 は杯蓋である。128 は天井部の破片で、体部にかけて丸みを持つ。129 は蓋の天井部片で、外面はヘラ切り後ナデである。天井部と体部の境に段が形成される。130・131 は口縁部から体部にかけての小片である。130 は体部からゆるく折れ口縁端部にいたる。131 は体部から緩やかに湾曲して口縁端部にいたる。132 は杯蓋のつまみで、やや低い宝珠形である。133 ~ 135 はかえりのつく杯蓋口縁部である。133 はかえりが体部より下方にでる。134 はかえりが小さく、口縁部がやや外反し端部は丸みをもつ。135 もかえりが小さく口縁部は外反し端部はやや肥厚し丸みをもつ。136 ~ 138 も杯蓋の口縁部片であるが、かえりが消失し、端部を短く下方に折る。137 は体部からやや反り気味に口縁の屈曲部にいたり、端部を下方に強く折る。138 の口縁端部はわずかに下方に段を形成するにとどまる。139 ~ 141 杯身の口縁部片で、いずれも受け部は小さく、口縁端部は先細りに短く立ち上がる。142 は杯の底部片であろう。底部と体部の境が明瞭で、底部外面にヘラ記号がみられる。143・144 は杯 B の身である。143 は低い

高台がやや外向きにつく。底部と体部の境は丸みがある。144 は断面逆かまぼこ状の小さな高台がつく。

壺 (145) 壺肩部の小片であろう。上半部外面にやや浅い沈線文が2条めぐる。

甕 (146 ~ 148) 146 は把手付の甕の胴部片である。把手は指オサエとナデで整形する。胴部内外面は回転ナデである。147 は甕の口縁部片である。口縁部外面に粘土を張り付け凹線文を施す。その下位には波状文を施す。148 は甕の胴部片で、外面に平行タタキの後一部カキメ、内面には当て具痕が残る。

(3) 小結

遺構の時期についてであるが、SB02 からはV期の杯蓋片が出土している。しかし細片であり、この1点だけで遺構の時期を決めることができるかどうか判断が難しい。掘立柱建物の他には、ピット出土の遺物がある。SP13 からは、VI~VII期のものと考えられる杯Aが出土している。

その他の遺物の時期をみると、IV期以降、V期~VII期の遺物が出土している。これらから、遺跡形成の主たる時期は7世紀前後から8世紀にかけてと考えることができるであろう。

3. 第4次調査の成果

(1) 調査の概要 (第2図、図版13)

屏風田遺跡第4次調査地は、大野城市横峰2丁目1235-4、1236-5・7に所在する。調査対象地で住宅建設が予定されていることから、平成20年4月25日に試掘を行った。その結果、現地表面下50~90cmで遺構が確認された。そのため約75㎡について発掘調査を実施した。発掘調査地は、牛頸川東岸の丘陵裾部に位置し、現地表面の標高は約48mを測る。調査は、平成21年2月2日~17日の間に実施した。

調査地の基本土層は、1層・しまりのある灰黄褐色粘質土(30cm)、2層・しまりのあるにぶい黄褐色粘質土(30cm)、3層・黒褐色粘質土(10cm)である。3層に遺物が少量含まれており、その下層(Aso-4火砕流堆積物層)を検出面とした。

その結果、溝跡6条、性格不明遺構7基、ピットを検出した。遺物は須恵器、土師器、石器などが出土した。

(2) 遺構と遺物 (第40図)

調査範囲は隣接地との境界に沿って略L字状を呈する。調査地西側の南北に細長い範囲では、北部でSX01とピット多数が確認され、中央部でSX02とその東側でピットが検出されている。調査区南西隅部分にSX03とSX07が位置する。調査区南部の東西に細長い調査範囲では、SX04、SX05とSX06に加え複数のピットが確認されている。調査区東端近くではSD01とSD02が略南北に並行して確認された。なお、SD02からは現代の陶磁器が出土しているため攪乱と判断した。その西側に略東北-南西方向の溝跡SD04とその北側のSD03が検出されている。以下、遺物の出土した遺構を中心に報告する。

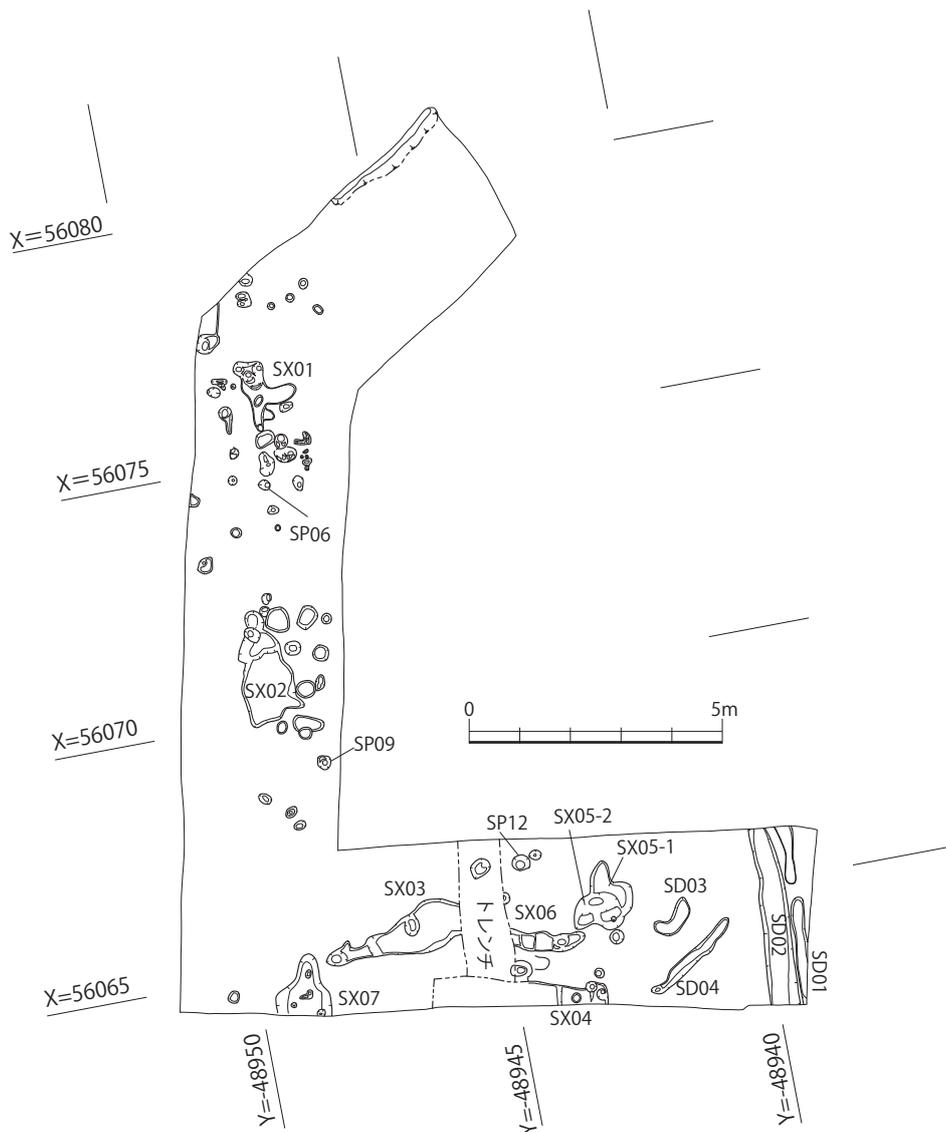
1) 溝

SD01 (第 40 図)

調査区東端に位置し、調査区外に南北に延びる。長軸方向は北西-南東方向で、中央部で一端途切れる。南部分は最大長 2.10 m、最大幅 0.27 m、深さは遺構検出面から最大で 4 cm である。床面は標高 48.7m でほぼ平坦である。北側の軸を同じくする部分は最大長 1.16m、最大幅 0.32m を測る。床面の標高は 48.7m で南側と同レベルであり、ほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色砂質土である。須恵器の細片が出土しているが、図化はできなかった。

SD03 (第 40 図)

調査区南東部分、SD02 と SX05 の間に位置する。西端部でやや湾曲するが長軸方向は SD04 とほぼ同じである。最大長 0.87 m、最大幅 0.49 m、深さは遺構検出面から最大で 2 cm と浅い。床面はほぼ平坦で標高 48.6m を測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。須恵器の細片が出土したが、

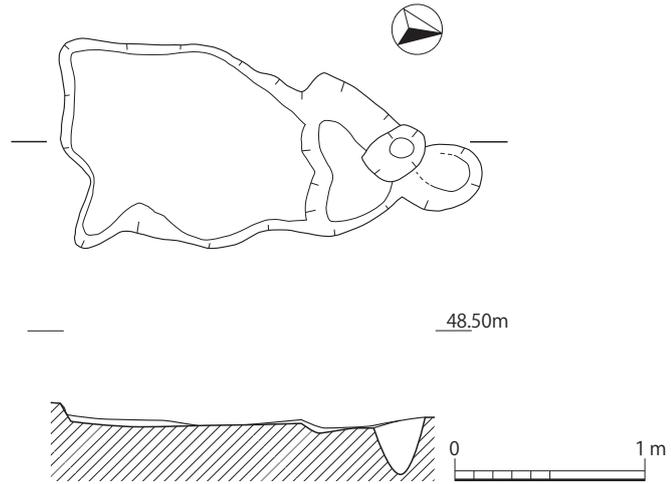


第 40 図 牛頸屏風田遺跡第 4 次調査区遺構配置図 (S=1/150)

図化はできなかった。

SD04 (第 40 図)

SD03 の南側に位置する。長軸方向は略北東—南西で、最大長 2.08 m、最大幅 0.24 m、深さは南西端のピット状部分で検出面から 6 cm を測る。床面は北東部から南西部へ 5 cm ほど低くなる。埋土は灰黄褐色砂質土である。須恵器細片が出土したが、図化はできなかった。



第 41 図 第 4 次調査 SX02 実測図 (S=1/40)

2) 性格不明遺構

SX01 (第 40 図)

調査区北部、調査地が北東方向に折れ曲がるあたりに位置する。平面プランは不整形で、浅いくぼみ状の遺構である。出土遺物は土師器の細片が出土するが図化はできなかった。

SX02 (第 41 図、図版 14)

調査区内の南北に細長い調査範囲の中央部に位置する。平面プランはやや南北に長い不整形で、浅いくぼみ状の遺構である。以下に示す資料以外に須恵器、土師器、弥生土器の細片が出土するが、いずれも図化できなかった。

出土遺物 (第 42 図)

須恵器

杯 (149・150) 149、150 とともに杯 G の蓋の口縁部片で、いずれも口縁部、かえりともに小さい。

SX03 (第 43 図、図版 14)

調査区の南西部に位置する。略東西方向に長軸をとり、西側が先細りになる。東側のトレンチ付近で最も幅が広がるが、東端部はトレンチで切られる。東西は最大 2.8 m、最大幅は 0.98 m、深さは検出面から最大で 20cm である。西端部はピット状に落ち込む。また、この落ち込みの東側が一段高くなり、そこから東側に向かって再度一段低くなる。出土遺物は以下に図示する資料以外にも須恵器、土師器の小片が出土するが、図化できなかった。

出土遺物 (第 42 図、図版 15・16)

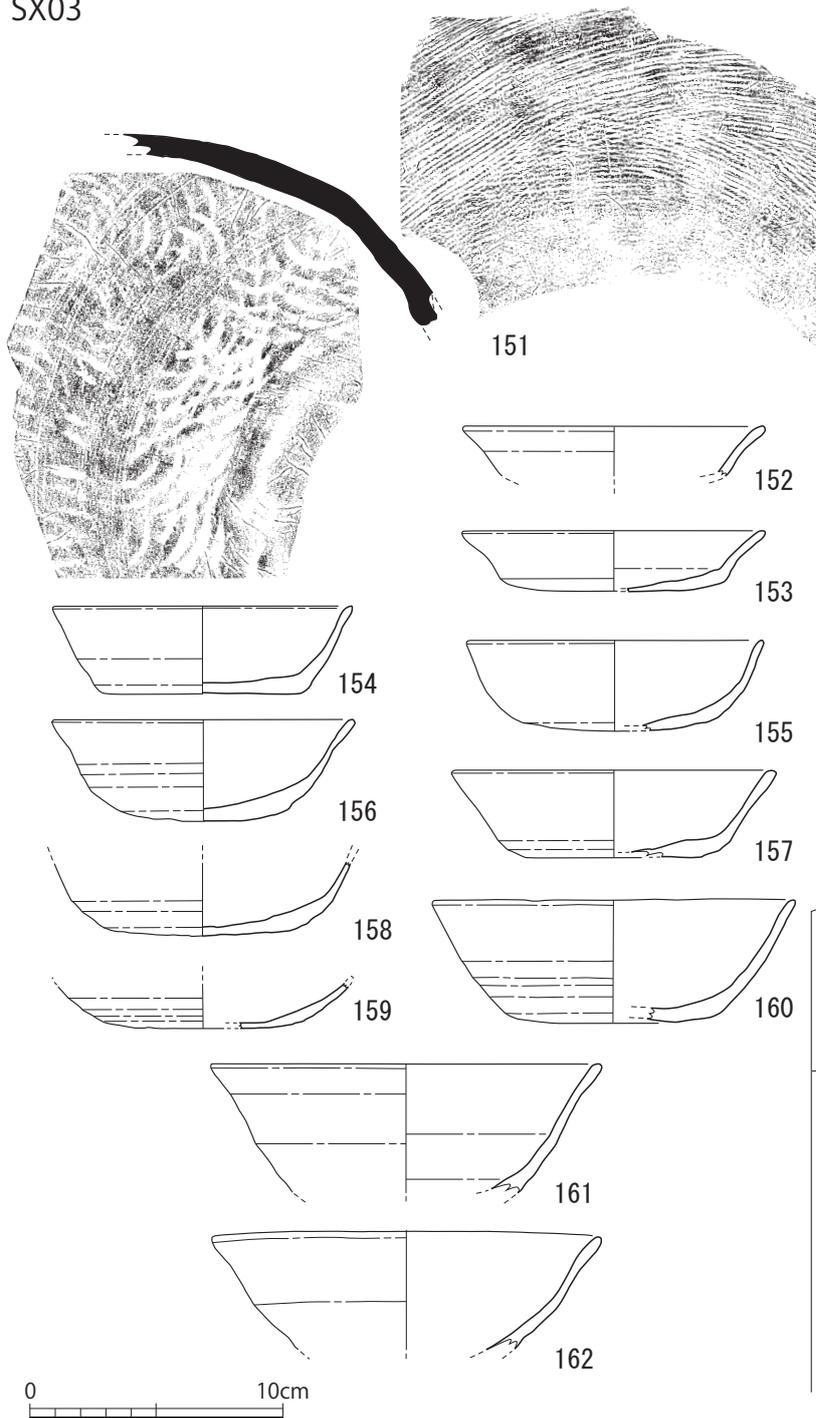
須恵器

横瓶 (151) 横瓶の胴部片である。外面は目の細かい平行タタキである。内面は当て具痕が残るがその上を幅 2 cm ほどの幅でナデ消す。胴端部は胴部横の貼り付け部分が剥離している。

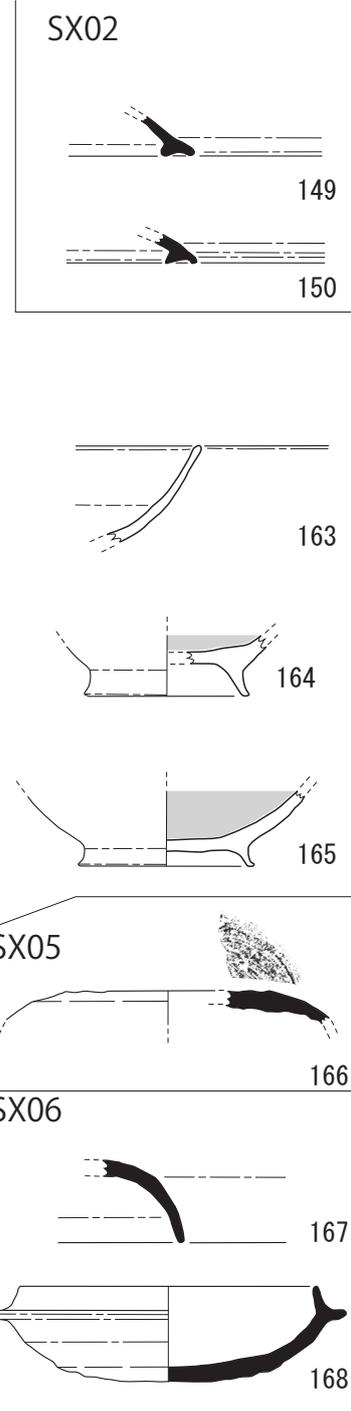
土師器

杯 (152 ~ 159) 152 は口径 12.0cm に復元できる。体部は口縁部に向かってやや外湾する。153 の底部外面はヘラ切り後ナデ、体部は内外面回転ナデである。底部から体部にかけて屈曲し、体部はやや外湾して口縁にいたる。口径 12.2cm、底径 9.0cm に復元でき、器高は 2.4cm である。154

SX03

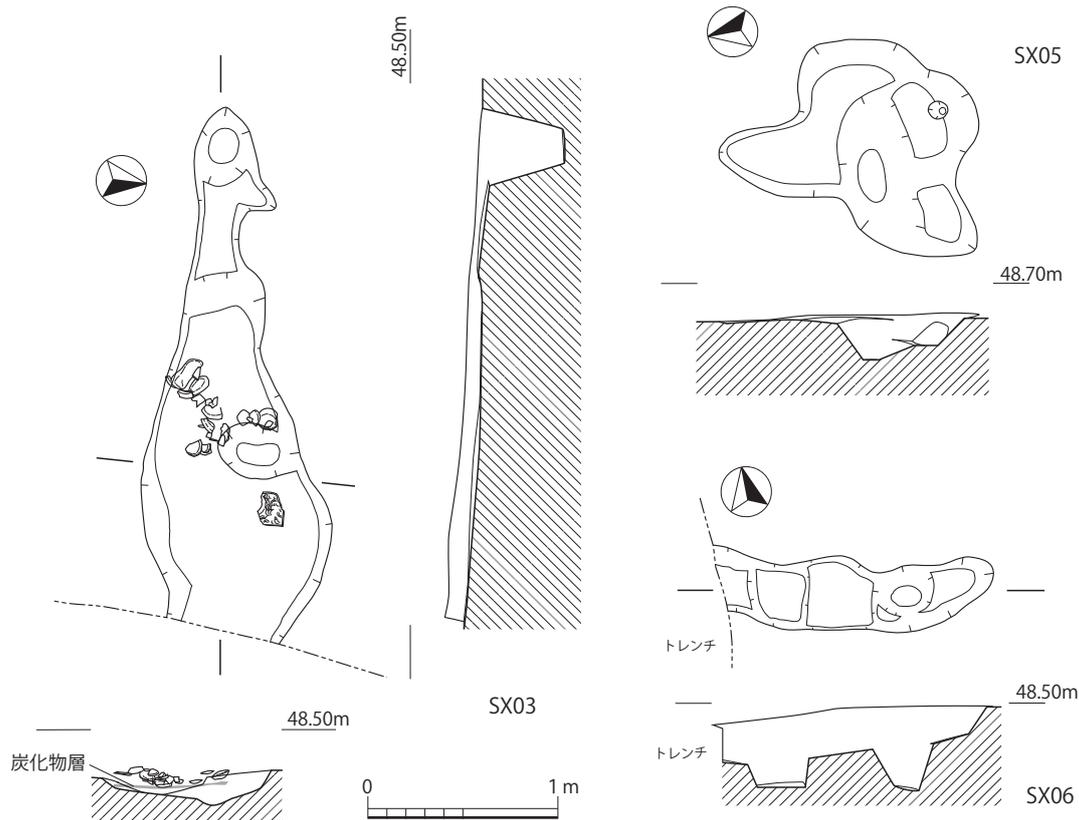


SX02



第 42 図 第 4 次調査 SX02、03、05、06 出土遺物実測図 (S=1/3)

はヘラ切りによる底部から直線的に体部が外に開く。口縁部がやや肥厚する。口径 11.8cm、底径 7.8cmに復元でき、器高は 3.5cmを測る。155 は底部から丸みのある体部がつく。底部外面はヘラ切りである。口径 11.8cm、底径 7.3cmに復元でき、器高は残存高が 3.6cmである。156 は丸底の杯で底部外面はヘラ切り後ナデである。体部と底部の境界は不明瞭である。口径 12.0cmに復元でき、器高は 4.1cmである。157 は平底の底部から体部が外に開く。体部中位で器壁が薄くなる。口径は



第 43 図 第 4 次調査 SX03、05、06 実測図 (S=1/40)

12.8cm、底径は 8.0cmに復元でき、器高は 3.6cmである。158 は杯の底部片である。底部外面はへら切りでやや丸底気味を呈する。159 も杯の底部片で、底部外面はへら切りである。底径は 8.0cmに復元できる。

椀 (160 ~ 162) 160 は底部ナデ、体部外面は回転ナデである。底部から体部が外に開く。高台は剥離している。口径は 14.4cm。底径 7.6cmに復元できる。161 は体部から口縁に向かって開くが、体部中位にわずかに稜を有し、口縁部がゆるやかに反る。体部内外面は回転ナデである。口径は 15.4cmに復元でき、残存高は 5.1cmである。162 は体部中位に稜を有し、口縁部がゆるやかに反る。口縁部を中心にややゆがみがある。口径は 15.4cmに復元できる。残存高は 4.7cmである。

黒色土器

椀 (163 ~ 165) 163 は黒色土器 A 類である。底部を欠損するが、丸みをもつ体部から丸く収める口縁部にいたる。残存高は 3.8cmである。164・165 とともに黒色土器 A 類椀の高台部である。やや低く厚みの薄い高台がつく。

SX05 (第 43 図、図版 15)

調査区の南部の東西に細長い調査範囲の西部に位置する。平面形は不整形で、南北にそれぞれ段がみられ、遺構の中央部が最も深くなる。南北方向で最大長 1.37 m、東西方向で最大 1.15 m、中央部で遺構検出面からの深さが 25cmである。出土遺物は以下に図示する資料のほかに、須恵器の小片が出土しているが、細片化しており図化できなかった。

出土遺物（第 42 図）

須恵器

杯（166）杯 H の蓋で、口縁部を欠損する。天井部は平坦で、外面にヘラ記号がみられる。

SX06（第 43 図、図版 15）

調査区の南部、SX05 の南に接して位置する。長軸をほぼ東西方向にとる溝状の平面形である。東西方向の最大長 1.5 m、最大幅 0.4 m である。床面はピット状の落ち込みや段による高低がある。最も深い部分で検出面から 44cm の深さを測る。西端部はトレンチによって切られる。出土遺物は以下に図示するものの他に、須恵器、土師器の細片が出土しているが、図化できなかった。

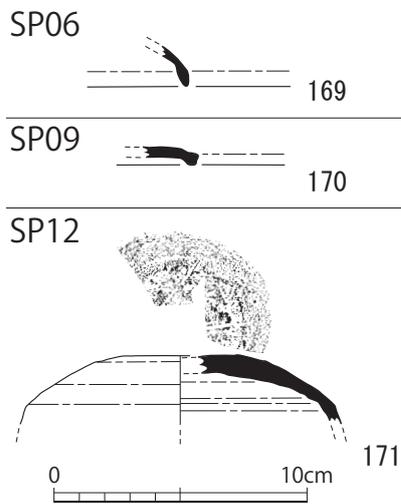
出土遺物（第 42 図、図版 16）

須恵器

杯（167・168）167 は杯 H の蓋の口縁部片で、口縁部から体部にかけて丸みをもつ。168 は杯 H の身である。丸みをもつ体部で、器高はやや低い。

SX07（第 40 図）

調査区の南西隅近くに位置し、調査区外南に延びる。そのため平面形態は不明であるが、遺構の北側は細長の半楕円形に突出する。東西方向の最大長は 1.1 m、南北長は 1.2 m である。床面の深さは遺構検出面から 10～20cm で南側に向かってやや低くなる。出土遺物は土師器片が出土したが、細片のため図化はできなかった。



第 44 図 第 4 次調査 ピット出土
遺物実測図（S=1/3）

3) ピット

調査区の全面で多数のピットが確認されたが、その内 SP06、09、12、18 から遺物が出土した。その他のピットからは、詳細不明の土器片、須恵器、土師器の小片が出土している。いずれも細片化しており器面の風化も著しく、図化できなかった。

SP06 出土遺物（第 44 図）

須恵器

杯（169）杯 H 蓋の口縁部小片である。端部はやや肥厚し丸く収める。

SP09 出土遺物（第 44 図）

須恵器

杯（170）杯 B の蓋小片である。口縁端部の下方への折れはほとんど消失しわずかに段を持つのみである。

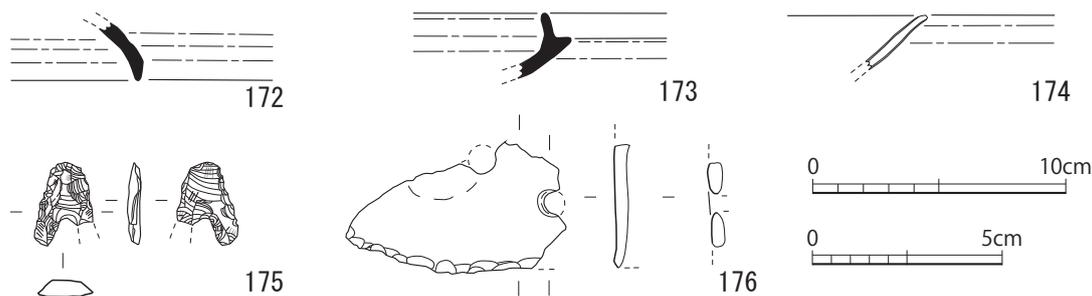
SP12 出土遺物（第 44 図）

須恵器

杯（171）杯 H の蓋で、器高のやや高い体部と考えられる。外面にヘラ記号がみられる。

4) その他の出土遺物（第 45 図）

溝や性格不明土坑の他に包含層からも遺物が出土している。以下に示す遺物以外にも、図化でき



第 45 図 第 4 次調査 その他の出土遺物実測図 (175・176 は S=1/2、その他は S=1/3)

なかったが須恵器や土師器の小片が出土している。

出土遺物

須恵器

杯 (172・173) 172 は杯 H の蓋の口縁部小片である。口縁端部をやや先細りに収める。173 は杯 H の身で、口縁の立ち上がりはやや内径し、端部を丸く収める。受け部は小さい。

磁器

皿 (174) 白磁の皿で、体部から浅く直線的に開く。内外面施釉で口縁端部は施釉後釉を掻き取り、口禿げになる。白磁皿 IX 類である。

石製品

石鏃 (175) 黒曜石製の石鏃である。基部は凹基で、片側の基部が欠損する。また片面に先端部から基部に向かう大きな剥離面がみられ、使用時の欠損によるものであろう。

石庖丁 (176) 表土中から出土した頁岩製の石庖丁片である。2ヶ所の穿孔が刃部に対し並行ではなく、刃部に近いほうは両面から穿孔している。そのため背側の穿孔が破損後の再加工によるものであろう。

(3) 小結

溝が 6 条確認されたが、SD02 からは近代の陶磁器が出土しており、それ以外で遺物が出土した溝を中心に報告した。しかし、いずれも出土遺物は須恵器の小片で資料化するに堪えないものであった。

性格不明土坑については、SX02 からは V 期の須恵器杯蓋の小片が出土した。SX03 からは横瓶の胴部片が出土している。ほかには、胴部中位に稜を有し、体部からゆるやかに反る口縁部がつく高台付椀が出土した。中島の分類による土師器椀皿類であろう。土師器杯は法量などから山本の X 型式、10 世紀末～11 世紀初頭頃のもので、遺構の時期もこの時期と考えるとよからう。SX05 からは杯 H の蓋、SX06 からは杯 H 蓋と身が出土している。前者は III B 期、後者は IV A 期とできよう。

遺跡の性格の詳細は不明であるが、弥生時代の石庖丁の他、6 世紀後半以降、白磁皿 IX 類の年代である 13 世紀後半～14 世紀前半までの遺構、遺物が確認された。

表7 牛頸屏風田遺跡第3次調査出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)〈残存値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
125	須恵器	杯蓋	SB02 : SP05	②(1.5)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を含む B : 良好 C : 内外N7/ 灰白色～N6/ 灰色			
126	弥生土器	深鉢	SB02 : SP03	②(2.6)	内面ナデ 外面突帯貼付け	A : 3mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B : 良好 C : 内10YR8/3 浅黄橙色 外10YR 8/2 灰白色～10YR3/1 黒褐色			
127	須恵器	杯	SP13	②(0.8) ③(8.1)	底部外面回転ヘラケズリ 内面ナデ	A : 2mm以下の白色砂粒を多く含む B : 良好 C : 内外N5/ 灰色			
128	須恵器	杯蓋	包含層	②(2.4)	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面ナデ 他は回転ナデ	A : 2mm以下の石英、1mm以下の白色砂粒を少し含む B : 不良 C : 内5YR6/4 にぶい橙色 外5YR5/4 にぶい赤褐色～5YR6/4 にぶい橙色			
129	須恵器	杯蓋	包含層	②(1.4) ③(7.0)	底部外面ヘラ切り後ナデ 他はナデ	A : 2mm以下の白色砂粒を含む B : 良好 C : 内外N6/ 灰色			
130	須恵器	杯蓋	包含層	②(2.35)	外面一部回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A : 3mm以下の白色砂粒、石英を少し含む B : 良好 C : 内5PB7/1 明青灰色 外5P7/1 明紫灰色			
131	須恵器	杯蓋	包含層	②(3.05)	外面一部回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A : 2mm以下の白色砂粒を多く含む B : 良好 C : 内N7/ 灰白色 外2.5Y6/1 黄灰色～2.5Y7/2 灰黄色			
132	須恵器	杯蓋	包含層	②(1.55) つまみ径2.2 つまみ高1.0	内外面回転ナデ	A : 3mm以下の白色砂粒、長石、石英を多く含む B : 良好 C : 内外N7/ 灰白色		器面荒れ	
133	須恵器	杯蓋	包含層	②(1.7)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を含む B : 良好 C : 内N6/ 灰色 外2.5Y6/1 赤灰色			
134	須恵器	杯蓋	包含層	②(1.15)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を含む B : 良好 C : 内外10Y5/1 灰色			
135	須恵器	杯蓋	包含層	②(1.35)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を含む B : やや軟質 C : 内外2.5Y7/1 灰白色			
136	須恵器	杯蓋	包含層	②(1.6)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を少し含む B : 良好 C : 内外N5/ 灰色			
137	須恵器	杯蓋	包含層	②(0.85)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を含む B : 良好 C : 内外N4/ 灰色			
138	須恵器	杯蓋	包含層	②(0.9)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を少し含む B : 良好 C : 内外N7/ 灰白色			
139	須恵器	杯身	包含層	②(1.7)	内外面回転ナデ	A : 1mm以下の白色砂粒を多く含む B : 良好 C : 内5PB6/1 青灰色 外5PB6/1 青灰色～5Y7/1 灰白色～N4/ 灰色		重ね焼き痕あり	
140	須恵器	杯身	包含層	②(1.8)	内外面回転ナデ	A : 4mm以下の石英、微細な白色砂粒を少し含む B : 良好 C : 内外N6/ 灰色			
141	須恵器	杯身	包含層	②(2.0)	内外面回転ナデ	A : 1mm以下の白色砂粒を少し含む B : 良好 C : 内外N8/ 灰白色			
142	須恵器	杯身	包含層	②(1.35) ③(6.3)	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A : 2mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B : 良好 C : 内N5/ 灰色 外N7/ 灰白色		外面にヘラ記号有	
143	須恵器	杯身	包含層	②(1.8) ④(8.8)	底部外面ヘラ切り後ナデ 他は回転ナデ	A : 2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B : 良好 C : 内外N6/ 灰色			
144	須恵器	杯身	包含層	②(1.1)	内外面回転ナデ	A : 微細な白色砂粒を含む B : 良好 C : 内N6/ 灰色 外5Y6/1 灰色		器面荒れ	
145	須恵器	壺?	包含層	②(3.05)	内外面回転ナデ 外面上位2条の沈線が 巡る	A : 微細な白色・褐色砂粒、雲母を含む B : 良好 C : 内外N7/ 灰白色			
146	須恵器	把手付き 甕	包含層	②(4.3)	把手部ナデ成形 他は回転ナデ	A : 微細な白色・黒色砂粒を含む B : 良好 C : 内外N5/ 灰色～N4/ 灰色			
147	須恵器	甕	包含層	②(3.95)	外面下位波状文 内面ヨコナデ 外面上 位突帯貼付け	A : 2mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B : 不良 C : 内5YR5/3 にぶい赤褐色 外7.5YR5/3 にぶい褐色			
148	須恵器	甕	包含層	②(3.4)	肩部外面平行叩き・カキメ 肩部内面同 心円文当て具痕 他はヨコナデ	A : 微細な白色砂粒、石英を含む B : 良好 C : 内外5Y7/1 灰白色		器面荒れ	

表8 牛頸屏風田遺跡第4次調査出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径④高台径⑤最大径※(復元値)〈残存値〉			
149	須恵器	杯蓋	SX02	②(1.5)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/灰白色	
150	須恵器	杯蓋	SX02	②(1.2)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内7.5Y7/1 灰白色～7.5Y3/1 オリーブ黒色 外2.5Y5/2 暗灰黄色～2.5Y4/1 黄灰色	
151	須恵器	横瓶	SX03	②(11.3)	外面叩き後ナデ 内面当て具後ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10Y7/2 にぶい黄橙色 外2.5Y6/1 黄灰色～N6/ 灰色	
152	土師器	杯	SX03	①(12.0) ②(2.0)	外面回転ナデ 内面ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外5YR7/4 にぶい橙色～5YR5/1 褐色	
153	土師器	杯	SX03	①(12.0) ②2.4 ③(9.0)	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR7/2 にぶい黄橙色～10YR4/1 褐色	
154	土師器	杯	SX03	①(11.8) ②3.5 ③(7.8)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒を少し含む B:やや不良 C:内7.5YR8/3 浅黄橙色 外10YR8/3 浅黄褐色	
155	土師器	杯	SX03	①(11.8) ②3.6	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR7/4 にぶい黄橙色～2.5YR7/4 淡赤褐色	歪みあり 底部内面黒斑あり
156	土師器	杯	SX03	①(12.0) ②4.05	底部外面へラ切り 体部外面下位回転ナデ 他は調整不明	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10Y8/2 灰白色 外10YR8/2 灰白色、10YR2/1 黒色	外面黒斑あり 粘土紐痕あり
157	土師器	杯	SX03	①(12.8) ②3.5 ③(8.0)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む B:良好 C:内10YR7/2 にぶい黄橙色 外10YR7/3 にぶい黄褐色～7.5YR7/6 橙色	
158	土師器	杯	SX03	②(2.9) ③(7.8)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の雲母を少し、白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10Y8/2 灰白色～10YR2/1 黒色	
159	土師器	杯	SX03	②(1.8) ③(8.0)	底部外面へラ切り 内面ナデ 外面回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内10Y8/2 灰白色 外10YR7/4 にぶい黄褐色	
160	土師器	椀	SX03	①(14.3) ②(4.9)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外7.5YR8/4 浅黄褐色	口縁部歪みあり 高台剥離
161	土師器	椀	SX03	①(15.4) ②(5.1)	内外面回転ナデ 内面回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR7/3 にぶい黄褐色～10YR4/2 灰黄褐色 外10YR8/3 浅黄褐色～10YR4/1 褐色	外面器壁一部剥離
162	土師器	椀	SX03	①(15.4) ②(4.7)	内外面回転ナデ 内面体部下位指頭圧痕	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄褐色 外10YR8/2 灰白色	
163	黒色土器	椀	SX03	②(3.8)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐色 外7.5YR7/6 橙色	黒色土器A類
164	黒色土器	椀	SX03	②(2.4) ④(6.0)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内5Y2/1 黒色 外10YR7/3 にぶい黄褐色～5YR7/8 褐色	黒色土器A類
165	黒色土器	椀	SX03	②(3.0) ④(7.0)	底部外面へラ切り 内面ナデ 外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐色 外7.5YR7/4 にぶい橙色	黒色土器A類 粘土紐痕あり
166	須恵器	杯蓋	SX05-2	②(1.3) 天井部径(8.0)	天井部外面へラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内N4/ 灰色 外N6/ 灰色	外面へラ記号あり
167	須恵器	杯蓋	SX06	②(3.3)	内外面調整不明	A:1mm以下の白色・黒色砂粒、石英を含む B:良好 C:内外2.5Y8/2 灰白色	
168	須恵器	杯身	SX06	①(11.8) ②3.8 受け部径(14.0)	底部外面回転へラケズリ 底部内面ナデ 体部外面下位へラ切り 他は回転ナデ	A:3mm以下の石英、微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外7.5YR5/6 明褐色～10YR8/2 灰白色	
169	須恵器	杯蓋	SP06	②(1.5)	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色	外面降灰
170	須恵器	杯蓋	SP09	②(0.7)	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色～2.5GY6/1 オリーブ灰色	
171	須恵器	杯蓋	SP12	②(2.75)	天井部外面へラケズリ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色細砂粒を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～2.5GY7/1 明オリーブ灰色	外面へラ記号あり
172	須恵器	杯蓋	検出中	②(2.15)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N6/ 灰色～N5/ 灰色	
173	須恵器	杯身	検出中	②(2.6)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外5Y6/1 灰色～5Y5/1 灰色	
174	白磁	皿	トレンチ①	②(2.8)	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉2.5GY8/1 灰白色 胎土 7.5Y8/1 灰白色	太宰府分類 白磁皿IX類
175	石製品	石鏃	包含層	残存長2.2 幅2.2 最大厚0.4 重さ0.6			黒曜石製
176	石製品	石庖丁	表土剥ぎ	残存長3.4 幅5.8 厚さ0.35 重さ10.0			頁岩製

4. まとめ

牛頸屏風田遺跡では、これまでA～C区で調査が行われており、7世紀後半の土坑や、中世、近世に属する遺構や遺物が確認されている。また、出土した陶磁器は13世紀代から18世紀初頭まで時期幅があることがわかっている。一方、屏風田遺跡の東から南東に広がる横峰Ⅰ・Ⅱ遺跡ではこれまで合計3次の調査が行われている。横峰Ⅱ遺跡第2次調査では焼土坑やピットが検出され、7世紀後半から8世紀にかけてと、10世紀後半から11世紀前半にかけての遺物が確認されている。

今回報告した第3次調査では遺構の時期は明確にできなかったが、出土遺物には7世紀後半から8世紀にかけてのものが多くみられた。上記の牛頸屏風田遺跡A区や横峰Ⅱ遺跡第2次調査の結果と類似した様相と考えることができる。

第4次調査ではSX03で10世紀末から11世紀初頭と考えることができる土師器や黒色土器が比較的まとまって出土した。横峰Ⅱ遺跡2次調査での所見と類似している。その他の遺構についてはSX05からはⅢB期の杯蓋が出土しており、6世紀後半頃の遺構の可能性がある。また、ⅣA期の須恵器がSX06から出土しており、6世紀末頃の遺構と考えることができる。

このようにみてくると、屏風田遺跡や横峰遺跡などでは7世紀後半から8世紀にかけてを主として人々の活動がうかがえ、また、10世紀後半ごろから11世紀前半にかけても人々の活動の痕跡を再度把握することができる。また、屏風田遺跡4次調査では、ⅢB期やⅣA期の須恵器が性格不明の土坑より出土しており、6世紀後半から末の可能性のある遺構も確認できる。さらに、屏風田遺跡A～C区の成果からは、その後近世まで何らかの形で人々の生活の舞台となっていると考えられる。近隣の横峰遺跡も含め、遺跡の性格自体は不明な点が多い。しかし、調査箇所が蓄積されてきたことで、遺跡形成の主たる時代、時期が把握できつつある。牛頸川をはさんで南西に位置する平野遺跡では7世紀中葉、8世紀から9世紀の遺構・遺物に加え、13世紀から14世紀頃が遺跡形成の主たる時期であることが明らかになりつつある。今後、平野遺跡の様相なども含めた周辺域における、古代から中世にかけての土地開発・利用に関する調査が進むことを期待したい。

图 版



(1) 平野遺跡調査区全景 1 (南から)



(2) 平野遺跡調査区全景 2 (南東から)

図版 2



(1) 平野遺跡調査区全景 3 (東から)



(2) 平野遺跡 竪穴状遺構 (南西から)



(1) 平野遺跡
縦穴状遺構セクション



(2) 平野遺跡
SK01 (南東から)



(3) 平野遺跡
SK02 (南東から)

图版 4





図版 6



(1) 牛頸塚原遺跡群 I 区
北半部全景 (西から)



(2) 牛頸塚原遺跡群 I 区
南半部全景 (西から)



(3) 牛頸塚原遺跡群 30 号墳
(北西から)



(1) 牛頸日ノ浦遺跡群 中央トレンチ全景1 (南西から)



(2) 牛頸日ノ浦遺跡群 中央トレンチ全景2 (南東から)



(1) 牛頸日ノ浦遺跡群 南トレンチ全景1 (南西から)



(2) 牛頸日ノ浦遺跡群 南トレンチ全景2 (南から)



(1) 牛頸日ノ浦遺跡群
中央トレンチ SD01 全景
(南から)



(2) 牛頸日ノ浦遺跡群
中央トレンチ SD01 土層
(南から)



(3) 牛頸日ノ浦遺跡群 南トレンチ SD01 全景 (左、北から) と遺物出土状況 (右、東から)





(1) 牛頸屏風田遺跡第3次調査区遠景（北から）



(2) 牛頸屏風田遺跡第3次調査区全景（北東から）



(1) 牛頸屏風田遺跡第3次調査 SB01 (北西から)



(2) 牛頸屏風田遺跡第3次調査 SB02 (北西から)



(1) 牛頸屏風田遺跡第4次調査区全景（南から）



(2) 牛頸屏風田遺跡第4次調査区北部全景（南から）



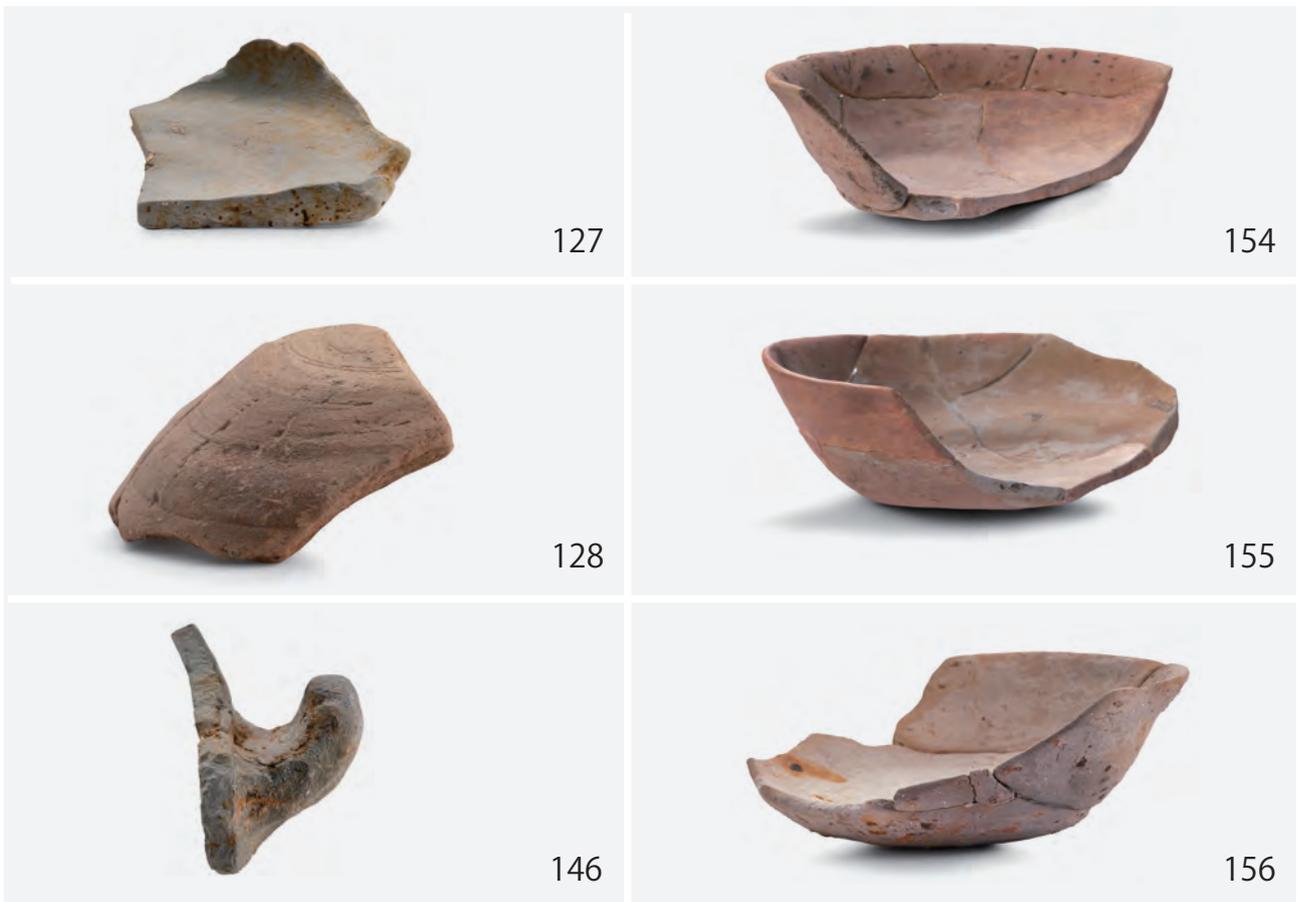
(1) 牛頸屏風田遺跡第4次調査 SX02 周辺 (北から)



(2) 牛頸屏風田遺跡第4次調査 SX03 遺物出土状況 (南西から)



(1) 牛頸屏風田遺跡第4次調査 SX05、06 周辺 (西から)



(2) 牛頸屏風田遺跡第3、4次調査出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ひらのいせき うしくびつかはらいせきぐん うしくびひのうらいせきぐん うしくびびょうぶたいせき							
書名	平野遺跡2	牛頸塚原遺跡群2	牛頸日ノ浦遺跡群2	牛頸屏風田遺跡2				
副書名								
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第217集							
編著者名	石川健							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2024/3/31							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらのいせきだいいちじちようさ 平野遺跡第1次調査	福岡県大野城市 牛頸3丁目15、17	402192		33° 30' 06"	130° 28' 15"	2002/7/18 ～ 8/22	240㎡	住宅・医院建設
うしくびつかはらいせきぐんく 牛頸塚原遺跡群I区	福岡県大野城市 大字牛頸1490-1	402192		33° 30' 15"	130° 28' 10"	1992/7/8 ～ 8/19	300㎡	学習塾建設
うしくびひのうらいせきぐんだい 牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査	福岡県大野城市 若草3丁目1631番、28番	402192		33° 30' 27"	130° 28' 12"	2004/8/4 ～ 9/7	270㎡	宅地造成
うしくびびょうぶたいせきだいいちじちようさ 牛頸屏風田遺跡第3次調査	福岡県大野城市 横峰2丁目1236-4、1235-1	402192		33° 30' 16"	130° 28' 24"	2008/7/22 ～ 8/18	110㎡	住宅建設
うしくびびょうぶたいせきだいいちじちようさ 牛頸屏風田遺跡第4次調査	福岡県大野城市 横峰2丁目1235-4、1236-5・7	402192		33° 30' 16"	130° 28' 23"	2009/2/2 ～ 2/17	75㎡	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平野遺跡第1次調査	集落	平安時代 鎌倉時代 室町時代	竪穴状遺構 土坑 ピット	須恵器・土師器・黒色土器・ 輸入陶磁器・石器				
要約	竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡3棟、土坑2基、ピット多数を検出した。平安時代の遺構として土坑が確認され、平安時代末から鎌倉時代初頭の遺構としてSB02、SK02が確認された。竪穴状遺構は出土遺物から13世紀後半から14世紀前半の遺構と考えられる。SB01、03もほぼ同時期の遺物が確認された。平野神社周辺における古代から中世にかけての様相を把握するうえで、重要な調査成果である。							
牛頸塚原遺跡群I区	古墳	古墳時代	古墳 土坑 溝					
要約	30号墳を調査地南東部で確認した。遺構は調査区外に延びるため全容は不明である。しかし、石室プランの検討などから5世紀後半以降造墓が始まる当該古墳群のなかでも初期の段階の古墳と考えられる。このほかに時期は不明であるが、SD01やSK01なども確認できた。							
牛頸日ノ浦遺跡群第2次調査	集落	古墳時代 奈良時代	溝 ピット	須恵器・土師器				
要約	調査地内に3箇所のトレンチを設定し調査を行った。その結果、中央区と南区で一連の溝であるSD01を確認した。中央区のSD01からは6世紀末頃の杯に加え、8世紀代の杯や皿あるいは長頸壺が出土した。南区のSD01でも同様に6世紀末の須恵器を中心に、8～9世紀の杯Aが出土している。土層断面からは古墳時代後期の溝掘削の後、複数回掘り直しを確認できる。溝の埋没年代は8世紀から9世紀頃と考えられる。							
牛頸屏風田遺跡第3次調査	集落	古墳時代 奈良時代	掘立柱建物 土坑 ピット	須恵器・土師器				
要約	調査の結果、掘立柱建物2棟が確認された。また、SX01～03の土坑とピット多数が確認された。出土遺物は小片が多く、時期を把握できる遺構は少なく、掘立柱建物については時期を確定できなかった。SP13は7世紀後半から8世紀前半のものと考えられる。その他の出土遺物は、6世紀末以降、7世紀中葉から8世紀代の遺物が主である。そのため遺跡形成の主な時期は7世紀から8世紀にかけてと考えることができる。							
牛頸屏風田遺跡第4次調査	集落	古墳時代 奈良時代 平安時代	土坑 溝 ピット	須恵器・土師器・黒色土器・ 輸入陶磁器・石器				
要約	調査の結果、不整形で性格不明の土坑が計7基、溝状遺構4条、ピット多数を確認した。多くの遺構で出土遺物が少なく、かつ細片であった。そのため時期を確定できる遺構は必ずしも多くはない。SX06は6世紀末頃、SX02は7世紀中頃、SX05は6世紀後半の遺構と考えられる。SX03からは10世紀末から11世紀初頭の土師器杯と椀が出土した。その他に包含層などから13世紀後半から14世紀前半を中心とした遺物が出土した。とくに周辺遺跡で確認された平安時代の遺構・遺物は必ずしも多くはないため、貴重な調査成果である。							

大野城市文化財調査報告書 第217集

平野遺跡2

牛頸塚原遺跡群2

牛頸日ノ浦遺跡群2

牛頸屏風田遺跡2

令和6年3月31日

発行 大野城市
〒816-8510
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 株式会社コーユービジネス
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前3-13-1

平野遺跡2

牛頸塚原遺跡群2

牛頸日ノ浦遺跡群2

牛頸屏風田遺跡2



大野城市文化財調査報告書

第217集

大野城市